

宇宙の絆

秋華

宇宙の絆 II

5年ほど前、ネット界最大のゲーム「宇宙の絆」に、決着がついた。

賞金総額10億円を目玉にゲームユーザを集めて、1000万人のサイト会員を集めたこのサイトは、あらゆるネットサービスを統合し更なる進化を遂げる。

ネット上でできる事で、此処でできない事はほとんど無いし、ゲーム料金自体も無料である事から、ユーザを集めるだけで無く、ゲームプレイもユーザの実に50%を越えた。

ますます進化を遂げるバーチャル世界は、自分の分身が生活する世界として、完全に人々に定着してゆく。

「宇宙の絆」の決着がついた後、「銀河バリューネット株式会社」は、戦国時代を舞台にしたゲーム「戦場の星」で更にユーザを集めた後、再び「宇宙の絆」に原点回帰する。

それが先頃リニューアルされた、「宇宙の絆II」である。

前作からはかなり内容を一新しており、はっきり言って完全に別物のゲームだ。

それでもレベル等、色々な部分で引き継がれているし、移行は強制的な部分があったから、ゲーマーのほぼ全てが参加する事になった。

最初は文句を言っていたユーザも、なれるうちに完全にはまり出す。

まあその中に、この俺「柳生一生」も含まれるわけだけど。

俺は前作のあの10億円争奪の頃からのユーザだ。

紫苑さんの軍に所属し、四天王と呼ばれるうちの一人、群青さんの艦隊に所属していた。

正直な話、俺達は強かったから、優勝はもらったと思っていた。

しかし群青さんをはじめ、他の四天王達も紫苑軍を裏切り、ジーク軍に寝返った。

紫苑軍は一気にバラバラになって、軍は壊滅した。

だから俺は結局行く場所が無く、どうしようかと思っている間に、一気にダイユウサク軍の勝利で決着がついた。

後で聞いた話だけど、ダイユウサク軍は、あの森ノ宮学園高校ゲーム部卒業生の集まりだったらしい。

別のネットゲーム、「バトルグリード」の「ドリームダスト」で有名な人達だ。

だからまあ、順当って言えばそうなのだけど、それにしても完全に大番狂わせだと思ったよ。

とても悔しかったから、新作の「戦場の星」へのプレイ移行はせず、2ラウンド目をプレイする事にした。

賞金は無かったけど、残ったプレイヤも多くて、そこそこ楽しめた。

ただ、これまでの経験とゲームの進化から、最初3年かかった決着は、数ヶ月から1年以内でつくようになって、面白みは半減していた。

何度か優勝者がでて、俺も優勝軍に所属していたりしたから優勝もしたけど、だんだんと飽きてきていたのも事実。

だから移行には、多少文句は言ったものの、「宇宙の絆II」は、次第に俺を完全にゲームの世界に引きずり込んでいた。

アライヴ「俺は人型で出るから、艦長よろw」

紫苑「(^0^)」

今俺は再び紫苑さんが作った軍、紫苑軍に所属している。

今回のゲームでは、我が陣営には、かつて紫苑軍での主力だった四天王は存在しない。

古くからの仲間は、紫苑さんと紫陽花さんと、後はスピードスターさんくらいか。

他にもあの頃の仲間はいたけど、別部隊だったからあまり覚えていない。

アライヴ「艦船狙うから、此処はみなさん任せた！」

紫陽花「はいはい～」

スピードスター「♪」

俺は人型と言われる、ガンダムで言うところのモビルスーツのような機体をコントロールしている。前作ではあまり活躍しなかった人型だけど、今回のではかなり重要になっていた。

今回の「宇宙の絆II」では、戦闘機が存在しない。

艦船も1プレイヤー1隻で、戦闘は主に人型どうしの対戦が普通だ。

人型で相手の艦船や拠点を落とすのが、戦いのメイン。

しかも、シミュレーションゲームだけど、人型の対戦はアクションシューティングで行われるから、コントロールを得意とする人は人型に乗り、そうでない人は艦長をやるといった感じで楽しめるから、前作よりも高度で面白かった。

で、俺は元々シミュレーションよりもアクション派だから、人型で最前線だ。

アライヴ「艦船が撤退を開始！」

俺は艦船を守っていた人型を蹴散らし、艦船に攻撃を開始した。

俺一機に五機いた敵機は、戦闘不能になり、宇宙に漂っている。

艦船からの回収作業は間に合わず、艦船は高速で戦線を離脱した。

艦船が全速で逃げたら、人型一機で追いかけるのはかなり辛い。

燃料がすぐにそこをついてしまうし、そもそもトップスピードになった時の移動スピードが違うから。

だから追撃するのなら、敵が撤退行動を始めた直後か、人型を艦船に收容して、艦船で追撃する事になる。

今回の目的は目の前の要塞を手に入れる事だし、放置された戦闘不能人型を回収した方がメリットが大きい。

プレイヤーにしてもNPCにしても、パイロットを得る事は貴重だし、人型も修理すれば使える。

艦船だけでも少しは戦えるけれど、今回は人型がいないと戦闘にならないから。

俺は紫苑さんの艦船、「パープルアイズ」に帰還した。

紫苑「おつ」

アライヴ「楽勝だったねw」

今回の戦闘は楽勝だった。

相手は前作から見る名前だったけど、さほど有名人ではないし、おそらくただ単にゲームを楽しんでいる人なのだろう。

俺が艦内に人型を格納すると、画面は標準のシミュレーション画面へと戻る。

紫陽花「お疲れさま～」

スピードスター「相変わらず強いね♪」

二人が俺を迎え入れてくれる。

といっても、艦船は違うから、別の艦船からの通信という事になるのだけれど。

アライヴ「相手が弱かっただけだよ。」

紫陽花「敵はやっぱりカズミン？」

アライヴ「まね。奴を倒さないと、このゲームでの勝利はないからねえ。」

カズミンは、ダイユウサク軍のエースで、別のネットゲーム「バトルグリード」でも何度も優勝している強者だ。

ダイユウサク軍は、元々アクションシューティングが得意な人が多いから、優勝候補として、すでに皆に知られている。

前回もそれなりに名前は知られていたから、さりげなく何処の軍も戦いを挑まなかったって話もあるけれど。

アライヴ「回収した人型、どう？」

俺は、我が軍で回収した、先ほどの人型が気になっていた。

対戦してさほど強くは無かったけれど、機体はなかなか良さそうだったし、NPCキャラも何人かいたから、戦力アップが期待できた。

紫陽花「こっちは、プレイヤー1人は仲間にならなかったけど、機体は頂いたわよ～」

紫苑「3人全部NPC、はずれ。機体だけ。」

スピードスター「プレイヤーは駄目。機体だけ♪」

アライヴ「そっかぁ～」

要するに、5機回収したけど、パイロットの収穫はゼロって事だ。

まあ、人型だけは手に入れたから、最低限の収穫はあったけれど、今回のゲームは以前よりも厳しい。

前回のゲームと同様、今回のゲームにも実は、賞金が出る。

総額20億円と言われているが、はっきりとそう言っているわけではない。

今回が前回と違うのは、優勝軍のみに賞金がでるのではなく、活躍によってクライアントが分配するシステムに変わった。

ポイント制のようだが、そのシステムは公開されていない。

それでもやはりその多くは優勝軍に配分されると言われているわけで、賞金はゲーム終了時となる。

だからクライアントとしては、できるだけ長くゲームを続けてもらいたいわけだ。

それで今以上に人を集めて、ゲームとしてのポータルサイトナンバーワンを確固たるものにしたいという思惑がある。

だから今回のゲームに登場するNPCは、弱者に優しく強者に厳しい設定となっているようなのだ。

ただ、前回のような爆大なデスペナは無い。

デスペナとは、デスペナルティー、死んだ時のペナルティだけど、前作は死んだら金以外の全てを失い、レベルも半分だった。

しかし今回は、レベルは経験値が少しばかり減る程度で、予備の艦船や人型が無ければ、ノーカスタムのものが与えられる親切設定だ。

それに人型の戦闘で死ぬことはまず無くて、戦闘不能状態になった後、3時間誰にも回収されない場合のみ死となる。

戦闘不能状態の機体に、更に攻撃を加えて完全破壊する事もできるが、そんな事をする人はまずみられない。

艦船の場合は、落とされて脱出もできない場合は死だけど、今のところまだ落とされた事はない。

ちなみに旗艦が落とされて死んだら、前は軍の滅亡だったが、今回は他のプレイヤーに引き継がせる事ができるから、前回ほどのリスクが無いのは良かった。

さて、今の俺の立場だけど、俺は紫苑さん率いる紫苑軍に所属している。

俺の艦船はドックに格納されたままで、人型を紫苑さんの旗艦に持ち込んでいる感じだ。

艦船には、10機の人型を乗せる事ができ、プレイヤーとNPC合わせて11人でひとつの艦船を形成する。

もちろんそれ以下でも別にかまわない。

俺は旗艦直属の人型パイロットとして、紫苑さんのパープルアイズにいるわけだ。

自分の艦船で出航して、NPCに艦船を任せて、自分は人型で出撃なんて事もできるが、艦船を落とされるリスクが格段にあがるのでやめている。

初心者ならまだ物量作戦って事でそれでも良いかもしれないけれど、俺くらいのパイロットなら数よりも質だ。

もちろん紫苑さんが出撃できない時もあるから、その時は紫陽花さんや、自らの艦船で出る事もあるけどね。

ここまで色々前作との違いを話してきたが、まだ最大の違いを話していなかった。

前作では、自分がネットにつないでいない時は、自分をCPUが動かして守りをしてくれていたが、それが無くなった。

つまり、人がいない時に攻めれば、完全に守りが手薄になっているということだ。

そうすると平日の昼間や明け方なんかは、絶好の攻め時となってしまう。

そこで、戦闘を行う事ができる時間を設定されていた。

平日は19時～24時まで、休日は24時間全てとなっていた。
だからまあ普通の一週間なら、長く戦いたければ、土曜日の19時から日曜の24時までとなるわけ。
それはそれでかなりつらいけれど、軍はひとりではないからね。

紫苑「(^0^)/~~」

紫陽花「私たち寝ます～お疲れさま～」

スピードスター「おつ♪」

アライヴ「お疲れ～」

奪い取った拠点の設定を終えると、紫苑さんをはじめ、みんなはネット世界から消えていった。
時間は24時を少し回ったところ、そして明日は平日だからもう戦闘ができない時間だ。
それを確認して、皆は眠りについた。

さて俺は・・・

奪った拠点に貯蓄してあった燃料を、少し拝借する。

といっても人型の燃料はさほど多くはない。

艦船1隻の燃料の1億分の1程度。

無いと言っても良いくらいだけど、無いとまあ動かないわけで。

ちなみに共有しているエネルギーや物資などを使うには、その時ネット回線につないでいる友軍のプレイヤーの将官クラスの人か、その拠点管理者に許可を得なければならないが、今は准将なので関係ない。

まあ戦闘可能時間外なら、燃料無しでも人型は移動可能なんだけどね。

移動できずにその他のサービスまで使えないと、クライアントが儲からないから。

俺は必要無い燃料をいっぱいまで補給すると、今日この拠点を攻める前にいた、有人要塞へと向かった。

ちなみに今回の「宇宙の絆II」は、拠点の種類に修正があった。

前回は、有人惑星、コロニー、有人移動要塞、要塞の4種だったわけだけど、今回は7種。

地球、月、コロニー、要塞、移動要塞、有人要塞、要塞戦艦だ。

地球と月、そしてコロニーと有人要塞は、生産性を持っている。

それ以外は開発や生産はできても、金が増えたり物資を生産する事はできない。

移動要塞のマップ間移動は不可能になり、代わりに要塞戦艦ができた。

これは要塞としても、艦船としてもカウントされない特殊なもので、10199ある宇宙マップに3隻だけ存在する。

ちなみに10199マップ全てに拠点と言われる、コロニー、要塞、移動要塞、有人要塞のいずれか1つが存在する。

要塞戦艦が有るマップだけは、拠点が複数存在する事になるわけだ。

で、101×101のマップの中心からやや外れたところにある1つのマップが、月だ。

月は生産性が馬鹿高い拠点で、誰もが欲しい拠点の一つだ。

そしてマップの中心にあるのが地球である。

そこに入ると、別のマップへと移動する事になる。

地球マップも30×100にわかれており、全てに街を持った拠点が存在する。

月ほどではないけど、コロニーよりも高い生産性を持っている。

その全てから、宇宙の地球周りにある8マップへと移動が可能。

地球の周り8マップは中立領域で、そこにある要塞はすべて中立要塞となり、軍に所属していない人や初心者が利用する。

ちなみに買い物等全てが可能な特殊な要塞だ。

とにかく、俺は紫苑軍の拠点である有人要塞へと戻ってきた。

ココは生産性の有る拠点の中では最前線の場所で、紫苑軍の戦力のほとんどが集まっていた。

NPCがパイロットの人型も、多数配置してある。

艦船には10機しか搭載できない人型も、拠点には数多く配置できる。

上限は決められているが、この有人要塞は、100機まで配置できた。
艦船も20隻入る事ができるから、合計300機の人型を配置できる計算だ。

でも、そんな戦力があるはずもないけどね。

現状我が軍は、まだまだ弱小軍である。

といっても、始まってまだ半年、それほどでかい軍は存在しない。

一番大きい軍は、前回は強かったジーク軍、次が初代チャンプのダイユウサク軍か。

他はまあ皆どっこいどっこいだろう。

あのサイファさんも、今は弱小軍だし。

サイファさんは、うちの軍と友好的なプレイヤーで、同盟関係にあるサイファ軍の大將だ。

最初の戦いで、一番強かったと言っていい人。

あの時からうちの大将とは仲良しだし、今回も共同戦線をはっている。

一生「さて・・・寝る前に、整理するか・・・」

俺は自分の艦船「ノレン」に戻ると、コマンド選択画面を開いた。

自分の旗艦、艦船に戻った時だけ行える行動があり、それをする為だ。

ちなみに舟を下りれば、リアル世界用コマンドも可能だ。

要塞内には、ゲームに関係ない、リアルマネーでリアルな買い物をする場所や、ネット銀行やネット証券会社がある。

そしてそれを利用すれば、アイテムやNPCの人材が手に入ったりするわけで、ゲームとリアルでの相乗効果が抜群のシステムだ。

ゲームをしている人は、アイテムほしさにココで買い物をするし、そうでない人はアイテムをリアルマネーでゲーマーに売る。

そうしてこのゲーム会社は人を集めたわけだ。

で、今俺がしているのが、今までに軍から配分された、ジャンクパーツやNPC人員の整理だ。

いる物といらぬ物を分け、いらぬ物は売りに出す。

良い物はリアルマネーで、そうでない物はゲーム内ドルで。

拾った人型もいくつかある。

人型は、ひとり5機まで予備をもてる。

俺が今使ってる愛機は、名を「キュベレイ」と言って、あの人気アニメ、Zガンダムのモビルスーツから名を拝借した。

それ以外にも、移動用高速機を一機持っているが、他は予備を持っていない。

といっても、艦船にも3機いるし、10機まで乗せる事が可能だから、実質16機まで持つ事が可能。

軍としてなら共用の人型ももてるから、実際は限りなくもてるとも言えるけれど。

ちなみに艦船も予備を5隻もてるから、こちらは合計6隻となる。

俺はノレン以外に、次期母艦を作成中だ。

まあ人型乗りの俺に、艦船が必要かと言えば、正直いらぬのだけれども、まあいざという時の為にな。

整理していると、拾った人型の一機が、なかなか高性能で俺好みだった。

ボロボロだから、直して使うにはかなりの金と時間がかかりそうだけど、一応3機目の愛機にしよう。

そう思って、愛機専用のドックに入れた。

他2つはいらぬから、必要なパーツだけを取って、後は分解して売りに出しておいた。

艦船には人型が3機有るけど、それを動かすパイロットがいぬからね。

すぐに人型が必要でもないし。

一生「ふう～・・・さて、寝るか。」

俺は全てを終えると、PCの電源を落とした。

ベッドに横になると、明日の事を考えた。

俺は特に仕事はしていない。

ついこの前までは大学生をしていたが、つまらなくて辞めた。
かといって仕事をするわけでも、専門学校に行くわけでもない。
時々バイトをしている程度だ。
明日も別に何かあるわけではない。
ああ、明後日はバイト久しぶりに入れていたかなあ～
そんな事を考えていたら、いつの間にか眠りについてた。

共同戦線

ゲーム内で売りに出したものは、ゲーム内で取引できる物に限って、ジャンク屋が代わりに売買をしてくれる。

リアルな物も、ゲーム会社にとって預ければ、ゲーム内取引が可能になる。

でもその場合、手数料はかなり取られるから、それなりに高いものじゃないと割に合わないわけだが。で、俺はジャンク屋が集まる場所へと来ていた。

先日手に入れた人型を、修理してカスタマイズする為と、愛機キュベレイをパワーアップする為のパーツを探しに。

他人にはいらぬものでも、俺には宝だったり、俺にはゴミでも、他人には必須アイテムだったりするから、ココはマメにチェックしなければならない。

大きく分ければ、人型乗りは艦船用パーツはゴミだし、艦船を動かす人は、人型を繊細にカスタマイズするアイテムは、それほど必要ではないというわけだ。

中でも脳波誘導システムによる遠隔操作武器は、プレイヤーがパイロットでないと使えない。

一部使えるNPCがいるらしいが、俺はまだお目にかかった事はないから、ただの噂かもしれない。

それにやたらと使い方が難しいから。

間違ったら自分で自分を攻撃してしまうなんて、初心者は必ずやってしまうほどだ。

だから遠隔操作武器は結構売りに出されている。

だけど俺は好んで、これらの武器を使う。

ま、理由は我が愛機の名前から分かってもらえると思う。

ほとんどがビームを発射する、ガンダムで言うところのファンネルのようなものだけど、中には小型の人型のようなものもある。

全てがうまく動けば、それはもう最強だ。

全てはさすがに無理だろうけどね。

俺は「ファンネル」を3機と、小型の人型を1機、後は通常ショップでウイングを4機購入した。

ファンネルって名前は、完全にガンダムの「ファンネル」のパクリであろうことは想像にたやすい。

4機も買ったウイングは、地上戦で役立つアイテムだ。

我が軍の領域は、地球から遥か遠いところに有るから、かなり戦域を広げても、地上戦はまだまだ必要無い。

でも地上だと飛べる事はかなりのメリットになるから、早めに準備というわけだ。

宇宙戦を得意とする俺にしてみれば、飛んで戦闘ができれば、あまり戦闘感覚を変えずに済む。

それでも微妙に違う部分もあるだろうし、ウイングをつけての戦闘にもなれておきたかった。

一生「さて、そろそろ19時になるな。」

19時になれば、戦闘が始まる。

だからその時間に合わせて、戦闘配置につかなければならない。

攻めるにしても守るにしても、それは必要だ。

俺は愛機キュベレイに搭乗すると、有人要塞カテーナから出る。

目指すは最前線の、先日手に入れた要塞ギャオスだ。

ちなみに要塞の名前は、最初に手に入れた人が勝手につけられるものだから、変なものも多い。

ギャオスくらいならまだ普通だ。

放送禁止なのも多くあり、あまりにひどいのはクライアントから修正が入る。

今では所有軍のいない拠点は無いから、これから名前をつける事はもう不可能ではあるが。

ギャオスでは、すでに紫苑さん達が動いていた。

アライヴ「こんちわ〜」

紫苑「(^0^)/」

紫陽花「こんばんは〜」

スピードスター「♪」

皆一斉に挨拶する。

まあ通信は、友軍で有ればいつでもできるし、そうでなくても相手の名前さえわかればいつでも通信を試みる事ができるのだけど、なんとなく会った時にするのが普通になっていた。

アライヴ「今日はどうするの？」

俺は、作戦の全てを、紫苑さんに任せている。

初期の大戦で、四天王の裏切りが無ければ優勝していた可能性があった人。

シミュレーションゲーム時なら、トップクラスのゲーマーだ。

だからこの人と組んでいるわけで。

紫陽花「今日はサイファ軍と共同で、万古を落とすわよ。」

・・・

微妙な名前の要塞だけど、何故かクライアントからの修正が入らない。

昔あったマクロスってアニメの歌の中でも使われているらしいし、普通の言葉としてちゃんと存在するようだ。

それよりも「共同」って言葉を聞き流すところだった。

アライヴ「あそこって、凄く強固な要塞だよな。これだけの戦力でいけるの？」

紫陽花「私たちは手伝うだけ。前に手伝ってもらった事あったから。カテーナ落とす時にね。」

そういえば、俺がバイトでどうしてもゲームできない日が何日かあって、戻ってきたらすでにうちが持ってたんだったな。

カテーナって。

そういう事だったんだね。

アライヴ「オッケー！俺は暴れられればそれで良いし（笑）」

紫陽花「ではココは私に任せて、みなさん行ってらっしゃい〜」

紫陽花さんは、ココの守りに残るようだ。

まあ周りには、特に強いところもないし、紫陽花さんなら余裕だろうな。

俺は一度パープルアイズにキュベレイを着艦させた。

キュベレイから降りると、パープルアイズのスタッフが、機体の整備をしてくれる。

ちなみに艦船の乗組員は、艦船のパーツ扱いだ。

人は11人までで、その他乗組員はパーツという事。

俺はシミュレーション画面が変わってから、再び通信画面で話をした。

まあ同じ艦なのに通信ってのもおかしいし、チャットだから何処にいても喋れちゃうわけで、表現が難しい。

携帯電話を持っていて、いつも携帯電話で話す感覚かな。

いや、複数人で喋る事も可能なので、スカエポか。

そういえば近くスカエポがゲームに導入されるとか噂もあるけど、使っている人は既にゲーム外部で使っている。

アライヴ「で、俺は何すれば良い？」

紫苑「作戦は、合流してから(^0^v)」

スピードスター「サイファから説明が♪」

アライヴ「なるほど。」

どうやら今回は、ほんとに手伝うだけのようだ。

まあサイファさんも、紫苑さんと同じくらい戦略戦術に長けているから、別に心配はない。

そしておそらく今日も勝てるだろう。

まもなくしてサイファさんの旗艦、「補給できないじゃまいか！」と合流した。

つか、艦船の名前適当だなあ〜

思わず苦笑いだ。

でもこのへんが、サイファさんの強さなのかもしれない。

楽しんでいるなと思った。

サイファ「ども！今日はわざわざありがとうございます。」

紫苑「(^O^)/」

・・・しゃべり方から考えると、あんな名前を付ける適当な人とは思えないな。

サイファ「今日の作戦なんですが、私の旗艦の波動砲で蹴散らす作戦なんで、要塞近くに人型を集めてほしいんです。発射する寸前でみなさんには戦場を離脱してもらう必要があるんですが、大丈夫ですか？」

おいおい、波動砲って何よ？

昔ヒットしたアニメ「宇宙戦艦ヤマト」に、そんな武器あったような記憶もあるが。

もし俺の思っているとおりなら、すっげえ強いんだけど。

紫苑「おけ。ジョブ！」

おいおい、簡単に言うけど、俺よくわかってないんだけど。

サイファ「ではお願いしますね。」

いやいや、お願いされても。

俺は仕方なく、話に割り込む。

アライヴ「あの～？話がわからないのですが・・・波動砲って何？（汗）」

サイファ「ああすみません。波動砲は昔ヤマトが撃っていたあれです。」

アライヴ「あれと言われても、ヤマトもあまり知らなくて。」

サイファ「すみません。強力なビーム砲だと思ってください。またはコロニーレーザー？」

おいおい、そんな強力な武装、なんで持ってるんだこの人？

真でれら「ああ今、何でそんな強力な武装持ってるんだって思ったでしょ？前回から有る程度引き継がれているものも有るって事だよ。」

ああなるほど。

そういや、なんか有ったな。

強力な砲塔が。

アライヴ「わかりました。敵を集めてそれで一気にやるわけね。」

サイファ「まあ撃つまでに時間がかかるから、時間稼ぎをお願いしたいわけです。その後は自力ですが、うまくいけば楽勝でしょう。」

アライヴ「はい～」

そういう事か。

それにしてもこのサイファさん、慎重そうな人だ。

これだけの数とメンツが集まれば、万古要塞なら普通に落とせそうだけどね。

俺は少しフェネルの射角の設定をいじる事にした。

敵機を1機でも多く、波動砲の餌食にする為に。

まもなく作戦が始まった。

サイファ「人型は今日子さんの指示に従ってください。」

今日子「よろしくう～」

アライヴ「こちらこそ。」

今日子さんと言えば、サイファ軍のエースパイロットだ。

ファーストの頃から人型に乗っていたって言うから凄い。

俺も最初試みたけど、あまりにリスクが多いからやめたんだよな。

それなのに半年以上乗っていたって聞くし。

戦闘が始まると、流石にエースと呼ばれている人だと思った。

その戦闘は、強いとか早いとか以上に、とにかく楽しそうに戦っていて、真面目にやっているようには

見えないのに、俺と同じくらいの敵を倒してゆく。

一生「すごいな。でも、俺ほどじゃない！はず・・・」

ちなみに俺もまだ本気を出していない。

俺の得意なフェンネルは温存したままだ。

まあ敵のほとんどがNPCの人型だから、俺達クラスになると敵ではない。

と思っていたら、赤い機体が猛烈なスピードで今日子さんの機体「サファイア」に近づいてゆく。

一生「シャアか?!」

冗談で言ったら本当にシャアさんだった。

シャアさんはファーストの時に、サイファさんを裏切った人だ。

ジーク軍のスパイだったらしいが、今ではジーク軍でもないようだ。

一生「このよくわからない軍にいるんだもんな。」

今日子「裏切りものお〜！（笑）」

今日子さんはどうやら、シャアさんとやるらしい。

それもやたら楽しそうなんだけど。

いいなあ〜

俺は仕方なく雑魚を倒していった。

つうかシャアさん、今日子さんに瞬殺されてるし。

あれ？もし波動砲にはまったら、戦闘不能状態どころではないかもなあ。

俺はふと疑問に思った。

人型は戦闘不能になっても、普通は、死者がでるまで破壊したりしない。

戦闘不能になった奴を、更に破壊し続ければ完全破壊も可能だけれど、メリットよりもデメリットの方が大きいから。

相手に恨まれたり、NPCパイロットを得る事もできなくなるからね。

少なくとも俺は半年、完全破壊されて死んだ人を見た事がなかった。

俺はなんとなく、戦闘不能で漂っているシャアさんの機体を、波動砲の発射軌道のど真ん中に移動させた。

なんかシャアさんから通信が入ってきていたが、無視無視。

それを回収しようと集まってくる敵機。

俺はそれを倒していった。

一生「ひゃっほーい！楽しい〜！」

今日子「楽しそうね。」

アライヴ「そりゃもう。」

今日子「これいいわね。向こうから集まってくるし。でもそうでないのが艦船を狙ってあっちに行ってるね。」

アライヴ「今日子さん、あっちに行ったら？」

今日子「作戦上、あなたが行った方がいいから、お願いできない？」

なんだこの人、せっかくの俺の遊び場を奪うつもりか？

でも、作戦指示には従った方がいいんだろうなあ。

今日は助っ人だし、お願いされるか。

アライヴ「わかりました。引き戻してくるよ。」

今日子「ごめんね〜」

俺は今日子さんの返事が返って来る前に、すでにサイファさんの旗艦の方へと向かっていった。

スピードには自信がある機体だ。

なんせ本家キュベレイのように、両肩には羽根がついていて、そこにはエンジンがついているから。

瞬発力とスピード重視の機体だ。

さてしかし、追いつくはいいけど、数が多いな。

一生「しかたない。」

俺はフェネルを展開した。

今日子「へえ。フェネル使うんだ。」

アライヴ「まね。本気でこれを使ってるのは、俺くらいかもね。」

今日子「そうね。数は少なそうね。でも一人知ってるよ。」

アライヴ「ほう、フェネル使いが俺以外にいたとは。」

こんな話をしながらも、俺は旗艦に近づいてきた敵機を、次々と攻撃してゆく。

今日子「名前が同じだったから、ね。そういえばその仲間にもいたよ。」

アライヴ「ほほう。今日子って人なのか。もう一人は？」

今日子「チサトって人だよ。二人ともダイユウサク軍の使い手だよ。」

ゲームで食っていける人達の集まり、ダイユウサク軍の使い手か。

それは是非対戦したいし、絶対に負けたくない相手だな。

アライヴ「いずれその人達は俺がやってやるよ。」

今日子「私もやるの楽しみにしてるの。」

サイファ「後60秒で発射します。タイマーはそれぞれに送りました。それまでにうまく波動砲の射線上から退避してください。」

アライヴ「おけ。さて、うまくやらないとね。って、今日子さん、早く退避した方がいいですよ。そこだと時間ぎりぎりだし。」

今日子「まあ、任せて。アライヴさんも早めにどうぞ。」

今日子さんはなんだか余裕だ。

あの場所からだ、俺のキュベレイでもそろそろ退避しないとまずい距離なのに。

俺は戦闘しながら、うまく射線ぎりぎりのところまで移動した。

しかし今日子さんはまだ、射線上ど真ん中にいる。

時間はあと20秒を切った。

もう俺の機体でも無理だ。

アライヴ「今日子さんまずいって！」

今日子「じゃあそろそろ行きますか〜」

今日子さんの返事が返ってくると同時に、今日子さんの人型、サファイアが変形した。

一生「変形？」

見た目明らかに飛行形態といった感じに変わると、普通の人型の3倍以上の早さで移動した。

取り残された敵機は、もう明らかに波動砲を食らうだろう。

俺を追いかけて来ていた敵機は、フェネルでうまく射線内に留めていた。

残り5秒のところで、今日子さんが射線の外へと出ていた。

俺も最後の集中砲火で、敵機を完全に射線内に置き去りにした。

そして補給できないじゃまいか！から、波動砲が発射された。

前方すぐの所を、爆発的なエネルギーの光が通り過ぎる。

それは目の前にいた敵機も呑み込み、更に先にいたシャアさんの機体も呑み込んだ。

一瞬にして、敵機のほとんどが壊滅していた。

残っていたのは、敵機3機だけで、簡単に勝負はついた。

それにしても、今日子さんは流石に人型を極めた一人だ。

まさか変形機体を開発して、完成させている人がいたなんて。

そしてもし俺達が順調に勝っていけば、いつか対戦する事になる相手だ。

俺は今からそれが楽しみになっていた。

機体テストバトル

紫苑軍の本拠地は、101×101のマップの2-100にある、コロニー「シオン」である。

マップの右上隅でもあるから守りやすいが、生産性がちょっと低めなコロニーだ。

そして俺のメインドックが有る場所でもある。

此処で予備の人型と艦船を管理している。

前回カテーナの艦船内で行ったコマンドは、全て此処に送られて実行されている。

拾った人型も、此処に送られて管理されているわけだ。

で、俺が今日ここに来たのは、ドック内の部下の指揮を高める為と、暇つぶしの為。

時々実際にドックやら開発室を見て回る事で、整備時間が短くなったり、開発が成功したりと、そういった可能性が若干あがるらしい。

あくまで噂だけれど。

で、もうひとつの理由、暇つぶしなんだけど、キュベレイから、高速移動専用人型「SS」に乗り換える為。

乗り換えて何をするかと言えば、訓練モードで遠隔操作人型ミニのテストをする。

人型の操縦テクニックの向上の為に、プレイヤは戦闘時間以外の時間は、コンピュータ相手にテストバトルができるようになっている。

テストバトルなんだから、わざわざ此処まで来て乗り換えなくても、と思わないでもないが、気分の問題なんだろう。

俺は愛機設定を「SS」に変更すると、テストモードに切り替えて宇宙へと出た。

この機体「SS」には、武器はビームソードしか搭載していない。

移動用として作ったから、スピードと燃費だけに力を入れた機体だ。

それでも俺にかかれば、これでもそれなりに戦える自信はあるけどね。

そしてテスト用の人型ミニ、いつまでもこんな名前と呼ぶのもあれなので、「ブロンディ」とでもしておこう。

懐かしのOVAをたまたまみて、そのアニメの中で出てきた、オートで動く戦闘ロボの名前だ。

一生「さて・・・」

設定は昨日すでに済ませてある。

俺と同じターゲットを、俺と逆方向から攻撃する設定だ。

この設定の利点は、2対1で戦える数的優位と、敵の背後をどちらかがとれると言う事だ。

しかし大きな欠点もある。

ビーム砲等の飛び道具は特に、かわされると味方を攻撃してしまうという事だ。

それを無くす為に、攻撃のタイミングは、こちらにおいている。

それは撃つも斬るも、俺自身がブロンディを操作しなければならないと言うことだ。

自分が攻撃するのだから、タイミングをあわせて回避する事ができるが、2機を動かすのが難しくややこしいという欠点がある。

でもそこは俺だからなんとかなる。

問題は、フェンネルとの兼ね合い・・・

ブロンディを使ったテストバトルは、思った以上に楽しく、しかもうまくいった。

問題はここからだ。

一度テストバトルを終えて、愛機キュベレイに乗り換える。

ブロンディの設定をキュベレイに変更してもらう。

命令は出すが、それをするのはドックのメカニックだ。

リアルタイムで約15分かかった。

その間に昼飯を食べて、再びゲームのテストバトルへと向かう。

さて、フェンネルと両方使ったらどうなるか・・・

その前に、ブロンディを背負って出ると、かなり重い事が分かった。

キュベレイの動きに、少し切れが無い。

とにかく宇宙空間へと出る。

まずはそのままの設定で。

フェンネルは、俺の後ろから敵を取り囲むように、半球状に展開している。

そして俺より前方にあるフェンネルだけに攻撃を許可し、タイミングもオートだ。

だから下手に敵に接近しようとしたら、自らを攻撃する可能性がある設定だ。

そして、機体の方向を変えるだけで、背後に有ったフェンネルが、自分の前方に存在する事になり、攻撃する。

不用意に旋回すると、これまた自らを攻撃しかねないので、背後のフェンネルには、もうひとつ攻撃タイミングを追加している。

一度自分の前方になった後、人型5機分の距離を詰めた場合だ。

フェンネルは常にキュベレイと、ある程度の距離を持つようとするが、こちらと同時に反応なんてできないから、だいたいこの設定なら、振り返り全速前進すれば、自分がフェンネルを追い越したくらいにフェンネルが敵を攻撃するタイミングになる。

まあ簡単に言えば、逃げると見せかけて、追いかけて来たところを振り返りにする設定だ。

タイミングが重要だから、これも失敗すると自分が痛い目を見る可能性大なんだけどね。

とりあえず、このままテストだ。

ややこしい。

いつもどおり、フェンネルのタイミングをみながら敵を撃破してゆく。

ブロンディも展開しているが、なかなか攻撃のタイミングをつかめない。

フェンネルの攻撃が、ブロンディに当たってしまう。

やはり操作対象が2つでもつらいのに、3つを使うのは不可能なのか。

最悪ブロンディもオートでかまわないが、それだとメリットがほとんど無いし、だったらフェンネルを増やす方が良さだろう。

それに今でも単独戦闘が多いのに、ますます単独戦闘限定の機体になってしまう。

俺というプレイヤーも。

他のプレイヤーとの共闘なんて、フェンネルを使う以上、うまい人と組まないは無理だし、ブロンディもオートだとフェンネルと同様だ。

今日子さんと組んでも、うまく戦えないような戦い方は駄目だ。

やはりブロンディの発射タイミングは、こちらにないと。

フェンネルのこの設定はあきらめて、別の設定を試す。

今度は、半球状部分を全く逆、つまりはブロンディの方からこちらを撃つ感じにする。

フェンネルは全てオートだ。

このメリットは、自分でフェンネルの位置をほぼ把握できる事。

デメリットは、射線が自分に向かう確率が格段に上がる事だ。

しかしこれは、うまい人なら、フェンネルをちゃんとかわせるなら、使える戦い方だ。

ただ、これでも、ブロンディの出番は少ない。

ブロンディがフェンネルの前に出ると、先ほどの設定で戦った時よりも、フェンネルの攻撃がブロンディに当たる。

フェンネルとブロンディの動きを合わせる事ができれば、これを回避する手だてとなるのだけれど、さて、どうしたものか。

フェンネルをブロンディ基準で動かすか。

ブロンディはキュベレイと敵機を基準に動き、それを基準にフェンネル。

フェンネルの攻撃タイミングと許可は、ブロンディの前方にいる時に限る。

これでかなりブロンディへの攻撃が避けられるが、完璧ではない。

ブロンディが高速で敵機に近づいた時や追い越した時に、フェネルの攻撃がブロンディに当たるだろう。

結局両立させる方法としては、これしか思いつかなかった。

使いこなせれば、フェネルだけよりも強くなりそうだけれど、現状だと移動が遅くなるデメリットだけだろう。

とりあえずは、練習でうまく使えるようにならないと。

それまでは今までどおりでいく事にした。

ブロンディは、SSに搭載しておいた。

ライバル登場

このところ、ジーク軍が少しずつ勢力を拡大していた。

俺自身さほど強いと思わないのだけれど、紫苑さんやサイファさんに言わせれば、勝つために手段を選ばない、最強の戦略家らしい。

いつの間にかかつての四天王も、ジーク軍下に在籍しているとか。

群青さんとは、ファーストバトルが終わった時に少し話した。

群青「悪かったな。でも目の前に1000万だぜ？結局負けたけど、金は貰ったからな。」

アライヴ「仕方ないですよ。俺だって1000万出されたら、寝返るかもだし。（笑）」

群青「そっか。俺はもう引退するけど、おまえは続けるんだってな。まあがんばれよ。」

アライヴ「まあ、このままだと悔しいし。」

群青「俺やおまえの得意な、アクション系のゲームがあったら、戻ってくるかもな。」

アライヴ「そうですね。その時は、たぶん敵かもしれませんが、良い戦いをしましょう。」

群青「ああそうだな。じゃあな。」

アライヴ「ではまた・・・」

・・・

あの群青さんが戻ってきた。

他の四天王もいるとなると、かなりジーク軍は強いだろうな。

紅蓮さんも麒麟さんも、ゲーム全般が得意だって言っていたからおそらく強いだろうし、疾風さんは元々アクション系が得意な人だ。

ダイユウサク軍のエース級にも、バトルグリードで対戦して勝った事が有るらしい。

正直、宇宙の絆IIのバトルシステムは、バトルグリードに近いところが多いらしいから、そのままこのゲームでの強さとも考えられるかもしれない。

俺は、バトルグリードはプレイした事がないけれど。

何となくビジュアルが好きではなかったしね。

さて、本日もサイファさんと協力して、要塞を落とす事になっている。

今回は紫苑軍主体だから、サイファさん達にはサポートしてもらう形だ。

星さんことスピードスターさんも、今日は出撃するらしい。

我が軍は、プレイヤーが少ないし、階級の高い人でも出撃は珍しくない。

まあ俺も准将なのに、出撃しない事がないからな。

星さんは階級は少将で、俺よりも上だ。

紫陽花さんが中将で、紫苑さんが大将。

他のプレイヤーは全て、大佐よりも低い階級になっている。

とはいっても、あまり活動していない人がほとんどだけれど。

今日は珍しく、美夏中佐が共に出撃する。

俺がフェネルを使っても、共闘できる数少ない仲間だ。

スピードスター「一応指揮とるけど、まあ適当に♪」

アライヴ「了解～（笑）」

美夏「俺は戦力にならんかもしれんぞ！」

ああ、ちなみに美夏さんは、男だ。

アライヴ「美夏さんなら大丈夫ですよ。」

スピードスター「♪」

美夏「だといいいけど～」

さて、要塞がレーダー内に入ってきたので、俺達は出撃する。

サイファさん達の艦船は、後方支援をするわけだけど、パープルアイズは最前線へ行く。

戦力としても強いし、俺達3人がいればまず大丈夫。

それに今日はサイファ軍の今日子さんもいるしな。

今日子「私は今日は守りにてっするから、がんばってねえ〜」

スピードスター「♪」

アライヴ「たすかるよ〜」

美夏「さあ、あばれっか！敵がお出ました。」

俺達は旗艦の守りは今日子さん達サイファ軍に任せて、敵の真ん中へと向かった。

同盟軍に守りを任せるなんてと思わなくもないが、サイファ軍との信頼関係はあつい。

一応リアルでも面識があるらしいから。

俺はまず、普通に敵の力量をはかりながら戦う。

どの機体が強いのか？どれくらいプレイヤーがいるのか？戦力的に優位か不利か？

敵艦船は3隻、こっちは4隻、人型の数では圧倒的に敵優位だけど、人型を操っているプレイヤーは二人か三人。

普通の弱小軍なら、この程度だろう。

俺達だって、助っ人が無ければ三人だったのだから。

しかも星さんは、艦船の艦長をNPCに任せている。

リスクを犯して出撃しているわけだ。

それでも、サイファさんと、それに真でれらさんが守っているから大丈夫だろう。

この二人、特に真でれらさんは、艦船の守りには定評があるからね。

どうも手応えがない。

敵は弱いし、プレイヤーも三流だ。

美夏さんだけでもなんとかなるんじゃないか？

少なくとも、一対一で負ける相手ではない。

15分ほど戦っただろうか。

すでに敵の人型は全て壊滅。

そして敵艦船への攻撃を開始していた。

勝ち目が無いと判断したのだろうか。

艦船は撤退行動をすぐに始める。

プレイヤーの回収もせずに、逃げるようだ。

要塞の抵抗ももう無い。

アライヴ「楽勝だったな。要塞の占拠は、美夏さんにまかせていいですか？」

美夏「ああ、楽勝でしょ。」

美夏の愛機バナナは、まぶしいくらいの黄色い機体で、単機要塞へ向かうのがはっきり見えた。

ちなみに人型の色は、宇宙の色と合わせたりして、見えにくくする事が多い。

理由は、ゲリラ戦をする軍人が、迷彩服を着ている事を考えればすぐに分かるだろう。

でも単機で戦う時はいいけど、共闘する場合は見えないと、味方からの攻撃を受ける事もあるから、見えやすくする場合もある。

俺達は単機での戦いより、共闘を重視しているから、基本見えやすい色にしている。

ちなみに俺の愛機キュベレイは白だ。

本家にできる限り似せているからね。

星さんの機体は金色。

ちなみに今日子さんの機体はサファイア色で少し暗めだ。

パープルアイズが、人型を回収しているのが見えた。

プレイヤー3人、味方にできるだろうか？

おそらくは無理だろうな。

今回のゲームでは、裏切りや軍を変えるのには、前回以上にリスクがある。

そんな行動をした人は、たとえ所属軍が優勝しても、配分はほとんど得られないと公表されているからだ。

ポイントで査定しているなら、きっと大量のポイントがマイナスになる行為になるのだろう。

配分に影響しないように軍を変えるには、一度軍の大將に正式に許可を得て退役するか、在野軍、すなわち拠点を持たない軍を辞めてから、「3ヶ月間をおいて入隊する」事が必要となる。

もしくは軍の壊滅や解散、又は自分のキャラが死んだ場合に他の軍に入っても、査定がマイナスにはならないようだ。

ただ、壊滅や解散、死に関しては、それ自体にリスクがあるけどね。

死後は1週間軍に属せないルールも有るし。

まあとにかく、前回ほど裏切りを注意しなければならないって事はなくなった。

それでも裏切りはきっとあるのだろうけどね。

それにしてもこのシステム、全ての拠点に所有者ができてから公表されたから、実はかなりの反感をかった。

適当に軍を作って、拠点に名前をつけてやろうという奴らが、簡単に軍を解散できずに嘆いていた。

本来ならみんな、きっと強い人の軍に入りたかったはずだ。

中でもジーク軍やダイユウサク軍は人気だ。

本当は適当に遊んだ後に、それらの軍に入るつもりだったのだろうけれど、リスクが大きくて今となってはできない。

これはおそらくクライアントの作戦だったんだろう。

最初から戦力が集結していたら、ゲームの決着が早くなるし、面白みにも欠けるからね。

今ではそれぞれに軍を強くしようと必死だ。

俺はこれで良かったと思っている。

やはりゲームは長く楽しみたいからね。

さて、もう大丈夫そうだし、パープルアイズに戻るか。

俺は紫苑さんへ通信を入れようと、チャット通信画面に文字を書き込んでいた。

そしたらその時、友軍ではない何か、こちらに近づいてくる警告音が鳴った。

一生「敵？」

アライヴ「残っていたか？」

俺は紫苑さんへのメッセージを一度消してから、それだけ送信した。

スピードスター「ありゃやべえの来た♪」

今日子「あれ、ドリームとカズミンだよ！」

なんと！ドリームとカズミンが？

俺はレーダーにとらえた敵の方に機体を向けた。

モニタに敵機の情報を表示する。

黒い機体は、確かにドリームと表示していた。

名前：ドリーム、機体：ドリーム。

もう一機もほぼ黒に近い紺色の機体。

名前：カズミン、機体：カズミン。

俺はどきどきしてきた。

人型だけで、こんなところまで？

ダイユウサク軍の領域からだとかかなり離れているから、相当燃費重視でないと、こんな領域まで来る事はできない。

おそらく能力的には、俺のSSと似たような感じの機体だろう。

今日子「面白い！やるよ！」

スピードスター「♪」

今日子さんはやる気だ。

スピードスターさんは、いまいちわからないけれど、やるならやるって感じかな？

俺も戦う意志を伝えようとした時、ドリームからの通信が入ってきた。

俺は特に通信を断る理由も無かったので、そのまま回線を開く。

ドリーム「こんにちは。アライヴさんって強いんだってね。一度タイマン勝負したいんだけど、うけてくれない？」

なんと、あのドリームが俺と？

するとカズミンと今日子さんが、2機だけで少し離れていった。

すぐに今日子さんから通信が入る。

今日子「私とタイマンでやりたいらしいから、ちょっとやってくる。手出し無用ね。」

なるほど、カズミンは今日子さんと、そしてドリームは俺とやるってわけか。

俺はドリームに了解のメッセージを送る。

アライヴ「おっけ〜！」

そしてすぐ友軍へ向けて、「俺もドリームとタイマンするから、手出し無用で！」

すぐに皆から、「了解！」とメッセージが入った。

でも紫苑さんだけは、「やばそうなら、手出しする。君はうちでは重要だから。」そうやってきた。

俺の事を買ってくれているのだから、悪い気はしないが、手出しされるのもいやなので、絶対勝つ。

気合を入れた。

ドリーム「此処までくるのに燃料かなり使ってるから、戦闘時間はおそらく5分が限界だと思うから。」

アライヴ「了解！」

これは、5分で倒すぞと言う意味か、それとも5分では勝負はつかないかもしれないと思っているのか。

まあどちらにしても、やるだけだ。

ドリームがビームソードを抜いた。

一生「二刀流？」

両手にビームソード。

そしてあの機体だと、おそらく接近戦オンリー。

俺の機体はどちらかと言うと中長距離メインだが、接近戦でも別にかまわない。

ドリーム「では行くよ！」

アライヴ「うい！」

俺が返事を返すと同時に、ドリームがまっすぐつっこんできた。

俺はすぐにビーム砲で狙う。

しかし簡単にかわしながら、なおもキュベレイに近づいてきた。

一生「はええ！！」

一気に距離を詰められた。

「もらった！」、ドリームからそんな声が聞こえてきた気がした。

でも俺はそんなにぬるくないよ。

全体的なスピードは負けているが、瞬発力はこっちが上だよ。

俺は最初の一太刀を左へかわす。

しかしすぐに俺へ向けてソードが襲いかかってくる。

一生「ツバメ返しだよ。」

俺はすでに抜いていたビームソードでそれを受けた。

ビームソードなのに、何故ビームソードで受ける事ができるのかは不思議だけれど。

俺は逆の手のビーム砲で、ドリームを狙う。

と同時に、ドリームは俺から距離を素早くとった。

ビーム砲は当たらない。

俺は撃つのをやめた。

ドリーム「流石ね。噂は本当だったw最近強いのがなくて退屈だったんだよね。」
あのドリームに流石と言われれば少しうれしいが、俺とてドリームにもカズミンにも負けるつもりはない。

アライヴ「ドリームさんも強いね。これだけ俺とやれる人なんて、見たことないよ。」

ドリーム「今日子さんも？」

アライヴ「敵でね。あの人もきっと強いよ。」

ドリーム「でしょうね。カズくんでも手こずってるし。」

見ると、なかなか壮絶な戦いをしているようだ。

でも、今日さんが押されているように見えるのは、気のせいだろうか？

ドリーム「では、第二ラウンドいくよ！」

おっと、見とれてる場合じゃ無かった。

アライヴ「うい！」

又も返事と同時に、ドリームがつっこんできた。

この無造作につっこんでくるところに、ドリームの強さを感じる。

これがガンダムでいうところの、「プレッシャー」なのだろうか。

しかしこの程度なら、まだまだだ。

今度は早いうちに右に跳ぶと、中距離を保ちながらビーム砲で狙う。

ドリームはそれをかわしながら近づこうとするが、かわしている分距離は縮まらない。

さて、このままだと、ドリームがミスをしない限り、延々このままかもしれない。

別に此処で俺のフェンネルを見せる必要はないけれど、なんとなく使ってみたくなった。

俺は少しずつ、距離をわざと詰める。

この距離でフェンネルを展開しても、ドリームには通用しないだろう。

回避不能な位置まで近づかせて、蜂の巣にしてくれる。

フェンネルの設定をパターン1にする。

前回練習時に、パターン2に変更していたからだ。

さて、うまく近づいてこい。

後少し。

ドリームに警戒している様子はない。

よし、此処だ。

俺は一気にフェンネルを展開した。

一瞬ドリームの動きに迷いが出る。

俺は機体を反転させて、全速前進。

フェンネルの中に逃げる形だ。

追いかけてくるかこないかは、もうどうでも良い。

すでにドリームは、フェンネルに完全に包囲されている。

しかもかなりの近距離で。

一気にフェンネルのビームがドリームをおそった。

やった！

あれ？爆発音が無い？

手応えが全くなかった。

中心ではドリームがノーダメージで存在していた。

次の瞬間すぐに、ドリームは俺から離れる方向で、距離を取った。

なんだ？

あのフェンネルの攻撃を全てかわした？

冗談じゃない。

あれをかわされたら、フェネルであのドリームは落とせないではないか。

ドリーム「あぶなー（笑）フェネル使いだって聞いてたの忘れてたよ。この機体じゃ勝ち目ないから、今日はこの辺で撤退するよ。」

・・・

ちょっとフリーズしてしまった。

アライヴ「ああ、今日は楽しかったよ。」

嘘だ。

あの機体と武装で、フェネルまで使ったのに落とせないどころか、ノーダメージのドリームの強さに、かなりショックを受けていた。

ドリームのところに、カズミンがやってきた。

そうだ、今日子さんはどうなった？

とりあえず大丈夫そうだけど、機体に傷が見えた。

カズミンは無傷だ。

こんな機体で、何者なんだこの人達。

流石にゲームで食っていけると言われている人達だけど、これほどなのか。

ドリーム「じゃあ、今回はマジ勝負で。」

アライヴ「うん。」

悔しさで、余裕もなく、ただそれだけ返事をした。

ドリームとカズミンの二機は、猛スピードでこの空域を離脱していった。

しばらくして、今日子さんから通信が入った。

今日子「くやしいー＝！！！！！！！！！！」

この適当な通信が、今日子さんの悔しさを如実に伝えてきた。

アライヴ「カズミンってどうだった？」

今日子「強すぎ。ってか巧すぎ。途中から、絶対に落とせる気がしなかった。」

アライヴ「そっか。ドリームもそんな感じ。巧いってよりは早いって感じ。反応が人間じゃないよ。」

」

美夏「ドリームとカズミンとやったのか？」

要塞を占拠したのか、美夏さんが戻ってきた。

そう言えば美夏さんって、バトルグリードも経験者だったような。

今日子「やったけど巧すぎ。」

アライヴ「確かに、勝てる気がしなかったよ。」

美夏「ははは、テレビで彼女達の戦い見たことあるけど、コントロールが人間業じゃないからね。つーかおまえ達が健在なのが凄いよ。バトルグリードで太刀打ちできるのは、ほとんど身内だけな奴らだぜ？そいつらとまともにやれたんだから、もしかしたら俺って良い仲間恵まれたかもな。」

ほめてもらっているんだけど、悔しさがそれを完全にうち消していた。

次戦う時まで、もっともっと強くなる、そう誓った。

頼もしい仲間

今日、昼間っから練習していたら、夕方、プレイヤがひとりパイロットに志願してきた。一応俺は准将だからそのまま受け入れる事もできるが、大将の紫苑さんに許可は得た方がいいだろう。それに、俺の艦船に配属しても、意味が無いし。

それでも一応、面接と言うか、どんな人なのか聞いておくか。

アライヴ「どうして我が紫苑軍に入ろうと思ったんですか？」

じえにい「えっとお、ダイユウサクぐんにい、はいろうとおもったんだけどお。あそこって、みうちだけでやってるんだって。そしたら、ここがつよいから、紫苑ぐんがいいよお〜って。」

・・・

なるほど。

強い軍に入ろうとダイユウサク軍に志願したけど、身内だけでやってるから断られ、紫苑軍を推薦されたから此処にきたと。

悪い気はしないけど、最初にダイユウサク軍ってのが引かかるなあ〜でもそうか。

あそこは身内だけでやっているのか。

それなら、俺がドリームとカズミンを倒せるようになれば、ダイユウサク軍に勝てるようになるな。

じえにい「ちなみにい、あたしつよいから〜ドリームさんのおすみつきだよお。ばとぐりでわあ、かったことおあるしい。」

なにい！！

バトルグリードで、ドリームに勝ったって、相当強いんじゃない？

あのドリームを倒したんでしょ？

俺は負けないまでも、勝つ事は現状不可能なあの人に。

ゲームは違えど、これはもしかしてかなりの使い手かも・・・

しゃべり方は中学生か小学生っぽいけど。

紫苑「どした？(^-^)?」

紫苑さんから通信が入ってきた。

俺がメッセージを紫苑さんに送っておいたからだ。

もちろん用件は、このじえにいって子の処遇をどうするか。

アライヴ「じえにいさん、今大将きたから、ちょっとまってて」

俺はそれだけじえにいさんに言うと、今度は紫苑さんと通信する。

アライヴ「今我が軍に志願してきた人が。なかなか強そうなパイロットですが、子供っぽいです。(笑)」

紫苑「入れて大丈夫そう？」

アライヴ「俺は欲しいですね。」

紫苑「じゃあ俺の艦に乗せるか。」

おお？いきなり旗艦に？

でもまあ、話が本当ならそれくらいのパイロットではあるな。

アライヴ「じゃあとりあえず乗せますね〜」

紫苑「了解〜」

俺は紫苑さんの了解を得て、今度はじえにいさんに通信を入れる。

アライヴ「喜んで入隊を許可します。よろしく。配属は旗艦専属のパイロットだ。俺と同じね。」

じえにい「ありがとございますう。きっとちからになりますよお。」

アライヴ「うん。よろしく。では旗艦は今有人要塞カテーナにあるから、人型を移動させておいてね。今日も要塞攻略に出陣するから。」

じえにい「さっそくですかあ。がんばりますう。」
本当にこんな子が強いのだろうか？
でもまあ、俺が宇宙の絆を始めたのが中学生だったし、きっと大丈夫だろう。
それにこんなしゃべり方はネットだけかもしれないからな。
リアルだと案外大人だったりする事もあるし。

．．．

アライヴ「ひとつ聞いてもいい？高校生？」

じえにい「ちゅういちですう。」

．．．

大丈夫だよな？

アライヴ「そっか。戦闘は夜遅くまでになるけど、大丈夫？」

じえにい「ははは、いまどきい12じにねるこお～いないよお～」

．．．

アライヴ「だよな。」

とにかくこんな感じで、俺達は要塞攻略に出陣するのであった。

今日攻略するのは、今後の最前線にしたいと考えている、コロニーの「コロコロコロニー」だ。

って、誰だよ、こんな名前つけたの。

めっちゃ弱そうなんだけど。

でも此処って、諜報活動で調べた範囲では、コロニーでは3番目に生産性の高い、なかなか使えるコロニーなのだ。

でもやっぱ、コロコロコロニーはないよな。

まあ紫苑さんは喜んでいるけど。

紫苑「今日一日でとか思ってないから。ゆっくり削っていこう。(^o^)」

アライヴ「はい～」

スピードスター「♪」

じえにい「うはあ～」

．．．

今日は、サイファさん達とは別行動だし、今日子さんはもちろんいない。

美夏さんも残業で今日はこれない。

紫苑さんも星さんも人型で出て、艦船の守りをするとか。

紫苑さんは「なまっているから、今日は適当にやる」って事だけど。

実質、俺とじえにいと二人でやるのか。

もちろん、NPC乗りの人型は10機ほどいるけれど、敵はおそらく最低でもその数倍いるんだらうな。

なんて思っていたら、数倍どころではない数が、レーダーに写った。

一生「おいおい、多すぎるでしょ。」

アライヴ「多いな。旗艦大丈夫ですか？」

紫苑「旗艦はなんとかするけど、アライヴひとりでその数無理か？」

正直俺が10人分強いと言っても、50機いっぺんに相手になんてきつすぎる。

じえにい「あたしもいるよお～きつとかてるう。きつとたのしい～」

．．．

いまいち信用できる言葉に聞こえてこないが、まあやばけりゃ逃げればいいのか。

アライヴ「やばければ速攻撤退しましょう。それまでできるだけやってみます。」

紫苑「うん。」

じえにい「あたしとくんでるんだからあ、じょぶじょぶ。」

アライヴ「うん、わかった。じえにいちゃん信用するよ。全部やろう。」

じえにい「えへへえ〜」

いまいち信用度に乏しいが、どっちにしても信用してやるしかないのだ。

とにかくせめて、足をひっぱられなければそれでいい。

俺達は敵の真ん中へと突き進んだ。

じえにいの機体は、見た目極々ノーマルな機体だ。

武装を見る限り、スピード型ではなさそう。

なんせ武器がスナイパー用の長距離ビームライフルで、カスタマイズで威力を上げているようだ。

その分動きが遅くなるが、当たれば、当たり所によっては一撃で戦闘不能にできそうな武器。

まあ俺が相手だったらまず当たらないけどね。

さて、戦闘開始だ。

アライヴ「数が多いから、助けてもらえと思わないでね。」

じえにい「あいあいさあ〜でもこっちはたすけてあげるからねえ〜」

言う言う。

頼もしいじゃないか。

アライヴ「こっちはフェンネル使うから、離れて戦った方がいいか？」

一応確認だ。

もともと離れて戦うつもりなんだけどね。

じえにい「おすきにい〜なんでもどんとこいだよお〜」

・・・

またなんだか不安になってきた。

って、もうそうも言っていられなくなってきた。

俺はフェンネルを全部展開した。

設定はパターン2に変更。

攻撃の手数は多い方がいいから。

戦闘が始まった。

数が多いから、いっさい気を抜けない。

よそ見でもしようもんなら、敵に攻撃されるだけでなく、自らのフェンネルにも攻撃されてしまう。

じえにい「あはは〜すごいはずのフェンネルだねえ。」

おいおい、余裕じゃないかこの子。

俺は通信してる暇ねえぞ。

じえにい「そんなにフェンネルとばしたらあ、つうしんしてるよゆーないねえ。」

そのとおりだよ。

なんだこの子？

戦ってるのか？

俺はよそ見ができる状態ではないけれど、気になってじえにいの機体、「ぶりちい」を視界に入れた。

うまい・・・

この子もフェンネルを使うのか。

フェンネルはひとつだけだが、それを巧く使って、敵の動きをコントロールし、それをライフルで一撃・・・

って、よそ見している間に、敵の攻撃をくらってしまった。

一生「うわあ、俺のキュベレイちゃんがあ！！」

じえにい「だいじょぶ？」

アライヴ「かすっただけだよ。」

ふう〜あぶねえ。

危うく落とされるどころだったよ。

じえにいは大丈夫そうだ。

俺は俺だけ考えて、がんがん落としてやるぜ。

負けらんない。

俺は改めて集中力を高めた。

その後のじえにいの戦い方は見る事はできなかったが、気がついたら俺とじえにいで50機いた敵を全て倒していた。

まあ相手は全てNPCの動かす人型だったから、俺達なら終わってみれば当然の結果か。

それにじえにいの戦い方は、直接は見れなかったけれど、時々俺に向かっている人型を横からねらい撃ちしてしとめていたから、もしかしたら単独戦闘以上に共闘が得意な子なのかもしれない。

単機で戦うのが得意なドリームを、バトルグリードで倒した事があると、もし共闘の方が得意となれば、この子の強さは・・・

頼もしい仲間を得た、そう思った。

勝利への誓い

俺は、夕方からゲーム参加してきたじえにいと、一緒にテストバトルをしていた。共闘が得意なじえにいと、息を合わせる事ができれば、もっと強くなれるだろう。

アライヴ「じえにいちちゃんって、接近戦はどうなの？」

じえにい「ライフルのさきでえきるよお。」

なるほど。

確かに先には刃がついているけれど、これだと接近戦はあまり得意ではないとみるべきだろう。それにスピード型ではないから、接近戦が得意なスピード型が相手だと、少しつらいかもな。

アライヴ「ちょっと俺機体を代えるから、テストバトルしよう。」

じえにい「まけないぞお。」

味方同士なら、テストバトルは対戦形式で行う事ができる。

アライヴ「本気できてね。」

じえにい「あいあいさあ〜」

さて、お手並み拝見だ。

俺が今乗っているのはSSだ。

これはドリームと同型機と言っていい、近接格闘機のスピード型だ。

俺はとにかくスピードを生かして接近を試みる。

するとフェネルの攻撃がおそってくる。

一生「当たるわけないし。」

フェネル使いの俺が、フェネルの攻撃をかわせない訳がない。

一生「って、危ない！」

俺はぎりぎりのところでかわした。

なんだ？

フェネルの攻撃タイミングに合わせて、巧くかわしたと思ったけど。

そうこう考えている間に、今度はライフルの攻撃。

これはわかっていなければ、やばかった。

流石にドリームに勝ったと言っているだけはある。

てかなんだ？

フェネルの攻撃を、かわすので精一杯だ。

しかもかわしたところでライフルの攻撃。

普通の奴なら完全にやられている。

フェネル使いの俺でも追いつめられているのだから。

ん？フェネルじゃない？

いや、フェネルだけど・・・

そうか、このフェネルの設定。

最初から射線をずらしてやがる。

かわしやすい方向に・・・

そして発射タイミングは、完全にプレイヤーだ。

なるほどねえ。

かわしやすいタイミングで発射して、楽勝でかわせると思ったところにビームが向かってくる。

此処で当てられる、または驚いて動きが止まったところを、ライフルで狙い撃ちか。

うまく考えられた作戦だ。

しかしわかってしまえば、俺には通用しない。

ほとんどのプレイヤーには通用するだろうけど。

俺はフェネルの攻撃の射線をしっかりと把握した後、今度はかわさない。

じえにいの攻撃は、はっきり言って完璧な精度の攻撃だ。

だから逆に見切られると、簡単にかわせるんだよね。

じえにい「ええー！！」

ははは、驚いてるな。

楽勝でかわして、ライフルを使うタイミングを与えない。

こうなれば一気に接近だ。

一生「って、なんだあ！！」

フェネルの設定を変えてきやがった。

当然か。

当たらない攻撃が当たらないなら、当たる攻撃で当てるってね。

でも、これならいつもと同じ。

さあ、接近したぞ、どうするじえにいちゃん。

って蹴りい？！

そしてライフルの先の槍か。

俺は後ろに跳んでかわす。

やべ、ライフル撃てるじゃん。

直後爆発音が鳴り響いた。

じえにい「やったあ！」

一生「残念でした。」

俺は後ろから軽くビームソードでぷりちいを斬りつけた。

アライヴ「俺の勝ちだ。」

じえにい「あれえ？ひとがたみいにい！！」

アライヴ「そゆこと。」

さきほどの爆発は、ブロンディ、つまり人型ミニにあたって爆発したものだ。

さっきの瞬間、俺はとっさにブロンディを起動。

その場に残して、軽くなった機体で、高速でぷりちいの後ろに回り込んだわけ。

爆発したから視界にもとらえられなかったし、とっさの作戦としてはなかなかのものだろう。

実戦だったらブロンディを無駄に無くすところだけれど、まあテストバトルだし、大丈夫だ。

じえにい「うっそおー！！はつたいせんではじめてまけたあー！！やーん！！」

・・・

聞いたところによると、ドリームに勝ったのは、初対戦の時だけだったそうだ。

そして他にも、初対戦者には負けたことが無かったらしい。

でも2戦目以降は、戦術がばれると強い相手には勝てなくなるそうだ。

まあ俺だって、先日一緒に戦って、戦い方を見ていなければ、負けていただろう。

だから強い事にかわりはないんだけど・・・

やはり共闘が向いているし、もう少しバリエーションが有れば、きつともっと強くなる。

アライヴ「じえにいちゃん、君はステキだ。ドリームとカズミン、俺達なら勝てるかもしれないよ。」

じえにい「ふえ？えーと、プロポーズ？」

アライヴ「なんでやねん！！」

じえにい「だってあのふたり、ふうふだし〜」

アライヴ「そなんだ。」

まあそんな感じで、俺達は打倒ドリーム、打倒カズミンを誓いあうのだった。

どんな感じやねんw

セオリー無視の作戦

じえにいとコンビで戦うようになってから、俺達紫苑軍の快進撃は続いた。

一日一要塞攻略の目標は、ほぼ確実に達成してゆく。

しかしまあ、如何せん戦力が少ないわけで、勢力を拡大しても空き巣を狙われればいっかんの終わりでして。

結局は重要拠点を守るのが精一杯だ。

コロニーシオンとカテーナ、そしてコロコロコロニー。

この三カ所を結ぶラインだけが、はっきりと我が領域と言える場所。

紫苑「...」

スピードスター「♪」

紫陽花「はぁ〜」

アライヴ「やっぱりプレイヤの味方がほしいな。」

じえに「うちらさいきょうなのにい〜まもれるひとがないもんねえ...」

この悩みは俺達だけではない。

ダイユウサク軍だって、身内だけでやっているから、そこそこまで勢力を広げたけれど、そこで行き詰まっているし、ジーク軍も今はおとなしい。

サイファさんところは、何故か友好関係が多いから、少しずつ巧く広げているけれど、それでもそろそろ手詰まり感がある。

いくら国力があっても、今回はプレイヤの数が圧倒的に必要なシステムなんだ。

人が増えない事には、勝負がつかない。

誰かを誘う？

って、これがこの会社の作戦だったのかもしれない。

人がいないと攻略できないゲーム。

参加していない人を誘うと、ユーザが増えるって寸法だ。

そんな事がわかったところで、どうにもならんのだけれど。

紫苑「ネットで集めるか。」

スピードスター「うむ〜♪」

この考えは、実は前々からあったが、結局やめた方法だ。

理由は、いくら裏切りが少なくなったとは言え、やはりジークのように現金で寝返りを求められれば、おそらく寝返る可能性もあるし、なによりまじめにやるかどうか疑問だ。

やりたい奴はおそらくすでにやっているだろう。

13192有る拠点と3つの要塞戦艦。

その全てにプレイヤを配置するだけで、プレイヤ13195人が必要だ。

それもアクティブな人が。

でないとならぬしら守りができない場所がでてくる。

現在このゲームの戦闘時間の、戦闘に参加しているユーザー数を見ると、ほとんど拠点の数とイコールだ。

それは、攻めるもひとり、守るもひとりで成り立つ計算で、そもそもこの人数でゲームのクリアが可能なのだろうか？

それでも統一となると、単純に一陣営にこれだけの人数が必要になる。

これは戦って戦って、勝って勝って、他よりも圧倒的に高いレベルと、戦力を得るしかないな。

アライヴ「先は長いな。」

紫苑「まあ、20億だからな。」

紫陽花「この会社の年間の純利益を考えると、5年以上は続けて貰いたいところね。」

スピードスター「なるほど♪」

じえにい「はなしがあむずかしいからわかんないよお。」

アライブ「とにかく俺とじえにいで勝ちまくるしかないって事よ。」

じえにい「なるほどお。」

紫苑「なるほどそれだ。」

俺とじえにいの会話を聞いて？いた紫苑さんが、何か思いついたようだ。

紫苑「サイファと相談してくる。」

紫苑さんはそう言うと、しばらく通信を切った。

通信を切る必要が有るのかどうかは知らないが、何かしらの交渉に集中したいのだろうか。

それよりも・・・

アライブ「紫苑さんどうするつもりだろう。」

スピードスター「任せておけば大丈夫♪」

紫陽花「私が伝えるね。」

そっか、紫陽花さんは紫苑さんの奥さんで、紫苑さんとならんでゲームしてるって言ってたもんな。

アライブ「どうですか？」

はっきり言って気になる。

ファーストの時、四天王が裏切らなかつたらおそらく優勝していた紫苑さんと、もっとも優勝に近かったサイファさん。

このふたりで相談。

どんな作戦なんだろうか？

紫陽花「言えない。(笑)」

なんですとお？！

しばらくしてから、紫苑さんが通信回線を開いた。

紫苑「作戦決定。」

アライブ「言えない作戦ってなんです？」

紫苑「(-_-メ)」

紫陽花「汗」

スピードスター「♪」

なんだ？

味方にも内緒の作戦なのか？

紫陽花「話しても良いよね？」

紫苑「わかった。話すよ。」

スピードスター「♪」

どうやら話してくれるようだけど、これは結構やばい作戦なのかもな。

紫苑「まず、サイファ軍との同盟関係を解きます。これは次回期限の更新をしない事でやります。1週間後。」

なんと、サイファさんと話して、同盟を解消するのか。

これは・・・

紫苑「もちろん、裏では友好関係は維持するので、決して戦闘は行わないように。」

やはり。

紫苑「そして同盟解消後、俺と紫陽花は、親のIDでサイファ軍に入り、直接勢力拡大に協力します。」

なんと、そんな事すると、この軍の大將と中將が共にいなくなるって事じゃん。

アライブ「IPアドレスが同じになるから、自宅からだとできないんじゃ？」

紫苑「もちろん。その間、紫苑および紫陽花は一切行動できません。」

それで、紫苑軍はどうするんだ？

実質俺とじえにい、そして星さんだけになるって事だ。

これは厳しいんじゃない？

アライヴ「しかし何故そんな事をする必要が？」

紫苑「理由は、サイファ軍を、ジーク軍とダイユウサク軍に匹敵する勢力にする為。できれば星、おまえも別IDでサイファ軍にきてくれ。」

ええ！！

それでどうやってやっていくのだろう。

スピードスター「♪」

紫苑「了解と受け取った。(^o^)」

おいおい、了解しているよ。

アライヴ「何故匹敵する勢力に？」

紫苑「もしアライヴが死んだとして、何処の軍に入る？」

アライヴ「そりゃ、紫苑さんのところに戻りますよ？」

紫苑「でももう滅亡していたり、優勝の望みが全くなければ？」

アライヴ「う〜ん。やっぱ強いところかな。ダイユウサク軍は無理だし、ジーク軍はあまり好きじゃないから・・・そっか！」

紫苑「そゆこと。サイファ軍を第三勢力にすれば、死んだ人の多くはサイファ軍に流れる。」

アライヴ「後はジーク軍と、他に強いと認めた人のところに行くわけだ。」

紫苑「だから、俺達がない間に、アライヴとじえにいで、がんがん攻めまくって、殺しまくってくれ。それも強さを見せて。」

ははは、殺すって事をすっかり忘れていた。

人型が手に入らないし、経験値が大きく無くなるわけでもないから、殺す事にデメリットはあっても、メリットは無いと思っていた。

どの攻略サイトにも、どの掲示板にも、プレイヤを死亡させる事、完全破壊をする事は愚考として言われている。

紫苑「この作戦は、君たちの強さにかかっている。」

これは、完全に紫苑さんが、俺とじえにいを信頼しているからこそできる作戦だ。

この信頼に応えないで、何がエースパイロットだ。

アライヴ「俺はやるよ。じえにいも良いか？」

じえにい「ふふははあ〜やるにけってい〜！！」

こうして俺達の作戦は始まった。

って・・・

アライヴ「で、何処が言えないような作戦なの？」

紫陽花「この人ね、もし紫苑軍がそれで駄目そうだったら、そのままそっちに入れてくれって言ったのよ。」

紫苑「君たちが強ければ問題ない。」

・・・

まあ、俺達が強さを見せれば、やられた奴らの一部は紫苑軍に志願してくるだろうし、問題ないから良いって言えば良いんだけど・・・なんかしっくりこないな。

これが紫苑さんの強さでもあるから、驚きも反感もないけどね。

作戦は順調

アライヴ「よし、プレイヤは全部始末したな？」

じえにい「あいあいさあ〜」

アライヴ「次いくぞ！」

俺達はとにかく攻めて攻めて攻めまくって、無茶苦茶な戦いを続けていた。

何処が無茶苦茶かと言えば、今回のゲームでは完全に攻め手不利なゲームなのに、攻めるだけの戦闘を繰り返して、尚かつ少数だ。

本来ならこんな戦いはできないはずだけど、俺達の強さと、そして敵戦力の分散が生む弱さによって、可能となっている。

更には、一度取った要塞はすぐ取りかえされるわけだけど、取ったり取られたりを繰り返す事によって、守りも弱くなるし、生産性も下がる。

最初こそこの作戦はきつかったが、今ではだいぶ楽になっていた。

俺達のコンビもかなり精錬されていて、全く負ける気がしない。

ちなみに母艦は、紫苑さんのリアル友達のひとり、「てけとー」大佐の艦である。

てけとーさんは、作戦期間中だけ頑張ってくれと紫苑さんに頼まれて、いやいや引き受けたらしいけど、今では結構ノリノリだ。

てけとー「ははは、次だ次！！」

別に弱い人ではないけど、調子乗りすぎだって。

母艦落とされないように、注意しないと。

ちなみに拠点の守りをしっかりやっているのは、コロニーシオンだけだ。

もし攻められたら、紫苑さんのリアル友達の「壁」中佐さんに電話を入れて、オンラインさせる手はずになっている。

この人は漫画家らしく、いつも忙しいからゲームどころではないが、いつも家にいるので、都合良く使わせてもらっているとか。

まあ実際攻められるような状況は、今のところはなさそうだけど。

取られたら速攻取り返す状況だし、前線が崩れるのは一瞬だからね。

結局今日も、拠点の数がトータルで減る事はなかった。

最初こそ減る方が多かったが、最近はこの方法ですら少しずつ拠点を増やせている。

それに合わせるように、志願してくるプレイヤも増えてきていた。

それ以上にサイファ陣営には人が集まっているらしいけれど。

今回の作戦で、今のところ一番恩恵にあずかっているのが、サイファ軍で、次がジーク軍、そして紫苑軍だ。

それでも今だけを見るなら、我が紫苑軍が一番いい感じだ。

なんせ紫苑領の周りは、ほとんどが空白化していると言っている。

プレイヤを倒す為には、少しずつ遠征しなければならなくなっているから。

作戦では一応、紫苑軍とサイファ軍で、最前線を固めながら侵攻できる100人以上のアクティブプレイヤを確保できるまで。

地球攻略を考えると、150人くらいは欲しいところだけど、今の戦い方を続けていけば、100人でも十分やっていけそう。

だけど、現状良い感じでも、潜在的には紫苑軍はかなりきつい状況にもなっている。

他へ志願したプレイヤのほとんどが、紫苑軍に強い敵対意識を持つことになったのだから。

多くと友好関係を持つサイファさんですら、入ってきたプレイヤに事情を説明してわかってもらうのはかなり難しいだろうと言っていた。

みんな紫苑軍とやりたがっているらしいから。

それを、いろいろと理由をつけてうまくごまかしているらしいけど、本当の事を言ってどれだけわかってくれるか。

それに、もう本当の事は言えないだろうと思う。

言ってしまうと、サイファ軍もこの作戦に加担していた事がばれるのだから。

もしジーク軍と隣接していたら、きっとすでに全面戦争だったかもしれない。

実は我が領域は、ジーク軍とはもっとも離れた位置にある。

だから決戦はおそらく終盤になるだろう。

もしくは地球あたりから直接対決が始まるのだろうけど、今のところまだまだだ。

アライヴ「そろそろ12時だな。」

てけとー「だな。今日はこのへんにするか。」

じえにい「は〜い」

アライヴ「では、コロコロに帰投する〜」

現在俺達が主に使っている拠点、コロコロコロニーだ。

最初はシオンを使う予定だったのだけど、攻撃しまくっていけば、思ったよりも攻められないものだ。

紫苑さんが言っていたけど、攻めて殺しまくるゲームの攻略法は、他のシミュレーションゲームなら、常套手段であり、つまらないものだと言っていた。

これをすると簡単に攻略できるのだけど、それを嫌うゲーム会社は、殺す事に重いリスクを持たせる事も多いらしい。

今回はそんな事しなくても、大きなリスクを背負っているわけだけどもね。

でも流石にお金がかかっているから、感情だけで行動する人は多くはないようだ。

俺達が勝ち続けていけば、敵ではなく味方にもなるのだ。

紫苑「ごころう。」

丁度コロコロコロニーに入ったところで、紫苑さんからの通信が入った。

12時を回って、戦闘時間はすでに終わっているから、家に戻ってきたのだろう。

てか、実家とかなり近いところに住んでるんだらうな。

もしくは普通に、IDだけ借りているのか。

アライヴ「紫苑さんおひさ〜」

じえにい「こんばんわあ」

てけとー「おい紫苑、いつまでこれ続けるんだ？まあ楽しいけど。」

久しぶりの紫苑さんの登場に、皆少しうれしそうだ。

そう思うのは、俺がなんとなくうれしいからなのか、完璧に任務をこなしている達成感からくる自信が、会うことに喜びを感じているようだ。

そんな喜びをよそに、紫苑さんは軍全体に通信を送る。

紫苑「我が軍に入ってくれた皆様、感謝します。一部、我々にやられても尚、入ってくれた方々もおられると聞きます。我々があなた方を殺してまで味方に引き入れたのは、早いうちに優勝争いのできる軍に入り、このゲームの本当の楽しさを味わっていただきたかった、と同時に、早くから我が軍でプレイしている方が、報酬が多くなる事は必至だと考えたからです。みなさんの為に行った行為である事をわかっていただきたい。」

適当な事を言っている。

少し苦笑いだ。

しかし、これが適当な事を言っているとわかっていても、結果的にはそうなるだろうから、それなりにゲームを理解している人は、今後結束できるだろう。

新しく入った仲間が、何人か紫苑さんへと返事を入れていた。

概ね理解しているようだし、我が軍に入ってきた人だから、そんな事はすでにわかっているようだ。

問題は他の軍だけど、サイファさんのところでも、紫苑さんは適当な事を言って、皆の敵対意識を薄めているのだろうと思った。

紫苑軍に敵対意識を持ってる人に「早めに強いところに移動できてラッキーじゃん？逆に紫苑軍に感謝すべきだよ。」なんてね。

紫苑「みんなありがとう。後少し、もう少し味方プレイヤーが増えたら、本格的な侵攻を再開する。それ以降よりそれ以前に我が軍に入っていた方が、ゲームが終わった時の報酬は多くなるだろう。だからもし迷っている友達プレイヤーがいるなら、今のうちに入る事を勧めてあげてほしい。後、勝っても負けても、充実したゲームライフを約束する。では、私は失礼する。」

紫苑さんはそう言った後、軍の全体通信を終了し、我々一部だけの通信へと切り替えた。

通信には、軍通信、グループ通信、個人通信などがあり、今はグループ通信で、主要メンバーだけの通信だ。

紫苑「順調(^0^)/」

アライヴ「ですねえ。」

てけとー「敵もえらい増えてるけどな。」

じえにい「わたしわあたのしいからいい」

アライヴ「紫苑さん、もう少しって言ってたけど、まだまだ人数的には足りませんか？」

そうなのだ。

先ほどの演説のような通信で、後少しで本格的に侵攻するって言っていたけれど、まだまだ予定の3割にも満たない人数だ。

少し増員が加速してはいるけど、このまま増えても後3ヶ月は頑張らないと無理だろう。

紫苑「大丈夫。きっとすぐだよ。」

えらい自信だな。

さっき言っていた、友達を誘うって事なのだろうか？

まあ、紫苑さんが言うのだから間違いないだろう。

俺は信じる事にした。

というか、もともと信じているけどね。

後は少し雑談をして、今日のプレイを終えた。

明日はバイトだ。

なんか面倒くせえ。

そんな事を考えながらベッドに入った。

不完全の盾使い

紫苑さんの言うとおりの、目標の人数はすぐに集まった。

友達を集めるのもそうだけど、それ以上に多かったのが、他の軍に殺されて、此処にくる人だ。

我が軍の戦い方を見て、人型にとどめをさす軍が格段に増えていた。

ジーク軍も四天王をフル活用して、周りの勢力をどんどんうち負かしていった。

宇宙の絆2は、大戦国時代だ。

波が波を呼び、早いうちに自ら移動する者も多くなっていた。

紫苑「今日から本格的に私も復活する。プレイヤキルは今まで仕方なくしてきたが、やはりいけない。今後中止する。皆やらないように。」

紫苑さんがサイファ軍にいた事を知っているのは、主要メンバーと、サイファ軍の主要メンバーだけだ。

ちなみに紫苑軍への反感は、サイファ軍の中にはもうあまり無いらしい。

プレイヤキルは、今では当たり前に行われているし、サイファさんと紫苑さんの努力もあるだろう。

そして再び、サイファ軍との同盟を結んだ。

サイファ軍では、「紫苑軍が同盟を求めてきた。だから、プレイヤキルをやめる事を条件に同盟してあげた。」と、皆には話したらしい。

サイファ軍の好感度はますます上がり、反省しているように見える紫苑軍も、だんだんと好感を持たれるようになっていた。

今回の作戦で一番得をしたのはサイファ軍だが、紫苑軍としても上々の結果だ。

そしてその効果が出るのは、まだまだこれからだ。

今、プレイヤキルが流行りだしているのだから・・・

しかし、我々の思惑は、1日でうち砕かれる事になる。

クライアントの修正によって。

アライヴ「なんだよこれ・・・」

紫苑「最悪・・・(-_-メ)」

クライアントの重要告知に書いてあったのは、次のとおりだ。

「プレイヤズキルに対してのペナルティ及び、壊滅解散リスクの変更について。艦船撃沈以外で、敵大将以外のプレイヤズキルを行った場合のペナルティ新設。全国力マイナス5%。計算方法は、本来あるはずの国力を対象とする為、20回行えば、自動的に軍の壊滅を意味する。回復には5%1ヶ月を要する。軍の壊滅、及び解散を行った場合、その軍の少尉以上の階級の者は、兵国力が30万人規模以上で上位ベスト10の軍への入隊を3ヶ月禁止する。開始は本日より。バリューネットブラウザのバージョンアップを行わないと、ゲームに参加できませんので、早急にお願いします。」

みんながプレイヤキルを行って、我が軍に人が流れてくるもくろみは、あっさりたたれた。

それにしてもギリギリのタイミングだった。

後1日この告知が早ければ、サイファ軍との円満な同盟は難しかったかもしれない。

それでもなんとか間に合ったのだから、不幸中の幸いだ。

我々は最低限の勝利をつかんだのだ。

美夏「まあ、いんじゃない？それにやっぱりプレイヤズキルは、ドロドロになりかねないから、無くて正解だよ。」

てけとー「まあな。だけど今回の変更は、ダイユウサク軍の連中が、クライアントに進言したって話だぜ？あいつらゲーム業界に影響力大きいからな。あくまで噂だけど。」

まあそれが本当だとしても、今回の作戦で全く利益を得ていないダイユウサク軍だ。

それくらいは良いだろう。

実際これはただの噂だとは思いますが。

紫陽花「それよりも、最低限の目的は達成できたわけだし、今後どうするかよね。」

アライヴ「確かに。一度軍をきちんと整えて、いよいよ侵攻開始ってね。」

じえにい「わたしわあせんとおーできればいいー」

紫苑「その前に、俺に人材把握させて。(;_;)」

そういやそうだ。

俺は実際に倒してきた奴も多いから、どんなメンツが集まったか少しはわかるけど、紫苑さんにしてみれば知らない人ばかりだ。

それに俺だって、3割程度も把握していない。

話した感じで強そうな奴は何人かいたけど、どうしたものか。

紫苑「そこで、階級決めテストと称して、アライヴとじえにいには、テストバトルをみんなとしてもらいたい。」

アライヴ「みんなと？できない人も多いかも？」

紫苑「階級は、最後の評価に大きく影響するから、多少は無理しても集まるはず。だからよろ。」

アライヴ「わかった。」

じえにい「うん。つよいひとおればいいなあ」

てけとー「艦長候補はどうする？」

紫苑「俺と、紫陽花でテストするよ。」

スピードスター「♪」

こうして、俺達の階級決めテストと称した模擬バトルが、開始された。

昨日は15人ほどテストバトルの相手をしたが、我々基準で少尉以上になれる人はいなかった。

じえにいの方に、そこそこ使える人がいたらしいけど、それでも中尉クラスらしい。

ちなみに人数が増え、国力もかなり増えてきたので、俺の階級は今は少将、じえにいが准将だ。

てけとーさん、美夏さん、壁さんも准将に昇格で、初期からのメンバーと主要メンバーだけで将官クラスをやっている。

グループ通信メンバーもそうである。

できれば後何人か、このメンバーに入りたいのだけど、強くて話せる人はなかなかいないものだ。

まだまだ1/3をテストしただけだから、今後に期待。

アライヴ「今あいてる人で、テストバトルしてない人いましたら、返事ください。」

回線につないでいるかそうでないかは、軍の通信回線を開けばわかるのだけど、回線をつないだままではない人も多いから、こうして呼びかける必要がある。

レイズナー「あ、よろしく！」

アライヴ「はい、こちらこそ。」

レイズナーさんは、知っている。

と言っても、個人的にはではなく、ファーストの頃は中將までいった人だから知っているだけだ。

でも、階級ほど強いと言える人ではなかった。

しかしそれはシミュレーション主体だった頃の話。

今はパイロットとして来ているから、もしかすると・・・

・・・

悪くはなかった。

なかったけど、期待はずれだった。

中將だったから、もっとやるかと思っていたけれど、我が軍ではせいぜい少佐だな。

それでもこの人は貴重な戦力になるだろう。

ちょっと偉そうだけど。

レイズナー「君強いね。俺の軍にいてくれたら、中將にしてやったのに。(笑)」

いや、あんたの軍なんか絶対入らないし。

アライヴ「ありがとうございます。で、おそらく我が軍の、とりあえずは大尉あたりになると思いますが、いいですか？」

レイズナー「そんなに低いの？俺前中将だったんだよ？」

訂正。

すっげえ偉そう。

アライヴ「すみません。できるだけあげるよう大將には言いますが、上の方は詰まってるので、今後の活躍次第になると思います。」

レイズナー「そうだな。活躍すればいいんだからな。君と同じ隊にしてくれよ。」

アライヴ「私は旗艦直属の人型乗りなので、それは無理かと。すみません。」

レイズナー「しかたねえなあ。自力で活躍するか。」

最初からそうしてくれ。

あなたにはなかなか難しいだろうけど。

アライヴ「それでは、今後ともよろしくです。」

レイズナー「はいはい～」

一生「ふう～。全くこういう勘違い野郎は駄目だな。完全に名前負けしてるし。」

レイズナーって言えば、なかなか評価の高いアニメだ。

俺でも知ってるし。

そんな名前つけるなよな。

レイズナーがかわいそうだよ。

さて、気をとりなおして、次いくか。

俺は軍全体に通信を入れる。

アライヴ「まだテストバトルしていない人いましたら、声かけてください。」

しばらく通信が無い。

夕方とは言え、働いている人がなかなかゲームできる時間ではない。

いるのは多くが学校帰りの学生か、俺みたいなプーだ。

しばらくポーっと画面を眺める。

この時間はもういないかなあ～。

そんな事を思って一旦落ちようかと思った時、通信が入った。

チョビ「はい r はいあ r l じゃ」

...

チョビ「はい！お願いします！」

どうやら慌てていたようだ。

なんだかこれだけで、弱いってわかるんですけど。

まあでも一応テストしないとね。

アライヴ「はい。チョビさんですね。ではやりましょう。」

チョビ「よろしくお願いしますー！！」

ドジっ子属性で、こんな時間からプレイしてるって事は、きっと中学生か、良くて高校生かな。

アライヴ「では、そちらは本気できてください。終了の時は、発光弾を飛ばすか、通信で伝えます。」

チョビ「はいです！！」

さて、軽くもんでやるか。

テストバトルがスタートした。

チョビさんの機体は、ごくスタンダードな機体だ。

っていうか、全くカスタマイズしてないんじゃないのってくらい、最初に与えられるデフォルト機のようなだ。

これだけで、相手の強さはだいたいわかる。

きつとへボだ。

そう思って不用意に操作していたら、いきなり正確なビームライフルの攻撃がとんできた。

一生「おっと！」

俺は一発目をうまくかわしたが、すぐに二発目がとんできて、それを左腕に少しかすらせてしまった。

一生「なんだあ？」

弱いと予想していたのだけれど、案外やるんじゃないか？

俺は真剣に動きを見た。

落ち着きの無い動きだけど、その分動きが読めないし、狙いをしぼれない。

一生「ちょこまかと！だからチョビか！」

俺はそれでも狙いをつけて、絶妙なタイミングでビーム砲で攻撃した。

あの機体でこのタイミング、そうそうかわせるもんじゃない。

一生「なんと！盾か。」

チョビさんは盾でビーム砲を受けた。

盾なんて重くなるだけだし、それに反応できるならかわす方が賢い。

なぜなら盾はある意味消耗品だから。

傷つけば、本体と同様に修理が必要だから。

しかし、なんだろうこの子・・・いや、歳も性別もわからんから一応この人と言っておこう。

今戦ってわかったけど、あの機体は完全に初期状態だ。

少し違うのが盾だけど、デフォルトよりも大きな盾だから、動きは更に遅くなっているだろう。

人型のコントロールもその分難しくなっているはずだ。

なのにこのうまさ。

そうだ、うまいんだ。

フェネルは使ってないけど、俺はそれなりに本気で攻撃している。

なのに攻撃を当てる事もできない。

一方チョビさんは、一発とはいえ俺にビームライフルの攻撃をかすらせた。

もしこれがポイント制の戦いなら、有効をとられている状態だ。

なんとまあ、巧い人ってのは密かにいるものだ。

このテストバトルをしていなければ、もしかしたらこの子、いやこの人を完全にただの下っ端として使っていたかもしれない。

しかし、それにしてももったいない。

もっと良い機体に乗っていれば、今頃すでにどこかの軍で、エースパイロットだったかもしれない。

でもだから、こうして今此処にいるわけで、凄くラッキーだったのでは？

とにかく、もう少し戦ってみよう。

少なくとも負けてる状況で終わるのはあれだし。

俺は本気を出すことにした。

フェネル展開。

さーて、これに対して、どういう戦いを見せる？

なんて思った瞬間、チョビの盾から無数のビームが発射された。

一生「なんですとお！！拡散ビーム？しかも熱感知型だよ。」

俺の展開したフェネルが、一瞬のうちに落とされた。

この子、いやこの人、俺の天敵じゃないか！

普通こんな盾を持つプレイヤなぞ存在しない。

冗談でやっているやつくらいだ。

でもこの子、いやこの人はマジでこの盾を使っている。

そして巧い。

フェネル無しでこの子に勝つ？

もうこの子でいいや。

きっと高校生だ。

女の子だ。

人型の性能はこっちが上だ。

勝って当然のはずだけど・・・

俺は集中力を高めた。

結局テストバトルの制限時間10分、全てを使っても決着はつかなかった。

そしてこちらの攻撃で命中させたのが、ビーム砲1発と、意表をついた予備搭載のフェンネルの攻撃だけ。

こっちは何発当たっても不思議ではないくらいだったが、運良く最初にかすって以来、攻撃はくらわなかった。

でも少し何かが、他に気がいくような実戦だったら、俺は負けていたかもしれない。

この後チョビに、じえにいとともテストバトルさせてみたら、あっさりじえにいに負けていた。

まあ初戦だったから、じえにいが強いのはわかるけど、相性ってのもあるのかもな。

あの盾も、じえにいの強力なライフルには、腕が盾を支えきれずにいたしね。

だからこそ、今後チョビには良い機体に乗ってもらおう。

きつともっと強くなる、そう確信した。

ちなみにチョビは小学生で、夜11時までしかプレイできないらしい。

そして日曜の昼間も、親に注意されてできないらしい。

全くもったいない。

この子が完全体だったら、我が軍の優勝確率が倍増だったのになあ。

楽しき逆境

ほぼ全てのプレイヤーのテストバトルが終わった。

俺がテストした中で一押しはもちろん、チョコビ。

次がまあレイズナーさんって事になるんだけど、それよりは今後に期待って事で、ハルヒ君の方が俺は好きだ。

もちろんハルヒに君をつけているから、男なのだけど、最近ハルヒって名前の「男」が多いのは何故だろうか？

アライヴ「そんな感じですね。他はどうですか？」

じえにい「こっちはあ、ひとりつおいひといたよお。わたしいよりもよわいけどお〜」

人型パイロットで強い人は、俺も一応対戦させてもらった。

確かにじえにいがテストした、暗黒天国さんは強いんだけど、機体に金かけすぎっていうか、とにかく機体の性能でかなり強さを作っている感じだ。

まあひとりくらいあれくらいの機体を動かす人がいても、そんなに負担にはならないけれど、やられたら悲惨だよなあ。

紫苑「こっちはひとり使える人いた。別の意味でもうひとりいるけど。(^-^)」

アライヴ「へえ、どんな人なんですか？」

気になる。

別の意味ってなんだろうか。

紫苑「名前がジーク。(笑)」

・・・

確かに。

紫苑さんなら、名前も利用して戦略を考えそうだ。

紫苑「では、階級と所属変更を発表します。」

ほう、所属も変更があるのか。

そらそうだろうな。

紫苑「まず、レイズナーは大佐にして、重要拠点以外全ての場所をまかせます。」

なんと！

あんな人にまかせるなんて、やばくね？

紫苑「任せるのは、先ほど名前が出た人以外全て。勝手にさせます。ああ見えて彼は慎重な人だ。勝算の無い戦いはしかけないし、負けてもいい場所しかまかせない。ようは俺が全部管理するのが面倒だから、最前線と重要拠点以外の面倒事を引き受けてもらう。」

確かに、今後領域が増えたら、一人で管理するにはしんどいだろうな。

そのあたりを任せて、戦闘に集中するって事か。

紫苑「一応、光合成中尉を補佐につける。最悪、光合成さんがなんとかしてくれるでしょう。」

光合成さんは、テスト初日にじえにいがテストした、そこそこ戦える人型乗りだ。

現状なら、ハルヒ君よりも強いんじゃないかな？

俺とじえにいのレベル感覚が同じなら。

紫苑「壁には今までどおり、呼び出しに応じられるように単機でコロコロコロニーに常駐してもらう。」

ほう、シオンまではもう敵はこれられないという判断か。

今後本拠地はコロコロね。

紫苑「てきとーは、後で誰か欲しい人がいたら言ってくれ。階級の低い奴で育てたい奴ね。そしててきとーに動いてもらう。」

てきとー「はいよ。」

ほんと、てきと一さんって、適当なんだな。

紫苑「美夏は、いる時は今後旗艦に同乗してもらおう。俺が出撃する事もできるだろうから。」

おお！

紫苑さんが、人型で？

まあたまに出ていたけれど、本気で戦った事を見た事がない。

でもおそらくは強いんだろうな。

紫苑「で、旗艦には後、じえにいとハルヒが乗る。」

なんと！俺がはずされた？

今までじえにいとコンビを組んで来たのに、何故だ。

じえにい「あれ？アライヴさんと、べつ？」

紫苑「ああ、今後はハルヒとコンビを組んで、ハルヒを鍛えてくれ。もしくは俺と組んでもらう。」

ハルヒを鍛える為に、じえにいと組むのはわかるけど、紫苑さんと？

まあいままで戦い方を見てきて、紫苑さんが判断したんだから、おそらくはそれでいけるのだろう。

紫苑「ジークは、面白いから、今後いろいろ考えて使う。旗艦の名前はバルバロッサにしてもらって、ビジュアルも真似する。」

まあ当然だろうな。

紫苑「星には、暗黒天国を預ける。使えるだろ？（笑）」

スピードスター「♪」

なんだかわからんけど、星さんが巧く使えるようだ。

って、まだ俺の配属がわからんけど、残ってるのって。

紫苑「で、紫陽花のパープルフラワーに、アライヴとチョコビだ。」

って、ええ！！

俺の天敵チョコビと？

フェネルを使うと、チョコビの拡散ビームが邪魔になるから、共闘はきつような。

紫苑「チョコビは単機戦闘が得意そうだから共闘を覚えて欲しいし、アライヴは天敵を克服してほしい。（笑）」

なるほどねえ。

戦闘の本番、真の敵であるジークやダイユウサク軍との対戦は先になるだろう。

それまでに、もっと強くなれと、そういう事が。

望むところだ。

確かに最近じえにいと共闘で、ぬるい戦いをしてきたから、いまいち成長してないんだよな。

こうして、実戦での俺の特訓は始まった。

つーか、また子供のお守りですかあ？

チョコビとの共闘。

一生「くっ！」

どうしてもフェネルを使ったら、あの盾が邪魔になる。

盾の設定を熱感知にしなければさほど邪魔にはならないけれど、それだと敵を落とす事もできないし意味がない。

かといって、フェネルを使わないなんて、俺の戦闘スタイルから反する。

どっちにしてもどちらかが戦い方を変えない限り、共闘は無理だ。

チョコビに、何故拡散ビーム砲付きの盾を使っているのかと聞いたら、デフォルト機にこの盾しか持っていないからだそうだ。

それにこの盾は、親が誕生日プレゼントで買ってくれた商品についてきたアイテムらしい。

だからどうしても使いたいのだそうだ。

そういった愛着や愛情が、強さを作る事を俺は知っている。

俺のフェネルもそうなのだから。

使う人が少ないフェネルを、完全に使いこなせているのは、ひとえにフェネルへの愛。

まあそんなわけだから、盾を自在に操れるように、左腕の強化や、盾を使っても有る程度動けるパワーアップを、軍の予算でやったわけだけど。

此処は俺がおれるしかないかもな。

そうするとして、この子と共闘するなら、どんな戦闘が一番合うのだろう。

この盾をもっている限り、敵はフェネルは使えないし、下手に近寄ってくる事も不可能だ。

接近が有るとするなら、拡散ビームを撃った直後のタイミングで近づいてくるだろう。

もしくは圧倒的スピードで後ろを取るかだけど、パワーアップしたチョコビのガードナーの後ろはなかなかとれないはずだ。

でも背後がとれないような相手だったら、チョコビには勝てないだろうし、俺はそれ以上に強い相手の事、つまり背後をとってくるような相手をフォローできれば良いのではないだろうか。

盾の攻撃範囲は、前方ほぼ180度であるわけだから、後方180度なら、俺のフェネルも使えるじゃないか。

同じ敵を狙う、又は同じ敵を向いているから、今のフェネルの設定では使えないんだ。

今は自分と敵の位置から、フェネルをドーム型に配置している。

これを別の対象や形で配置すれば、うまくいくのでは？

チョコビと共闘する時は、ガードナーを対象に後ろに配置したいところだけど、それはできないから、俺の機体の向きで配置するか。

俺のメインモニタの隅を囲う形で、フェネルを円状に配置する。

距離は俺の得意な間合いを少しずつ調整するとして、もし同じ敵を相手にする時は、モニタは後方カメラを使う事になるから、後方カメラの性能を少し上げる必要があるな。

いっそ前後全く同じカメラをつけて、切り替えられるようにするのはどうだろうか？

共闘は並んで、もしくは背中合わせで戦う事になる。

フェネルの設定を後方にして、共闘ってのもあるな。

この場合、長距離攻撃の強化が必要になる。

この際だ。

キュベレイはあきらめて、SSかもしくは前に使えそうでキープしていた機体を、チョコビとの共闘用に改造してみるか。

戦いながら、色々試しつつ、頭の中で新しい人型像を創造していった。

なんとなくイメージはできあがった。

一生「よし！次回までにコレ作ってみるか。」

戦いながらメモした紙を見ながら、俺は久しぶりに強敵に立ち向かう時のわくわく感を味わっていた。

子供はみんな寝ている丑三つ時、俺は予算とキープしていた部品を駆使して、第三の人型作成に燃えていた。

ベースは前に拾って取っておいた、肩に羽根のようなものがついたタイプだ。

キュベレイ好きな俺にはやはりこの形がっている。

スピードもかなり出るし、瞬発力が半端じゃないから。

一瞬の動きが勝負を決めるのは、上級者では当然だ。

ほんの一瞬が勝敗を分ける戦いは、これまで何度かやってきた。

その全てで負けなかったのは、瞬発力のおかげ。

まあそれも、瞬発力をおりこんだ戦い方をしているから、そういう結果になるとも言えるけど。

ドリームは、機体が瞬発力重視でなくても、自身の反射神経とコントローラーさばきで、この俺の瞬発力機を超えている。

瞬発力がなくても、先を読み正確な操作でそれを補うカズミン。

この二人に、俺は現状勝っているとは言えない。

ドリームに関しては、今日明日で能力で超える事はできないだろう。

だったら何で勝つか？

バトルグリードでドリームに勝った人を調べてみたら、カズミン以外では、だいたい初戦、そして同僚のダストだけが、戦いの中で多く勝っていた。

調べたら、ダストは奇策戦術に優れたプレイヤーである事がわかった。

一言で言えばアイデアだ。

ドリームより強くなるには、今はアイデアしかないだろう。

一生「できた。」

作成していた新型の人型ができあがった。

といってもプロトタイプだ。

まだ足の一部と、両腕の部品が足りない。

代わりに普通の両手両足だ。

実は新型機を作る為に、新パーツの開発を始めていた。

普通に考えて、さほど難しい開発ではない。

少しコストがかかるのと、どれだけパフォーマンスを下げないかってのが難しいだけ。

だからパフォーマンス無視のと、パフォーマンスを落とさないものの開発をしていた。

パフォーマンス無視のは、すぐにできあがるだろう。

俺は画面の機体を見て、少しわくわくした。

一生「よし！」

此処までやって、俺はパソコンの電源を落とした。

慢心

今日の戦闘に、開発は間に合わなかった。

だけど、試作機で試したところ、この方法ならそこそこやれる事がわかった。

チョビとの共闘は、お互いの背中をお互い守るのが基本だが、俺はどちらかと言うとサポート。

フェネルで狙うのは、背後にいるチョビと戦闘をおこなっている敵。

そして俺は後ろにいる敵に攻撃をするわけだ。

即ちチョビと戦闘している敵となるのだけだ。

チョビの背後、即ち俺の前方に敵が現れた時だけ、俺はサポートを中断して目の前の敵に集中する。

後ろへの攻撃は、普通ならやりにくいけど、前後同じカメラをつけ、切り替えて使う。

だから背後への攻撃も、実質前に攻撃するのと変わらない。

ただ、腕や足の規格から、攻撃の範囲が限定され、融通がきかない部分があり、それを補う為の新パーツ開発だ。

今のところそれができていないから、まだ本当の検証はできていない。

それでもこれだけやれるのだから、良い戦術と言わざるをえないだろう。

フェネルを使って、チョビと共闘できているだけでも凄いのに、正直チョビに近づける敵はいない。

フェネルで牽制して、チョビがしとめる。

チョビのライフルは、じえにいのライフルほど威力もないし、射程も短いけど、正確さは負けていない。

接近されそうになった場合の対応も早い分、ギリギリまでライフルで戦える。

そして最後には盾だ。

チョビだけでも接近できる敵は限られるのに、俺が完全に押さえれば、単機で俺達に勝てる敵はまずいないだろう。

ドリームでもカズミンでもやれる。

まあ2対1で粋がっても淋しいものがあるけれど、勝てる算段があるだけでも良い。

後は戦略戦術でそういった場面を作れば良いのだ。

じえにいもいるし、紫苑さんだってかなりやるはず。

サイファさんのところと組めれば、今日子さんにどちらか押さえて貰う事も可能。

どうやって勝てば良いのかわからなかったドリームやカズミンに、勝てる可能性が見えてきただけで、俺は俄然やる気がでてきた。

これはチョビのおかげだな。

チョビのおかげで俺の戦闘パターンも増えたし、きっと強くなる。

もしかしたらこうなる事を、紫苑さんは見越していたのだろうか。

そうなら流石紫苑さんだな。

改めて紫苑軍である事に喜びを感じた。

チョビ「そろそろわたし寝ないとお母さんが...」

アライヴ「ああ、おけおけ。後は俺だけでもなんとかなるし。パープルフラワーに戻りな〜」

チョビ「はい！おやすみなさいー」

アライヴ「おやすみ〜」

さて、チョビの欠点はこれなんだよな。

良い戦いをしているけど、23時前にはネットから落ちなければならない。

今日この程度の敵だったらなんとかなるけど、相手が強敵だったら致命傷になりかねないからな。

紫苑「そっちにじえにい行かせようか？」

アライヴ「ああ、大丈夫です。楽勝でしょ。」

紫苑「大将そっちに行ってるけど。」

・・・って。

一生「ええ————！！」

なんと、今日攻めている砦は、結構重要拠点だとは言え、大将自ら人型で出て守る所か？

まあ、俺の常識に当てはめても仕方がない。

目の前には大将自ら出陣してきているのだ。

此処は俺と、敵大将の一騎打ちだ。

大将の名前は、「サクラ」か。

この名前は使っている人が多いから、特定するにはIDを見ないとね。

見ると昔から知っている、しょぼくれプレイヤーの「サクラ」だった。

なんだ、楽勝じゃん。

そう思ったのもつかの間、凄いスピードで後ろに回り込まれる。

一生「はやい！」

俺は全速前進、そして左に旋回。

紫苑「サクラは前のゲームでは糞プレイヤーだったけど、アクション系はかなりの使い手だぞ〜」

って、今更言われてもわかってしまってるんですけど〜

そして今更助けてとも言えねえ〜

アライヴ「大丈夫です〜」

俺はこれだけ送り返すので手一杯だった。

機体の能力だけなら、スピードはあちらに分がある。

俺はフェネルの設定を変更した。

コレでそう簡単には近寄ってこれまい。

共闘用そのままでも、並の敵なら楽勝なんだけど、この敵はそう簡単ではなさそうだ。

気を抜くと簡単に背後を取られそうになる。

そんなに背後が取りたければ、取らせてあげようじゃないか！

俺はいつもの、逃げると見せかけてフェネルで蜂の巣にする戦術を使う事にした。

敵を取り囲むフェネルが、サクラを攻撃する。

一生「いまだ！」

その瞬間反転して全速前進。

これで後方のフェネルも敵を攻撃する。

これだけの一斉攻撃、かわせまい。

まあ、これよりもひどい状況で、ドリームはかわしてきたけどね。

そんな事を思っていたら、サクラ機もこれだけの一斉攻撃をかわし、更にビームライフルで攻撃してきた。

一生「おい〜」

マジかよ。

あれをかわすか？

でも、何かかわしかたが引っかかるな。

考えている間に、爆発音が響く。

一生「しまった！」

考え事をしていたら、足にビームを当てられてしまった。

足で良かった。

宇宙では大して影響は無い。

バランスが少し崩れるかもしれない程度だ。

一生「くそっ！もういっちょだ！」

かわし方が何か引っかかったので、俺はもう一度フェネルでの攻撃を試みる。

不自然に思われぬように、上手くフェネルの射程の中に誘い込む。

そして素早く反転して、フェネルの後ろへと逃げる。

今度はカメラを後ろのカメラに切り替えた。

しっかりと敵のかわし方を見る為に。

フェネルの動きがすぐに止まり、一斉射撃。

一生「って、もしかして、フェネルが通用しない？」

フェネルの攻撃は、上手いタイミングでかわされ、更に攻撃もされる。

今度はカメラが切り替えられていたので、敵の攻撃は簡単にかわせた。

しかし、なんだろうか。

フェネルが、もしかしてフェネルの攻撃タイミングが読まれている？

それにフェネルの攻撃する瞬間、一瞬敵機の動きが止まったように見えた。

一生「キュベレイならフェネル無しでもやれるのに！」

今俺が操縦しているのは、第3の機体、今開発途上の機体だ。

名前はまだ無い機体だが、機体の性能が落ちたら、俺はこれほどまで使えないのか？

否！

何かフェネルを上手くかわす方法を、敵は持っているのだ。

それが分かれば、それを逆手にとれば、きっとやれるはず。

俺はもう一度、同じ作戦を使う事にする。

片足を失った機体が、少し悲鳴を上げている。

これだったら、もう片一方の足も必要ないな。

俺は、もう一方の足と、破壊されてほとんど残っていない足を、付け根から切り外した。

多少軽くなったが、足から出る推進力も失われるから、スピードは変わらない。

が、安定感が出た。

上手くフェネルの射程内に誘い込み、反転前進。

フェネルは一瞬俺の動きについて行こうとするが、すぐに動きを止めて、敵を一斉砲撃した。

今度も同じように、敵機は一瞬動きを止めたかと思うと、上手くフェネルの射線を外して、そのままこちらに攻撃してきた。

一生「あっ！なるほどw」

俺は気がついた。

フェネルは、攻撃する時、必ず一瞬動きを止める。

動きながら撃っても、狙いが安定しないからだ。

前にドリームが、全てのフェネルの攻撃をかわせたのは、おそらく止まったフェネルの射線を見極めてかわしていたのだろう。

そんな芸当は、普通の人間にはそうそうできるものではない。

俺でもおそらくは数機のフェネルからの攻撃でできれば良い方だ。

それをこの大量のフェネルでできる人が、何人もいるとは思えない。

さすれば答えは簡単だ。

チョビがいなくなってから出てきた事、大将ではなく、俺に戦いを挑んできた事、それはフェネルに対して対策があったからだ。

おそらくフェネルの止まった瞬間、射線を計算して、自動でその射線を外すようなシステムを開発でもしたのだろう。

ならば、それを逆手にとれば良い。

俺はそう断定すると、もう一度同じ事をやるように見せて、フェネルの射程に敵を誘い込んだ。

敵は、何度やっても同じだよと言いたげに見える。

しかし、今回は少し違うぞ。

私は今までと同じように、反転して全速前進。

さて私の考えが正しければ・・・

私はカメラを後ろに切り替え、チョコビと共闘する時のように、後ろへの攻撃をする。

タイミングは、フェネルの攻撃タイミングと同じ。

私の予想が正しければ、フェネルの射線を外す事はするけど、その間、操作に自由はきかないはずだ。

フェネルの射線上以外の攻撃は、避けないはず。

予想どおり、見事にサクラ機に俺の攻撃が命中した。

一度的中してから後は楽だった。

混乱した敵は、敵ではなかった。

私はサクラ機を戦闘不能までにして、そして更に完全破壊した。

大将だけは、それが許されているし、それをする事が目的だから。

サクラ軍は、次に大将になるであろう人が、それを受け入れなかったので、壊滅する事となった。

しかし、今回の戦いは、思いの他苦戦した。

それは、今までの戦い方に慢心して、油断していたのが原因だろう。

俺は反省の意味も込めて、この機体に、テンダネスと名付けた。

それにしても、フェネルだけをターゲットにする、こんなシステムを開発する人もいるんだねえ。

フェネル使う人なんて、かなり少ないし、これだけ多く使う人に限れば、何十人もいないだろうに。

強敵出現

クライアントとは、依頼人や顧客の事なのだけど、何故ネットゲームやなんかでは、我々ではなくゲーム会社の方をクライアントと呼ぶのだろうか。

正確には、どうやらゲーム自体、アプリケーション自体をそう呼ぶところから、そのゲームやアプリケーションを提供している会社も、ひっくるめて呼んでいるからのようだ。

でも、ゲームをしている我々にとって、会社がどこかなんて問題ではなく、ゲームの中で生きる者にとって大切なのは、その世界の中での出来事なのだ。

だからどうでもいいのだけれど、ゲーム内では、パーツ開発の依頼をしてる俺こそがクライアントだよな、なんて思う今日この頃。

今日、先日開発を開始していたパーツに関して、クライアントから返事がきていた。

性能を落とさないようにと思って開発した物と、とにかく動くものと、2種開発していたわけだけど、どうやら先の方は失敗だったようだ。

クライアントからのメッセージには、「アイデアが無い」旨が書かれていた。
簡単にいえば、高い性能を求めるパーツ開発には、それなりのアイデアを持って事だ。
アイデアが無いからまかしていたんだけど、どうやら甘い考えだったらしい。

そして、メッセージはもうひとつあった。
このパーツの意図が分かっているようで、それに関してだ。

俺の依頼したパーツは、関節である。
普通ひじは、まっすぐになってから、逆には曲がらない。
それを曲がるようにしたものだ。

そのパーツでやりたい事は、後ろも前も、同じように動ける人型を作る事。

それができれば、背後を取られるデメリットは完全に無くなるわけだ。

それは蔽のほうも分かっている、それでこのメッセージだ。

蔵「前後を逆にして戦う場合、体にうけるGも逆になるが、ゲームではそれを考慮できず、経験値による制限をかける事にする。」
そういった内容だった。

ちなみにこのメッセージは、どうやらゲームシステム全てに関する事なので、全てのユーザーに伝えられているようだ。

もちろん、後ろ向きに戦う場合、コックピットも後ろ向きにできる方法があるなら、その制限はうけない。

で、元々人型には、倒した機体の数や、戦闘時間から、経験値とレベルがついている。

レベルが3以上になれば、それほど強さには関係がなくなるのだけど、レベル1の機体に乗る場合は、多少の制限がある。

初めて他人の自動車に乗ったら、なんだか乗りづらい、まあそう言う事だ。

そして、人型にメインカメラを複数つけた場合、カメラごとに経験値などが分散するシステムへと変わった。

ひとこで分かりやすく言うと、ひとりで持てる人型の数は、5機と決まっているが、今後は、メインカメラの数で管理するって事になるのかな。

メインカメラの無い機体が存在したら、それはそれで1機とカウントされるわけだけだ。

もっと分かりやすく言うと、俺のテンダネスは、同じ機体でありながら、経験値とレベルの観点から見れば、テンダネス表とテンダネス裏の2機もっている事になるってわけだ。

それにしても、俺が依頼したパーツで、俺のアイデアで、これだけ蔽を動かしてしまったのが、ちょっと申し訳なかった。

なんにしても、一応関節パーツのひとつは完成していたのだから、とりあえず試してみる事にした。

パーツの付け替えは、ゲーム内のメカニックに依頼して、数時間を要した。

その間、俺は飯を食べて、風呂に入って、テレビを見ていた。

完成のメッセージが届くと、早速シミュレーション能力値を表示してみる。

一生「思ったよりきつー！」

パワーダウンどころか、パワーは半減しており、当然だけど、重い装備はできそうにない。

ビームライフルでも命中率が若干下がる。

一生「持ちかえはできないけれど、内蔵するしかないかぁ〜」

ビームライフルだと、燃料分撃ち切っても、取り替えができて便利だ。

しかし腕に内蔵したタイプだと、取り替えもできないし、機体本体の燃料の消費も早くなるのが欠点だ。

利点はもちろん、軽量化できて、装備の持ちかえが必要無く、イニシアチブをとりやすい。

一生「今度はライフル持とうかと思ったけど、俺の宿命かな、」

そう、キューベレイは、ビームライフルが腕に内蔵されている機体だ。

だから使い慣れていると言えば、使い慣れているし、コレで良いかと諦めた。

後の問題は、近接格闘系がかなり弱くなる事。

蹴りを入れてもダメージは少ないだろうし、攻撃を受けとめようとしたら、関節は壊れそうだし、そのままやられそうだ。

ひとつの利点が、多数の欠点を生む形か・・・

それでも、せっかくだから、俺はこのテンダネスを完成させようと燃えていた。

それ以降の戦闘は、極力テンダネスで出撃した。

しかも、後ろのメインカメラを使った、後ろ向きでの戦いだ。

といっても、チョコビの後ろに隠れて、敵をコソソリ狙うんだけど。

一生「まだ射線がずれてやがるよ。」

こんな戦いを繰り返し、既に1週間。

レベルはようやく5まで上がったが、マイナス修正はまだまだ体感できるほど大きい。

チョコビ「どうですか？調子は？」

チョコビが突然話かけてきた。

アライヴ「まずまずだな。もう少しなんだけど、後数日でなんとかなると思う。」

チョコビ「そうですねー！ココまで強い人いなかったから良かったけど、そろそろ強い人きそうですねー」

アライヴ「そら、戦ったら強い奴もいるだろうからな。」

何故チョコビがいきなりこんな事を言い出したのか、分からなかったから適当に返事を返した。

そしたらまた、チョコビから通信が入る。

チョコビ「ほら。星さんが苦戦してますよ。」

アライヴ「マジか！」

どうやらチョコビは、戦闘を行いつつも、他の状況も把握しているようだった。

俺は広角カメラでマップを広げ、星さんの戦闘空域を映し出す。

見ると確かに、星さんは苦戦しているようだった。

というか、逃げ回っていた。

それを見た瞬間、紫苑さんから通信が入る。

紫苑「悪い。星の救援頼む。」

アライヴ「了解です。」

かなり状況は悪いようで、紫苑さんにも余裕は感じられず、それ以降紫苑さんからの返事は無かった。

チョビ「早く行きましょう。」

通信は、チョビにも送られていたようだ。

アライヴ「おけw」

俺たちはそれだけ通信をかわすと、星さんのいる空域へと向かおうとした。

しかしそれはすぐに阻止される。

目の前に、1機の人型が立ちふさがっていた。

蔵

最大の敗戦

宇宙の絆IIは、少しずつ勢力が整理されつつあった。

宇宙では、拠点が1つしか無いような勢力は、少しずつ淘汰され、もう後数勢力しか残されていないかった。

そのうちのひとつが、今回の攻略ポイント、有人要塞イゼルローンだった。

まだ残っている勢力なので、そこそこの強さは予想していたが、拠点が1つであり、人型の数も限られているので、簡単に攻略できるものと思っていた。

油断していた。

ココまで残っている事に疑問を持つべきだった。

星さんは完全に押されているようだ。

紫苑さんのところも、じえにいと互角に戦う機体があらわれたらしい。

いや、むしろ押されていて、紫苑さん自身が、援護しているようだ。

そして俺の目の前にあらわれた機体は、何か迫力があつた。

名前はサラで、階級が曹長。

人型名は、レッドストーン。

正直聞いた事はない。

しかし俺が軽く攻撃して抜けようとしても、全く隙は無かつた。

突然通信が入つた。

サラからだ。

受信しない事もできるが、俺は回線を開いた。

サラ「こんにちは。あなたね、夢ちゃんが言っていたのは。」

一瞬意味がわからなかつた。

サラ「あ、夢ちゃんって、ドリームの事ね。」

一生「ええええ！！」

なんだ？

このサラって人、ドリームとリアル友達か何かなのか？

アライヴ「えっと、ドリームが何か言っていたのかな？」

サラ「ああ、ごめんごめん。あなたの事、なかなか強いつて言っていたから、覚えていたのよね。」

アライヴ「ありがとう。」

よくわからないが、あのドリームが俺の事を強いと言っていたらしいから、少し嬉しかつた。

サラ「でも、機体はキュベレイって聞いていたんだけど、今日は違うのね？」

いったいこの人は何が言いたいのか？

正直話してる場合でもないのだけど。

そんな空気を察したのか、チョコビが星さんの救援に向かおうとする。

しかしサラのレッドストーンが、すぐにその行動を阻止する。

サラはなにやらチョコビに通信を送ると、またこちらに通信してきた。

サラ「それがあなたのメインの機体なの？」

どうやら話さないでダメみたいなので、俺は話す事にする。

アライヴ「これはメインではないけど、今後メインにする予定だよ。」

サラ「あら、そう。なら、それなりの戦いはできるわね。おふたりお相手お願いするわ！」

なんだかわからないけど、とにかく戦闘再開らしい。

勝手だと思いつつも、俺とチョコビは構えた。

サラ「では、いくわよw」

その通信を最後に、サラはこちらに攻撃を開始した。

一生「早！」
動きはやたら早かった。
どうやら標準スピードタイプの機体のようだ。
しかし、俺たちは二人だし、コンビであればドリームだって倒せる算段もあった。
早く倒して星さんを助けないと。
チョコビとの共闘で、初めてのマジ勝負だった。

その頃、星さんは追い詰められていた。
スピードは星さんが圧倒的有利なのだけど、敵の攻撃は強力で、少しでもかすると、そこそこのダメージを受ける。
おそらく星さんがココまで苦戦する戦いは初めてだろう。
なんせいつもならスピードで、最悪逃げるわけだけど、それすらも許さない攻撃の嵐が星さんを襲っていた。
少しずつダメージが蓄積される。
全てを把握している紫苑さんが、ハルヒ君を救援に向かわせていたが、じえにいと戦っている敵が、簡単には許さない。
この2機は強い。
なんとかハルヒ君が到着した時には、星さんの流星は、戦闘不能状態になっていた。
ハルヒ「紫苑さんダメです。星さんは既に戦闘不能です。」
紫苑「なんとか回収できない？」
そんな通信をしていると、流星を墜とした機体、サウストラゴンは、今度はハルヒ君の機体、ウイングガンマに襲いかかった。
通信など、できる状況ではなくなった。
紫苑さんは、最後の手段か、自ら出撃した。
旗艦パープルアイズは、先日のテストで、唯一艦長として見出された、小麗に任せて。
流星に2対1になったら、敵のマイヒメは押され始めた。
そこに、ハルヒ君をあっさり倒してやってきた、サウストラゴンがやってきた。
再び2対2で、戦況はこう着した。

こちらは2対1なのに苦戦だ。
ドリームでも倒せるはずだったが、それはあくまで俺が完全体であったならの話。
最近はやや温い戦いばかりしていたし、この機体はレベルを上げる為の出撃なので、手抜きチューンナップバリバリだ。
それでも勝たなければならない。
紫苑さんの方も苦戦しているし、このままでは全滅もあり得る。
もし俺たちが負ければ、このサラのレッドストーンはあちらに向かうだろう。
さすればおそらく撤退だ。
うまく撤退できれば良いが、失敗したら全滅。
今までの最大のピンチだ。
それにしてもこのサラ、強い。
チョコビの戦い方を瞬時に見抜いたのか、正面からは接近してこない。
まああれだけのかい盾、何かあるとは思わな。
そして攻撃が正確だ。
こちらの攻撃タイミングに合わせて、うまく隙をついて攻撃してくるから、不用意に動けない。
1対1なら、チョコビよりも上の敵。

それをサポートしたいのだけど、フェネルの威力が発揮できる射程には入ってこないし、完全に俺は置き去りだ。

このままではこう着状態、一か八か、勝負をするしかない。

アライヴ「一か八か、勝負にでるから集中してくれ。返事はできないだろうから良い。」

俺はそれだけチョコビに通信を送った。

こんなギリギリの戦闘中に通信ができる俺って、ホント役に立ってないな・・・

そんな事を思う中、俺は勝負に出た。

フェネルの設定を、背後から背後ではなく、敵の向こうからこちらへの攻撃に切り替えた。

これだけの距離があれば、拡散ビームでフェネルが墜とされる事もないだろう。

途端に、今までの位置から、フェネルが高速で移動を開始した。

すぐに敵の背後へと到達する。

それをいち早く察知した敵は、好機と思ったか、それとも危ないと思ったか、フェネルの攻撃を回避する為、こちらへと高速で向かってきた。

これで、ある意味いつもの俺の戦術だけど、こちらの機体のメインはチョコビ。

敵と共にフェネルが近づいてくれば、フェネルの攻撃を自分に受ける危険性もあるし、拡散ビームでフェネルを撃ち墜とす危険性もある。

そんな中、敵はこちらに向かってくる。

普通ならピンチだけど、こちらには拡散ビーム砲を持った盾がある。

それに敵は、フェネルよりも早く、こちらに近づいてきてくれていた。

一生「今だ！」

俺はゲームの中へは聞こえない声を上げていた。

盾から拡散ビームが発射される。

これはそう簡単にはかわせないはず。

しかし、よく考えたら読まれていた戦術。

ギリギリのところでかわして、俺たちの背後へとまわってきた。

これが、1対1の戦いなら、完全に負けていた。

俺の機体が、ただのしょっぱい機体でも負けていた。

しかしおれの機体は、背後にメインカメラのついている、特殊な機体。

そして今までの戦い全てが、背後への攻撃。

俺は今日初めて、メインカメラを前方へと切り替えた。

今まで制限されていた枷も、全て外れた。

全く予想しない事が起こったからビックリしたのか、それとも俺の目にそう映っただけなのか、レッドストーンが一瞬止まって見えた。

ロックオンは早かった。

ビームを発射すると、すばやくビームソードを持って、斬りつけた。

この一撃が勝負を決めた。

チョコビがレッドストーンをライフルで仕留めて戦闘不能にした後、俺たちは紫苑さん達の救援に向かった。

紫苑さんは、マイヒメ相手にやや優勢に戦っているようだったが、じえにいがかなりやられていた。

もう10秒ももたないかもしれない状況。

俺たちはギリギリだった。

アライヴ「じえにい、戻っていいぞ！」

俺はそれだけ言うと、今度はサウドラゴンを相手にしようとした。

しかし結局戦闘にはならなかった。

紫苑「撤退する！」

紫苑さんの撤退命令だった。

確かにこのままやると、俺たちは全滅の危険もある。
だけど、星さんとかハルヒ君とか、どうするのか。

小麗「回収完了しました～w」

紫苑「御苦労(^-^)」

どうやらあの状況で、小麗さんが回収していたようだ。
なかなか凄い。

戦況が不利な中、艦船だけで敵の中を突っ切ったのか。

紫苑「皆先に行って。俺とパープルアイズなら、大丈夫だから。」

少し心配だが、紫苑さんなら大丈夫だろう。

それにパープルアイズは、超高速艦だ。

撤退は、スムーズにいった。

どうやら敵も、そろそろきつい状況だったようで、追撃はなかった。

皆無事戻っては来れたが、今までで最大の敗戦だった。

明けない夜はない

イゼルローン攻略が失敗に終わり、皆で反省会をしていた。

というか、ただの雑談だけれど。

じえにい「あいつつよいよお～wこっちがこうげきしても、かいひせずむかってくるしい～むちゃくちゃだよお～」

じえにいの戦いは、フェネルでけん制して、回避するところを狙い撃つ形だ。

それなのに、あのサウスドラゴンは、回避せずに突っ込んできたので、じえにいは完全に意表をつかれたようだ。

アライヴ「なるほどな。じえにいは相性が悪い敵だったか。」

ハルヒ「それだけじゃないですよ。星さんも、僕も墜とされてますし。」

ハルヒ君の言うとおりの、じえにいが墜とされそうだったのは相性だとしても、実際に敵の3機は強かった。

スピードスター「でもさ、敵の3機、名前どっかで見た事あるんだよね♪」

一生「え？」

星さんの言葉に、皆興味をもったようだ。

紫苑「マジ？」

ハルヒ「僕は知らない。」

小麗「私も知りません。」

アライヴ「チョビは？」

紫陽花「チョビちゃんはもう落ちちゃったよ。」

そう言えば、チョビは撤退早々、11時を過ぎていたから落ちたんだった。

紫苑さんの撤退指示は、絶妙のタイミングだったという事か。

暗黒天国「折れもそういった名前は、聞いた事ない。」

しばらく沈黙が続いた。

が、突然じえにいが声を上げた。

といっても、チャットの文字だけw

じえにい「わかった!!!ゴッドブレスのメンバーだ!!!」

アライヴ「ゴッドブレス？」

俺には分からなかった。

しかし他の面子は、分かったようだ。

紫苑「なるほど。」

スピードスター「だな♪」

紫陽花「それは強いよ。」

ハルヒ「へえ～あの人達が。」

皆納得といった感じだったが、そんなに強ければ、俺が知らないはず無いはずだけれど。

強い人の名前は、掲示板などで出ているはずだ。

俺が疑問に思っていると、じえにいが説明してくれた。

じえにい「ゴッドブレスはねえ～バトルグリードでゆうめいなひとたちだよお～。ドリームダストのらいばるてきなかんじのお～」

なんと！

ドリームダストのライバル的な人達？

それならメチャメチャ強いんじゃない？

それなのに要塞1つって、このゲームではライバルな感じじゃないじゃん？

色々疑問は湧いたが、考える間もなく会話は続く。

紫陽花「でも変ね？ゴッドブレスはダイユウサク軍に所属してるって聞いたんだけど。」
え？何それ？って事は、そのバトルグリードで強い人達は、こぞってダイユウサク軍に？
ある意味それだと、バトルグリード連合軍対、宇宙の絆他連合軍の戦いみたいじゃないか。

スピードスター「しかしイゼルローンの大將は、聞いた事ない名前だったぞ♪」
そうそう、だからそんなに強い敵だとは思わなかったんだ。

紫苑「ダイユウサク軍の裏の軍だったのかもな。」

じえにい「ええ～！あそこはフェアプレーのぐんだとおもっていたのにい～」
確かに、ダイユウサク軍が、勝つために他に軍を持って、工作するような軍には思えない。
その後も、工作軍だとか、実はライバルだから別の軍だとか、色々話してはみたけど、結論が出るわけ
もなかった。

話も落ち着いて、そろそろ寝ようかと思った時だった。

突然の報告だった。

イルマ軍解散。

先ほどまで、俺たちが戦っていた軍の、解散報告だった。

イルマ軍の解散報告があって直後、紫苑さん、紫陽花さん、星さんの上官3人は、仕事の為だとかでネ
ットから落ちた。

でも、イルマ軍の解散が気になった俺や、じえにい、ハルヒ君、小麗さん、暗黒天国さんは、しばら
くチャットをしていた。

ハルヒ「解散って事は、どこかに負けたわけでもないし、どうしてだろう。」

暗黒天国「なんにしても、明日はイゼルローン争奪戦が起こるな。」

じえにい「まあ～たたかえるなら、わたしはなんでもいいけどお～」

なるほど、皆が落とせずにいる有人要塞が空き家になったのだから、領土が接触している軍はもちろん
、離れたところから、強行する軍もいるかもしれない。

しかし私はそんな事よりも、もっと気になる事があった。

それは、あれだけ強いパイロットが、軍を解散して何処に行くのだろうかって事だ。

やはりダイユウサク軍の人なのだったら、ダイユウサク軍に戻るだけなのだろうけど、どうも腑に落ち
ない。

みんなはチャットを続けていたが、俺はポーっと考えていた。

奇策で勝利したとはいえ、チョコビの背後をあっさりとってきたレッドストーン。

星さんとハルヒ君を倒して、更にじえにいを追い詰めたサウズドラゴン。

やっぱり強かった紫苑さんには勝てなかったけど、おさえていたマイヒメ。

あの3機がダイユウサク軍に入ったら、今の俺たちには全く勝ち目が無さそうだ。

サイファ軍とおそらく共闘してあたる事になると思うが、それでも全然足りない。

ジーク軍と手を組む事も、検討しなければならないのか。

マクロ的な戦略戦術は俺は得意ではないし、紫苑さんにまかせるしかないけど、少し前までモチベー
ションが上昇してただけに、少しショックだ。

まだ、あの3機がダイユウサク軍に入るとは限らないし、ゴッドブレスは5人いると聞いている。

今回解散したイルマ大將は、どうやらそのメンバーでは無いらしいけど、そしたら後2人は何処に。

考えれば考えるほど眠れそうにないので、みんなが落ちた後も、俺はオンラインのまま、ディスプレ
イを眺めていた。

午前4時を過ぎた頃、俺はPCからの呼び出し音で目が覚めた。

どうやら寝オチしていたらしい。

チャット中だった画面は、みんなの「おやすみ」の文字が並んでいた。

そんなPCのディスプレイのスピーカーから、通信呼び出し音が鳴っていた。

どうやら誰かが、俺にアクセスを求めているようだ。

一生「いったい誰だよ・・・」

俺は半分寝ぼけていたのか、通信相手を確認する事もせず、通信回線を開いた。

すると相手は、予想していなかった相手からだった。

サラ「こんばんは。先ほど戦闘した、元イルマ軍のサラです。」

なんと、あのゴッドプレスのメンバー、サラさんからだった。

アライヴ「こんばんは。えっと・・・どうかしましたか？」

俺は眠い頭を必死に覚醒させつつ、文字をタイプする。

サラ「ちょっとお願いがあるんですが、大将さんに通信したんだけど繋がらなくて、それで紫苑軍の一番の高官のアライヴさんになって事なんです。」

ああ、そうか。

だいたい知らない人が、俺に通信っておかしいもんな。

大将に用があったのか。

でも、大将に用ってなんだろうか。

アライヴ「えっと、で、どういった要件ですか？」

一応言葉は柔らかく喋っているが、先ほどまで我が軍は、この人達にコテンパンにやられたのだ。

気持ちとしては、ちょっとムツとしてしまっていた。

サラ「単刀直入に言います。私と、後2人、昨日戦っていた2人ね、紫苑軍に入れてもらえないかな？」

一生「えええええ！！！」

俺は驚きで、深夜ってか早朝にも関わらず、部屋で大声を出してしまっていた。

その後しばらく話をして、通信を切る頃には、負けた悔しさもはれ、真っ暗だった窓の外の景色も、少し明るくなり始めていた。

早朝の事は、まだ夢のように感じていたが、ログを確認すると、確かに「サラ」「サウス」「おとめ」と、志願の言葉が残されている。

理由を聞くと、ゴッドブレスは、元々ドリームダストを倒す事が目標で、ライバルなのだから。

そして、ゲームでお金を稼いで、それで生活する事が目的のサークルでもあるらしい。

ゴッドブレスのうちの2人は、都合があってダイユウサク軍に所属している。

でもやはりライバルだから、残る3人は別の軍でやりたい。

ゴッドブレスとしても、ダイユウサク軍が勝てなかった時の保険も欲しい。

そこで、ダイユウサク軍以外で、優勝を狙える軍を探していたんだそうだ。

自分たちで強い軍を作る事も考えたが、このゲームの戦略面を一から勉強するには、時間が無いし、だったら強いところに入るのが一番だろうと言う事だ。

紫苑「でも、君たちがダイユウサク軍のスパイである可能性を、完全に否定できないんだけど。」
そうなんだ。

リアル友達が何人もいるダイユウサク軍に、こちらの情報をリークしない保証はどこにもない。

それにいざとなったら、やはり裏切る可能性は十分にある。

この人達が裏切る事で、報酬が貰えなくても、仲間は優勝して大金を手にするわけなのだから。

サラ「そのあたりは、信用してもらえないですね。こちらの情報は一切もらさないし、裏切りもしない。もちろん向こうの情報もこちらに入れる事はできないけど。」

さて、紫苑さんはどうするのだろうか。

この人達の強さは魅力だ。

この力があれば、ダイユウサク軍はもちろん、ジーク軍とだってかなりやれそうな気がする。

問題はスパイになりえるのか、そうでないのかだ。

俺としては、是非我が軍に入ってもらいたいと思っている。

紫苑さんは少し悩んでいるようだ。

メリットは、なんと言っても戦力が格段にあがる。

デメリットは、情報が漏れるリスクであり、裏切り。

だけど、前にドリームと戦った時の感じ、そしてこれだけの有名人だ。

裏切るなんて行為は、このひとたちにとっても凄いリスクになりそうな気がする。

ゲームで生活しようとしているのに、悪い噂があると、今後勝ちにくくなるだろうし。

紫苑「向こうの情報を提供するとか言われたら、断ろうかと思っていたけど、どうやら信用できそうだ。よろしく！(^0^)/」

俺の期待通りの結論を、紫苑さんもだしてくれた。

少しの

まは、きっと紫陽花さんと相談でもしていたのだろう。

サラ「ありがとうございます。階級に関しては何でもオッケーですが、できれば最前線を希望しますのでよろしくです。」

希望されなくても、これだけの人達を最前線で使わないなんて、もったいない。

一緒に戦うのが楽しみになってきた。

しかしその望みは、しばらくは無いと、いきなり告げられた。

紫苑「階級は、サラが大佐、おとめとサウスが少佐で、小麗の月天に乗ってもらう。そして旗艦とは別部隊を指揮し、今後頑張ってもらいたい。」

なんと、一緒に戦う事を楽しみに思った瞬間、別働隊宣言ですか。

そしていきなりこのサラさんに、隊長を任せるとな。

確かにこのサラって人は、中々やりそうな気がするし、戦えば強い。

でもいきなりすぎるこの優遇。

紫苑さんも思い切ったものだ。

まあ1日1拠点で今まではやってきていて、このまま続ければ宇宙だけで10192日はかかる計算だ。

部隊を分けて、同時攻略はそろそろ必要かもしれない。

サラ「了解。小麗って、戦闘不能機を回収していた艦長かしら？」

紫苑「そそ。」

サラ「なるほど。期待に応えますよ。」

小麗さんの力は、昨日の戦いで確認できた。

艦船運用は、おそらく紫陽花さんクラスか、もしかしたらそれ以上。

我が軍でナンバーワンかもしれない。

そんな人の艦に乗せる事から、期待がうかがえる。

今までは正直、優勝を目指してはいたが、そのイメージというかビジョンは全く見えていなかった。

3人の入隊により、優勝できる可能性が見えてきた気がした。

紫苑さんの旗艦は、言わずもがな我が軍の主力だ。

紫陽花さんの艦は、俺とチョコビがいて、かなりやれるだろうし、今後テンダネスのレベルが上がれば、もっともっと強くなる。

星さんのスピードスターは、昨日は暗黒天国さんがいなかったから力を出せなかったけれど、戦局を一変する力があるらしい。

そして小麗さんの月天に、ゴッドブレスの3人。

この艦船が、今うちで最強になっているかも。

だから単独で別働隊。

少し悔しい気持ちもあるが、別働隊なのは、まだ完全に信用していないからかもしれない。

俺はもう、既に疑う気持ちは全くなくなっていたが。

なんにしても、やる気はマックスになっていた。

一生「やる気マックスだったんだけど・・・」

俺は何故か、諜報活動で今はジーク軍の本拠地、コロニーのイスカンダルにきている。
サラさんが、一度全ての有人拠点で、諜報活動をするべきだと提言してきた。
確かに、イルマ軍に負けたのは、どんな人があるのか、どんな戦力なのか、しっかり知らなかったからだ。
敵を知り、己を知れば百戦危うからず。
自分たちの戦力はある程度理解はしているが、敵の事を全く知らなかった。
諜報活動は、ある程度は、一応やってはいた。
NPCに任せていたので、得られる情報は少なかったが。
でもそれではダメだ。
有人拠点なら、一般プレイヤなら、安全に諜報活動ができる。
民に交じって、情報屋から情報を聞くだけだから。
おそらくは、我々の拠点、シオンやカテーナにも、他の軍のプレイヤが出入りしていて、情報を集めていたりするのだろう。
要塞と、移動要塞、要塞戦艦での諜報活動は危険なので、それらでは行わないが、他を全て回る予定だ。
一生「いったいどれだけ時間がかかるのだから・・・」
俺は最初断りたかった。
しかしだ。

諜報活動で得る情報の信頼性は、キャラのレベルに比例しているらしく、キャラレベルの一番高い俺が行かざるを得なくなった。
一応相棒として、みゆきちゃんもついてきてくれる事になったのだけだね。

ちなみにみゆきちゃんは、最近まで休んでいたけど、つい先日復活した古くからのユーザーだ。

前作の宇宙の絆でも紫苑軍に所属し、そこそこ頑張っていた人。

アライブ「みゆきちゃん、あの人に聞いてみようか。」

みゆき「もしかしたら、情報屋っぽいもんねw」

街には、情報屋と言われる人が2種類存在する。

ひとつは、ノンプレ（蔵の人が操作しているNPC）で、俺たちのレベルによって情報をくれる、正規の情報屋だ。

もうひとつは、プレイヤの情報屋だ。

レベルの高いキャラは、この拠点の情報を売る事で、金儲けをしている。

中にはリアルマネーを要求する、ハイレベルな情報屋もいるが、そこまでして情報を集めるつもりはない。

敵戦力がある程度わかり、俺が納得できる程度集まれば、そこはそれでオッケーだ。

情報屋「情報が欲しいのかい？」

アライブ「はい。教えていただけますか？」

「君のレベルだと、ココのAランク情報と、軍のBランク情報が、10000ドルだが、どうする？」

十万ドルか・・・

情報内容をランクダウンすれば、おそらく半額以下になるのだろうけど、ココはジークの情報だ。

ケチってる場合じゃない。

それにこの金は、俺個人の金でもないからね。

ちなみに、十万ドルとは言うが、実際のドルの価値とは比べられない。

ただ、リアルマネーで買ったりしている人の相場を考えれば、200円程度から1000円くらいまで。

アライブ「ではお願いします。」

俺は相手に、十万ドルを渡すプロセスを行う。

俺の持ち金が、その分減った。

情報を貰う時、相手がノンプレなら、先にお金を渡すのが決まりだ。

しかしプレイヤの情報屋には、詐欺にあう場合があるので、お金と情報ファイルの交換が原則だ。

お互い信用できない場合は、交渉自体成り立たない事もある。

今回はノンプレだったので、先に全額支払う。

情報屋「では、データを送る。確認してくれ。」

俺はデータベースを開いた。

するとそこには、この拠点のAランク情報の書かれたファイルと、ジーク軍のBランク情報があつた。

アライブ「確かに。」

情報屋「では、また何かあったら、聞いてくれ。」

情報屋はそう言って、街中へと消えていった。

さて、情報の内容を見てみるか。

とりあえず、先にファイルをコピーして、みゆきちゃんと紫苑さんに送っておく。

情報ファイルは、コピーする事はいくらでも可能だ。

それを、同じ軍の者に送る事も自由。

俺はファイルを開いた。

まずはこのイスカンダルのデータからだ。

生産性は中の下だか、戦闘の無い平和なコロニーで、最近の人口増加率は高い。

キャパが決まっているから、そろそろ上昇は止まるだろうが、ジークの評判も良い。

感じとしては、我が拠点のシオンとそっくりだ。

あらゆる面で似ていた。

場所も、丁度対角にあるので、当然と言えば当然か。

本拠地ではあるが、ココに駐留する艦船は0。

アライブ「流石に、ココに艦船はいないか。」

みゆき「情報が筒抜けになるもんねえ。」

こうして諜報活動をして初めて知ったが、自分の艦船を有人の拠点に置く事にはデメリットがある事を知った。

民のいる拠点に艦船をおいていると、自分の情報が筒抜けになっていたのだ。

ただ、民の出入りを規制したり、民との信頼関係を高くする事で、情報が漏れないようにする事は可能で、紫苑さんはおそらくそうしていたのだろう。

出入りを規制すると、生産性は半減するけれど。

情報を守る事を優先するか、生産性を優先するかって事だ。
今ではシオンに駐留する艦船は0なので、出入りは自由にしていると思われる。

それに民との信頼関係も高いし。

さてこのファイル。

残る情報は、一度でもこのコロニーに出入りした艦船データだった。

「2時間前、ジーク、バルバロッサ、詳細情報無し。」

2時間前に、ジークがココに来たようだ。

詳細な情報が無いって事は、短時間だけの滞在、すなわち、設定変更だとか、研究の支持だとか、用があっただけって事だろう。

滞在する時間が長くなれば、その分情報量は多くなるようだから。

後は、民との信頼関係も関係する。

戦闘の無い平和な場所の民は、みんなジークの味方であるから、なかなか情報は出てこないって事だ。

他の情報は、見ない名前が何人かいたが、細かいデータは無く、特に思うところはなかった。

情報の最後の方には、四天王の群青さんの名前もあったが、データは3カ月ほど前の物だった。

意外にも、その頃の詳細なデータが書かれていた。

流石に、レベルも高いし、撃墜数も多い。

今の俺よりも少ないが、これは3カ月前のデータだ。

3カ月前の俺と比べてどうだろうか。

ふと気がついた。

群青さんも、今は俺のライバルなのだなあ〜と。

では次に軍のデータだ。

こっちの方が興味ある。

軍のBランクデータとなると、かなり詳細に書かれている。

俺のレベルが高いから得られる情報だ。

さて、どんなものか・・・

俺は愕然とした。

みゆき「ジーク軍、凄い数だねえ〜」

アライヴ「ああ。」

そうなのだ。

俺たちが必死になって、ようやく40人弱のプレイヤーを集めたのに、ジーク軍はすでに200人を超えていた。

しかも、この情報はBランクで、完璧ではない。

おそらく予想するに、300人はいるだろう。

アクティブでないプレイヤーも多そうだけど、やはり最大の敵はジークか。

そう思った。

間

休息

諜報活動も終盤にきていた。

宇宙は全て終わり、今は地球にきている。

民間機で、1つずつ移動して調べていくわけだけど、地球上は生産性が高いから、勢力が混在していて、民間機で入国できる街は少なかった。

アライヴ「次は、アクアか。」

みゆき「ココは海底都市だね。」

みゆきちゃんに言われて、こんな街もあるのかと、初めて知った。

どうやら基地も街も海底にあるらしい。

これは行くのが楽しみだ。

しかし、それはすぐにできないと分かる。

みゆき「アクア行きの便がないね。」

どうやら、入国規制が行われているようだ。

この街は特殊だから、どうしても行ってみたかったが、規制されていては、入るのは難しい。

入国したければ、多少の危険を覚悟して潜入する事も可能だが、ココは海底、多少ではすまされず、むしろ俺のレベルでさえ、成功確率0%だった。

アライヴ「残念。どんな場所か見てみたかったけど。」

みゆき「うん。」

それにしても、アクアを落とすにはどうすれば良いのだろうか。

当然の疑問がわいた。

アライヴ「それにしてもココって、どうやって落とすんだらうね。」

みゆきちゃんが知ってるとは思えないけれど、なんとなく聞いてみた。

みゆき「ココは水中戦オンリーだって聞いた事あるよ。他にも8割水中だとかって都市も、あるらしいし。」

なんと！水中戦かあ～

アライヴ「って事は、水中用人型とか、あるのかな？」

みゆき「あるらしいよ。パーツは地球でしか売っていないみたいよ。」

なるほど。

どおりで知らなかったわけだ。

俺は宇宙でしか買い物をしていないし、そもそも地球に来たのは初めてだ。

コレは早めに地球への侵攻も考えた方が良いかもしれない。

地球を1つの勢力が占めたら、地球への侵攻がかなり厳しくなる事もあり得る、そう思った。

さて、仕方が無いので、次の街へと行くことにする。

マップは実在する世界地図に似ているが、名前はユーザーが決めているので、それがなんだか面白い。

日本はそれ自体で1つのマップで、拠点の名前が「大阪」。

おそらく大阪人が、最初にココをゲットしたと思われる。

地球マップでNo1の生産性を誇る拠点に、大阪ってどうかと思うけど、まあ仕方なし。

とりあえず俺たちは、大阪行きの便に搭乗した。

リアル時間で、10分ほどで目的地についた。

なんとなくだけど、地球に侵攻する時は、最初にココが欲しいなあ～なんて思った。

俺たちは街を歩いた。

情報屋探した。

流石に生産性No1の街だ。

マップも広くて人も多い。

水中戦用アイテムを買って帰りたいとも思ったが、アイテムは中立の拠点と、自軍の拠点以外では買えない。

なんせ持って帰れないからね。

ただ、ゲームに関係ない装飾品、キャラの服だとか、アクセだとか、そう言ったものは、街によって発売されている物が違ったりするし、持って帰れる。

せっかくだし、そちらでも買ってかえろうか。

そう思って、みゆきちゃんに声をかけた。

アライヴ「せっかくこんなでかい街にきたんだから、何か買って帰ろうか。ホントはパーツとか、水中戦闘に役立つ物が欲しいけど、無理だからアクセとか服とか。」

みゆき「そうだねえ～地球産の服、みんなに見せて自慢するかあ～」

アライヴ「よし！ではあのオレンジの看板の店から行こう。」

みゆき「おけw」

そんな会話を交わしてから、俺たちは店に歩いて行った。

そんな時、友軍の美夏さんが、突然会話に入ってきた。

美夏「やっほー！水中戦用パーツが欲しいのか？」

街での会話には、数種類の設定が可能だ。

1対1、グループ、友軍、一般だ。

1対1は、文字通り、1対1で会話して、そこに他の人が入ってくる余地はない。

グループは、あらかじめ決めた人だけで会話する設定。

友軍は、同じ軍なら同じ街にいれば会話できる。

一般は、街の中で見えている人全てとの会話である。

だから今も、一般で話している人の会話は、こちらに入ってきていて、みゆきちゃんとは、友軍で話をしていた。

そこに偶々友軍の美夏さんがいたから、会話に入ってきたってわけだ。

アライヴ「こんにちは。どうしてこんなところに、って、パーツ欲しいのですが。」

驚きと、疑問と、希望を全部、打ち込んだ。

美夏「みゆきちゃんもちわ！」

みゆき「こんにちは。」

美夏「ちょっと暇だったから、地球旅行に来てただけだよ。って、お前らはどうしてココに？」

美夏さんは最近忙しかったのか、あまりゲームしていなかったようで、話を聞いていなかったようだ。

アライヴ「今、俺とみゆきちゃん、情報集めしてるんですよ。で、今はココにきてるわけです。」

美夏「なるほど。で、さっきパーツが欲しいとか言ってたよね。」

アライヴ「ええ。地球専用のアイテムがあると聞いたから、今から試しておきたくて。それに地球を攻める時に、有った方が良さそうだし。」

美夏さんが、なんとなく手に入れる方法を知ってそうだったので、俺は期待した。

美夏「既存のアイテムと、ジャンク屋経由だと、地球専用パーツは地球で、宇宙専用パーツは、宇宙でしか手に入れられないよな。」

アライヴ「ええ。」

美夏「宇宙には中立要塞が8か所あって、宇宙用パーツは誰でも手に入れられるけど、地球用のパーツは、地球に軍を持っている人しか手に入れられない。」

アライヴ「ですね。」

美夏「だけど、軍を解散した時などに、一時的に中立になったりした場所では皆買えるし、元々地球にいた軍に所属していた奴なら、パーツを持っているわけだ。」

ココまで聞いて、なるほどと思った。

地球にある軍に所属している人が、宇宙にある軍所属の人にパーツを売る事は少ないだろう。

何故ならそれは敵に塩を送る行為だから。

しかし既に軍に所属していない人なら、売る事もあり得るし、一時的に中立になった時に買い占めて、売って儲けようって考える人がいるって事か。

美夏「更に、パーツを売る事を目的に、軍を持っている奴らもいるんだ。」

アライヴ「そんな人もいるんだあ！」

少し驚きだ。

ゲームとは関係なく、金儲けを目的として参加している人がいる事は知っているけど、まさかそこまですべてやっているとはねえ～

美夏「受け渡しは、宇宙の中立拠点のどこかだな。」

なるほどねえ～

ココまで艦船で来る事はできない。

何故なら非戦闘タイムとは言え、ココは敵の拠点だから。

今俺たちは、民間機で一般人として移動している。

でも、自分の拠点以外で、自分の艦船を移動、入港させる事ができる場所がある。

それが中立要塞8つだ。

それは地球の周りにあり、非戦闘タイムなら、敵空域も自由に航行できる。

もちろん、敵要塞には入れはしないけれど。

とにかく、地球には、地球戦用パーツを持っている人が多くいて、その人達から購入できるよう直接中立要塞で取引するって事だ。

美夏「地球用パーツを売ってる軍から買うと、リアルマネーでかなりぼられるから、なるべくもういらないって人から買うのがベストだな。」

アライヴ「リアルマネーってどれくらい？」

リアルマネーでも、俺もそこそこ稼がせて貰っているから、多少なら出しても良い。

美夏「そうだな。安くて人型1機で10万円くらいだな。」

・・・

アライヴ「それは高すぎ。笑」

まあそういうわけで、俺は諦める事にした。

水中戦かあ～

キュベレイでもなんとかかなると信じよう。

その後俺たちは、3人で買い物をして、ついでに情報収集もした。

違った。

ついでは買い物ね。

戦闘の日々へ

さて、今日で諜報活動は最後となった。

最後に来たのは、地球のマップ、1-1にある、氷島。

金でパーツを売る軍、トルネコ軍の本拠地だ。

ここでの情報収集は既に行っている。

流石に金持ち軍、人も多く、装備などのクオリティも高い。

ここしか拠点は持っていないが、そう簡単に落とせるような戦力ではなかった。

噂だが、ジークがかなり出資しているとか、アイテムを買いあさっているとか、そんな話も先ほど聞いた。

それだけでなく、他にも買いに来る人はいるのだろう。

俺も、もう少し安ければ、買っていたかもしれない。

しかし、そこまでリアルマネーをつぎ込んで勝っても、あまり嬉しくない、そう言い聞かせて諦めていた。

アライヴ「さて、そろそろ帰るか。」

みゆき「やっと終わったねえ～長かったねえ～」

確かに長かった。

諜報活動は、俺とみゆきちゃんの都合があう、全ての時間行ってきた。

それで約3カ月もかかってしまったのだ。

だから俺自身、戦闘はあまり行っていない。

テンダネスの裏バージョンで、違和感なく動かせるレベルになった事以外は、特に何もなかった。

ただ、紫苑軍としては、イゼルローンを手にして、その後も順調に勢力をのばしていた。

ちなみに、イゼルローンは、最初攻め込まなかった。

予想通り、いくつかの勢力が侵攻して、つぶしあっていたから。

そして全てが疲弊したところを、軽く奪ったようだ。

内情をよく知るサラさんにも協力してもらって、すぐに鉄壁の要塞への設定をした。

今ではこのイゼルローンが、最前線基地だ。

俺とみゆきちゃんは、スペースポートへと向かって歩き出した。

コレがリアルなら、ちょっとしたデートをした3カ月だったのだろう。

ゲーム内とはいえ、結構長く一緒にいたせいか、みゆきちゃんなら実際リアル世界で会っても、話とか普通にできそうだ。

歳は確か18歳だったと記憶している。

いつか会えたらいいなあ～なんて、心の中で考えていた。

そんな事を考えながら歩いていたら、突然、一般チャットで話しかけてきた人がいた。

「あっ！アライヴさん。お久しぶり～」

街中にいる人と、誰とでも話せるシステム。

俺を名指しはしていたが、誰もがその喋りを受信している。

相手は、ドリームダストのドリームさんと一目でわかった。

なんせ取り巻きがぞろぞろいて、「夢さん誰ですか？」「夢さんのお友達ですか？」なんて言葉が、俺のチャットログを一気に増やしたから。

ドリーム「みんなごめん。ちょっと彼と話したいから...」

ドリームさんが取り巻きにそう言うと、皆快く席をはずしていた。

ドリームファンの人たちは、きっと本当にドリームの夢さんのファンなのだろう。

そう思った。

取り巻きがいなくなると、すぐにドリームから、グループチャット登録の要求がきた。

これに応じれば、グループチャットを了承し、グループチャットができるようになる。

俺は迷う事なく、応じた。

ドリーム「そちらのみゆきさんも、お仲間さんだよな？」

アライヴ「あっ、うん。そうですよ。」

俺が返事をするやいなや、みゆきちゃんもグループチャットのグループに登録されていた。相変わらず操作が早いな、そう思った。

アライヴ「こちらは、同じシオン軍所属の、癒し系担当のみゆきちゃんですw」

俺はすぐに、ドリームさんに対して、みゆきちゃんを紹介した。

まあ、みゆきちゃんは、ドリームの名前くらいは知っているのだから、紹介はいらないだろう。なんせ相手は有名人だからね。

みゆき「はじめまして。みゆきです。よろしくです。」

問題はなさそうだ。

ドリーム「ダイユウサク軍のドリームです。みゆきさんは、アライヴさんの彼女ですか？仲良さそうに歩いてたから、デートかとw」

ドリームからの返事は早く、普通に喋る速度と全くかわらない。

って、そうじゃなくて、今なんかドリームさん、とんでもな事を言ったような。

じっくりチャットの文字をもう一度読んでみると、みゆきちゃんが返事を返していた。

みゆき「ええ、そうなんです♪（笑）」

えええ！！！！

俺は普通に驚いたが、まあ最後の（笑）が、冗談だと表現していたので、ココはスルーする事にした。

アライヴ「ところでドリームさんは、こんなところでどうしたんですか？」

ドリーム「あ、夢で良いよ。それに、前はもっと普通に話してたのに、今日は敬語になってるよ。」

あっ！ホントだ。

人型に乗ってる時は、俺も結構強気だから、タメ口で喋っていたように思うけど、実際会うと、なんか気後れするっていうか、オーラがあるって言うか。

いや、実際年上だろうし、実際に会ってるわけでもないんだけど。

アライヴ「ホントだwじゃあ夢さんで。」

ドリーム「みゆきさんも、夢ちゃんって呼んでねw」

みゆき「あっ！はい。」

夢さんは、結構気さくな人のようだ。

ドリーム「で、この街にいる理由なんて、きっとアライヴさん達と同じだと思うよ。」

なるほど。

ダイユウサク軍も、しっかりと諜報活動してるって事か。

アライヴ「諜報活動かあ。」

ドリーム「えっ？違うよ？あれ？あってるのかな？地球用パーツの情報収集だけど？」

アライヴ「え？パーツの情報？俺たちは普通に諜報活動だけど。」

パーツの情報収集？

パーツは買う事もできないし、買えないからその情報も収集はできない。

だから実際にどんなパーツがあるのか、俺は全く知らない。

どうやって・・・

みゆき「地球用パーツって、見る事できないよね。どうやってみるんだらう。」

俺の疑問をみゆきちゃんが代弁してくれた。

ドリーム「そっか。まあ見る方法ってわけじゃないけど、ココはパーツ屋やってるトルネコ軍の拠点だから、それで来てるのかと。」

もしかして、夢さんは、パーツを買いに来た？

でもパーツの受け渡しは、宇宙に上がって、そこでの取引になるから・・・

アライヴ「パーツを買いに来たと言って、アイテムの情報だけ画像データで見せてもらっていた？」
ドリーム「当たり～」

このゲームを行うにあたり、あらゆる場面、あらゆる状態を、画像データで保存することができる。規定により、このサイト外でそれをアップする事は禁止されているが、ゲーム内で見せてはいけない規定はない。

まあアイテムを売ろうとしてるのに、カタログの役割を果たす物をもっているのも当然か。
しかしだ。

パーツデータを見せてもらったところで、多少何かしらの対応ができる事はあるかもしれないが、手に入れられないのでは、あまり意味が無いように思えた。

アライヴ「でもやっぱり、情報だけだとあまりメリットはなさそうだけど。」

この夢さんが、そんな理由だけで情報を集めているとは思えなかったので、少し疑問を言ってみた。

ドリーム「情報があれば、それと同じ物を研究で生産できるようにする事は簡単だって事だよ。」
ああ、なるほど。

研究は、基本アイデアを出して、色々試行錯誤してひとつのパーツを作り上げる。

しかしもし、最初から既存のパーツの情報を得ていれば、それをそのままコピーするだけで済むって事か。

設計図を手に入れて、後はそのとおりに組み立てるだけ、感覚としてはそんな感じだ。

流石というか、こうして色々な人と話をしたりしていると、みんな俺の知らない事を知っていて、勉強になるな。

たかがゲームだけど、大きな賞金の動くマネーゲームだ。

もっと勉強する必要があるなと思った。

それでも、軍に関しては、紫苑さんに任せておけば、おそらく大丈夫だろうけど。

それからもしばらく話していたが、みゆきちゃんに促され、俺たちは別れた。

さて、諜報活動も終わった。

今晚からは、また戦闘一筋だ。

俺のモチベーションは上昇しまくりだった。

地球戦に向けて

諜報活動が終わった日の夕方6時、紫苑さんが仕事から戻ってオンラインしてきたので、最後の報告を行っていた。

偶然だけど、今日は主要メンバーがほぼ勢ぞろいだった。

アライヴ「ってわけで、地球への侵攻は早いうちが良いと思うし、アイテムを手に入れる事も考えた方が良くないか。」

紫苑「それは俺も考えてた。」

やはり、紫苑さんは既に考えていたようだ。

でももしかしたら、どうやって地球用パーツを手に入れるか、解決策が無かったのかもしれない。

アライヴ「それですね。地球の氷島で、ダイユウサク軍のドリームに会ったんだけど、良い方法を教えてもらいました。」

紫苑「ほうほう、それで。」

アライヴ「トルネコ軍にアイテム購入を持ちかけて、画像データでアイテムの情報を得て、研究して生産すると自分で作れるようになるって。」

紫苑「おお〜」

サラ「流石に、夢ちゃん、考えてるわね〜って、まあ考えたのは、別の人だろうけど。」
どうやらこれは、皆思いつかなかったようで、関心していた。

アライヴ「じゃあもう一度、氷島に行って、情報をゲットしてきますか？」
せっかく戻ってきたのに、又行くのはあまり乗り気ではなかったけれど、そうするならもう一度行くのもやぶさかではない。

サラ「でも、私たちに売ろうと思ってくれる保証もないし、方法はそれだけじゃないわね。」

アライヴ「えっ？」

なんと。

他にもまだ、地球用パーツを手に入れる方法があるって？

買うとか言うんじゃないだろうな。

サラ「売ってもらう方が早いわね。」

やはり。

でも高すぎるんだよね。

アライヴ「でも、相場聞いたけど、リアルマネーでバカ高いよ。」

サラ「まあ、商売してる人から普通に買ったら高いけど、方法はあるわよ。」

なんとまあ。

流石にゴッドブレスの人だ。

この人もダイユウサク軍のメンバー同様、普通ではないって事か。

サラ「ゲームに参加していない人に頼めば、少しの利益でも応じてくれるだろうし。」

ほうほう。

これは大阪で美夏さんと話した時にでた方法で、具体的にどうすればいいのか分からない方法だ。

紫苑「ただそれだと、先に現金を渡す必要があるから危険ですな。」

サラ「そうね。もしくは別アカウントで、地球に拠点を持つ軍に所属して買う方法もあるよね。」

紫苑「・・・」

紫陽花「・・・」

スピードスター「・・・」

3人そろって・・・だ。

古くからの仲間は知っている。

この3人の別アカウントは、サイファ軍に所属したままだと。

それにそもそも、別アカウントは取れない事になっている。

同じPCでは、複数の人が登録できないようになっているし。

紫苑さんたちは、親の名前やPCを使っているのだ。

流石にこれ以上は無理だし、他に誰かできる人が声をあげれば、その手を使う事になるのだが。

しかし誰も声を上げなかった。

サラ「後は・・・」

紫苑「ゲームに参加していない、リアル友達に頼むか・・・」

流石紫苑さん。

それが一番安心できるな。

しかしよく考えたら、俺には友達いないし、紫苑さんのリアル友達は、同じ軍に結構所属している。

他に、ゲームに参加していない友達がいるだろうか。

みんなが少し沈黙した後、再び声をあげたのは、紫苑さんだった。

紫苑「まあ、ごさかしい事はやめて、真っ向からゲームした方がいいかな。」

おお、紫苑さんは、今のままの人型や艦船で、地球を攻略しようというのか。

それもまた、俺は望むところだ。

美夏「真っ向勝負で勝てるのか？」

一応、皆が疑問に思う事を、美夏さんが代弁した。

紫苑「誰も真っ向勝負とは言ってない。ゲームとして正当な方法でゲットしようって事だよ。」

どういう事だろうか。

サラ「そっか。同盟ね。」

ああ、一番簡単に手に入れられる方法が、これじゃないか。

中立と自軍領だけじゃなかった。

艦船が入港できるのは。

まあそれで購入できるなんて、そんな事は試してみないとわからないし、俺が思いつくはずもないのだけど。

紫苑「よし、どこかと同盟し、地球用パーツを手に入れる事が、次の作戦だ。」

あらあら、せっかく戦えると思っていたのに、又地味な作業か、俺は少しがっかりした。

しかしその気持ちは、すぐに再び上昇する。

紫陽花「同盟するとなると、相手に美味しい話しもないと難しいよね。」

美夏「そうだな。地球にいる奴らは、地球にいる有利さを知っているし、そのメリットをやすやすと手放すとも思えない。」

確かに。

俺が地球に拠点を持っていたら、宇宙からの敵はさほど怖くはないだろう。

地球用パーツが、リアルマネーで高値で取引されるのも、それだけ価値のあるものだからだ。

サラ「しばらく、同盟軍の為に戦ってあげたりして、領土拡大に協力してあげるとかすれば？」

紫苑「まあおそらく、リアルマネーで釣る以外は、それくらいだろう。」

サラ「早速、諜報活動で得た情報が役にたつわね。」

紫苑「うむwアライブ、データから、助っ人の欲しそうな所、もしくはこれから大攻勢に出ようとしているところを探してくれ。」

アライブ「おけw」

こうして俺たち紫苑軍は、地球所属軍と同盟し、地球での戦闘へと突入していくのだった。

つか、データを見ただけで、俺がそんな事分かるわけがないよ。

初めての地上戦

同盟相手探しは難航した。

地球の軍としては、宇宙の有力勢力との同盟はやぶさかではない。

しかし、自軍領に入れて、地球用パーツを買いあさられるのは、後にデメリットとなる可能性もある。相当信用できないと、なかなか同盟なぞできない。

同盟には、期間や条件で設定できるが、たとえば3カ月同盟して、その間にアイテムを買いあさられ、その後敵になるとも限らない。

だから、条件が絶対有利でないとなかなか同盟できないわけだ。

メリットを考えた時、有力勢力との同盟は魅力だけど、デメリットも同じなのだ。

だから同盟は、地球に領土を持つ軍は、同じく地球に領土を持つ軍とするか、或いは、地球用パーツを手に入れる術を、既にもっている軍とする事が暗黙の了解になっていた。

そんな中、あっさり地球に領土を持つ軍と同盟できたのは、やはりこの人の力だった。

サイファ「では、我々でこのゲーム勝ちましょう。」

グリード「これだけの面子が集まれば、今度こそはやれそうだな。」

紫苑「ですな。(^^)」

サイファさんとグリードさんは、前作から強い信頼関係を持ち、共に戦ってきた間柄だ。

最後には、グリードさんは負けて、その後サイファ軍に所属し、ある意味上官と部下の関係であった事もある。

リアル年齢的には、グリードさんの方がかなり年上らしいが。

それでもこのゲームの最初、グリードさんはサイファ軍に所属する事を望んでいたようだ。

しかしサイファさんが断って、別の軍の方が今回の場合良いかもしれないと、地球でのプレイを提言していたようだ。

結果、それが今正しかった事を証明されたわけだ。

ちなみに、紫苑さんも、グリードさんとは面識がある。

前作の打ち上げで、少しだけ言葉を交わした程度だけれど。

前作では、グリード軍との同盟を断っていたのに、今回了承してもらえたのは、面識があった事が大きい。

そして、今回協力関係を一番安易にしたのが、今回のゲームの賞金が、勝った軍だけに配布されるわけではないって事だ。

この3軍が最後まで残っていたら、おそらくその後負けても、それなりのお金が貰える事が予想できたから。

サイファ「同盟期間はとりあえず3カ月、その後も最後まで敵対しない事。そして3カ月はグリード軍が地球で勢力を伸ばす手伝いをする事。って事で良いですね。」

紫苑「(^^)」

グリード「現在拠点が3だから、目標としては、10はよろしく。」

拠点数10となると、現在の3倍以上だ。

しかし、この面子なら、10なんておそらく1週間で可能だろう。

俺としては、目標100だ。

100でも地球の拠点の総数からすれば、1/30だ。

全くもって足りないくらいだ。

宇宙は、その更に3倍以上あるんだけどね。

さて、同盟した瞬間から、俺たちは忙しかった。

まずはしばらく主力が本拠地を開ける事になる。

レイズナー大佐だけでは、かなり不安だ。

光合成さんと一緒に、今までも近隣の弱小勢力と小競り合いを繰り返し、とりあえず勝ってきてはいるが、これからは最前線もカバーしてもらわなければならない。

誰かを残せばとも思ったが、紫苑さんはこの3カ月を、勝負の分かれ目になるかもしれない3カ月、なんて言っていた。

だからまあ、壁さんとてけと一さんふたりに、スクランブルを要請したようだ。

そして、もうひとり・・・あの人も・・・。

まあそんなわけで、主力は皆、グリードさんの拠点、「ジャングル」に来ていた。

戦闘時間までに、戦闘準備を整えなければならない。

そして時間になれば、ココから他の拠点に攻め込む事になる。

あえてココからと言ったのは、宇宙から降下して拠点攻略するわけではないって事。

グリードさんの話しによると、宇宙から降下して拠点を攻めるのは、かなり難しいらしい事が分かった。

降下中、しばらくはただの的になりえるし、人型での大気圏突入は更に危険だって事。

大気圏用機も、地球では存在するし、それを手に入れていけばその場はしのげるだろうが、降下してからは能力の持ち腐れだ。

これがまあ、地球に拠点を持つ有利な部分で、その有利さは半端ではない事を改めて理解した。

時間になると、俺たち紫苑軍はもちろん、グリード軍、そしてサイファ軍が隣国に行軍を始めた。

グリード「みんなありがとう。これだけの面子がそろって負ける事はまずありえないから、危ない場合は無理せずいこう！」

グリードさんは、もちろんこの3カ月は総大将だ。

実力からすれば、紫苑さんやサイファさんの方が上だろうが、地球に関しては一日の長がある。

俺だって、地球用の人型で、陸戦するのは初めてだ。

今日から始まる地上戦。

ウィングをつけて戦えば、宇宙とあまり変わらない感覚で戦えるらしいが、飛行と宇宙空間では、大きく違う部分がある。

それは、推進力が必要だから、飛び続けなければならない事。

宇宙空間なら、突然の方向転換も比較的簡単だけど、飛行だとそうはいかない。

ウィングをつけずに、強力な火力で飛行する場合は、尚宇宙空間と変わらず戦闘できるが、燃料が多く必要で、戦闘時間が短くなったり、やはり上下関係や重力を意識しなければならず、同じようには戦えない。

ただ、やはり似ている部分もあるし、せっかくだから、この3カ月は地球特有の戦い方をマスターしようと思っていた。

俺は、テンダネスを地球戦闘用にカスタマイズした機体で出る。

武器はフェネルと、ビームライフル、ビームソード、ビームバルカンと、全てビーム系。

フェネルには小さな羽がついて、地球用に改良されている。

停止しての維持、攻撃が不可能で、これは今後研究改良が必要だと思った。

紫苑「まず、星が中央突破、攪乱してくれ。」

スピードスター「♪」

紫苑「そこを紫陽花と小麗で攻撃、俺とじえにいとハルヒでサポートする。」

紫陽花「了解w」

少し疑問に思った。

何故か紫苑さんが指揮して、俺たちだけで攻撃するのか。

アライヴ「あれ？サイファさんとこ、今日子さんも出ないの？」

紫苑「まずは俺たちだけでやらせてもらう。この3カ月は、損失を出してでも、得なければならないものがあるからね。」

まあそういう事だよ。

地球での戦闘になれる事と、地球用パーツを得る事。

この2つの為に、あえて貧乏くじを引く事は必要なだろう。

アライヴ「なるほど。では行きますか。」

紫苑「(^0^)/go!」

俺たちは最前線で戦闘を開始した。

まずは星さんが、艦船スピードスターに暗黒天国の人型ボスに乗っけて、高速移動しつつ、大火力の攻撃をあげせながら敵を突っ切る。

星さんの艦船は、地球仕様にしてもやはり高速移動型だ。

武器に火力はなく、重視するのは移動だけ。

そこにもってこいなのが、暗黒天国のボスってわけだ。

これで超高速移動できて、破壊力のある戦艦の出来上がりだ。

この作戦は、我々紫苑軍の定番の戦い方になっていた。

敵は回避するので手いっぱいだ。

ただ、宇宙と違って上下が有るし、障害物も多く、宇宙戦ほどの効果は得られなかった。

サラ「では行くわよ～」

おとめ「重力あっても、バトルグリードでなれてるし、私たちはむしろこっちの方が得意よ♪」

サウス「俺はもう宇宙の方が地形効果得られるけどな。」

小麗の艦船、月天から、それぞれレッドストーン、マイヒメ、サウドラゴンが出撃した。

アライヴ「ではこっちもいくぞ！」

チョビ「わかった～」

みゆき「は～いv」

紫陽花さんの艦船、パープルフラワーから、俺たち3機も出撃した。

出撃した途端、機体は重力をうけて、落下を始める。

ブーストしながら、敵の砲撃を回避しつつ、良さそうな着地点を探った。

チョビは盾で攻撃を回避しつつ、拡散ビーム砲で敵を退ける。

みゆきちゃんは、チョビに守られながら、安全に着地できそう。

俺はなんとか攻撃を受ける事なく、地面へと到達した。

これがもし宇宙からの大気圏突入だったら、もっと長い時間敵の攻撃にさらされ、更には動きも自由がきかないかと思うと、かなりきつい事は十二分に理解できた。

ともかく3機とも安全に着地ができた。

ちなみにNPCキャラは、艦船上で守備についている。

俺たちが陸戦を求めても、空で艦船を狙う機体はやはりいるのだから。

まあ艦船は紫陽花さんと小麗さんだし、なんとかなるとは思うけど。

紫苑さんたちもサポートしてるわけだし。

紫苑「敵はどうやら、これだけの侵攻を予想できていなかったみたいだ。NPCがほとんどで、プレイヤーは3人確認。」

紫苑さんは既に索敵を完了したようで、情報が皆に伝えられる。

紫苑「プレイヤーは拠点に2機、1機は突っ込んでくるぞ。」

紫陽花「ではそれぞれ1機担当ねw」

サラ「楽勝できそうね。」

確かに数では楽勝だったはずだった。

しかし・・・

サラさん達は言葉どおりの楽勝で、敵本拠地を制圧しようと侵攻している。

しかし他は、初の地上戦に苦戦していた。

紫苑さんのところのじえには、バトルグリードでも好成績を残しているプレイヤーだから、本気でやれ

ば楽勝だったかもしれないが、どうやら紫苑さんの指示でハルヒくんの援護に回っている。
美夏さんは、今日はこっそりスピードスターに搭乗しており、今頃は拠点の向こう側で息をひそめているはずだ。

敵が全てこちらに来た場合、背後をつくか、抜け殻の拠点を軽くいただく寸法だ。

そして俺たちは・・・皆地上戦は素人。

俺もようやく宇宙で乗りこなせるようになったテンダネスだし、みゆきちゃんは戦闘自体が最近は少ない。

後はチョビだけど、宇宙でも地球でも変わらない戦い方だけど、どちらかと言うと、攻めには向いていない。

プレイヤーひとりと、10機ほどのNPCとこう着状態だった。

出し惜しみできる状態ではないので、俺はフェネルを使った。

拡散ビーム砲の餌食にならないように、かなりチョビから離れてから使った。

チョビの背中も、今はみゆきちゃんに任せてある。

おそらく背後をとられる事はないだろうけど、油断は禁物だ。

フェネルは、宇宙よりも自由がきかず、発射タイミングがかぎられている。

移動ルートも特定されるようで、数機がすぐに落とされた。

一生「地上でフェネルつかえねえ～」

空中での静止と、移動方向に自在性が無い状態では、フェネルはきつい事が改めて感じられた。

一生「しかし！」

しかし、一応けん制にはなるので、こちらの攻撃も、今までよりも当たるようになってきた。

まあ基本は同じだって事だ。

フェネルを警戒しているなら、フェネル攻撃の回避に合わせて攻撃するし、逆なら自分がけん制を入れてフェネルで当てる。

ただ、チョビと協力して戦う事は、フェネルありきじゃ無理そうだった。

敵プレイヤーとの戦いは、最初から最後まで、結局ずっと苦戦してしまった。

フェネルも全て落とされ、逃げ回った先にチョビがいて、チョビの拡散ビームに助けられ、かろうじてみゆきちゃんがとどめをさした。

時計の針も23時になろうとしていて、チョビの参加できる時間も終わろうとしていた。

拠点はあっさり和美夏さんが落として、初めての地上戦が終わった。

アイドル中山西子

地上戦を始めてから、既に1週間が経っていた。

紫苑軍の、地上戦素人の面々も、だいぶ戦い方をつかみ始めていた。

そんなある戦闘1時間前、グリード軍本拠地のジャングルには、オンしているメンバーが集まっていた。

別に集まる事はそれほど珍しくはないが、今日は珍しい仲間がオンしており、それがきっかけで集まっていた。

サイファ「カニさん、仕事忙しそうですね。」

キャンサー「うん、でもせっかく盛り上がってるし、ちょっとでも参加したくてえ〜w」

真でれら「それにしても、喋り方変わりすぎ〜」

キャンサーさん。

通称カニさん。

カニさんは前作で、サイファ軍所属の主要メンバーのひとりだ。

打ち上げにも参加していて、その時に分かったらしいのだけれど、結構有名な女優だったのだ。

名前を「

なかやまにしこ通称「しゃこたん」と呼ばれている。

前作の頃は今ほどは売れてはいなかったの、ゲームにも結構参加していたようだけど、今では超売れっ子で、アイドル業、歌手、タレントと、忙しくてゲーム参加どころでは無くなっていった。

しゃこたんが宇宙の絆をやっていた事は、ファンの間では有名だけど、それがどのキャラクターなのか、知る人は少ない。

ゲーム終盤までプレイしていた事は、しゃこたんブログに書いており、ジーク軍、紫苑軍、サイファ軍、ダイユウサク軍、グリード軍あたりに所属していた事は予想されている。

そして俺も今日まで、しゃこたんがサイファ軍にいた事は知らなかった。

キャンサー「うむ。俺おかしいか？（笑）」

L O V Eキラ「ははは、カニさんだ。」

カニさんは、どうやらばれないように、前回では男喋りしていたらしい。

ネカマもいれば、その逆もあるって事すな。

アライヴ「それにしてもあのしゃこたんがサイファ軍にいたなんて。そして話せるなんて嬉しいです。」

俺はちょっと浮かれてしまっていた。

紫苑「ハンドルハンドル」

アライヴ「あっ！すみません。」

ゲーム内では、個人を特定できるような事は言わないのがマナーだ。

俺は浮かれてつい、しゃこたんと言ってしまった。

キャンサー「大丈夫だよw特に隠してるわけでもないから。」

サイファ「えっ？マジっすか。でも騒ぎになるかも…」

そのとおりだ。

あの、今や超アイドルのしゃこたん、それがココにいるなんて知ったら、みんなが集まってきかねない。

と、思った直後、チャットに大量の反応があった。

グリード軍のメンバーが、一気にキヤット通信に入ってきた。

俺の一言でチャット画面は一気に流れ、俺が話に参加する余地が無くなってしまった。

カニさんへの確認や質問が大量だ。

同盟軍入り乱れてのチャットだったので、友軍チャットで行っていたから、ほとんど全員集合だ。

結局戦闘開始10分前まで、カニさんはたくさんの人達といっべんにチャットしていた。

涼しい顔で。

って、見えないけれど。

流石、オタクアイドルとも言われているのは、伊達では無いって事か。

さて、戦闘が始まったが、そこから更に大変だった。

カニさんも今日は戦うとかで、人型で出撃。

それをとりまくように、たくさんの人型が、人型キャンサーの周りを固めていた。

キャンサーさんには、1発たりとも攻撃を当てさせるとのが合言葉のようで、身を挺して守っているようだった。

正に親衛隊のようだ。

敵からすればその行動に疑問を持つのは当然で、逆に敵を集めていた。

今日の戦いは、なんだが満員電車の中で戦うような、そんな感じだった。

敵のほとんどは、カニさんと親衛隊に任せて、俺たちは軽々と本拠地を落とした。

こんなに簡単で良いのか？なんて思っていたけど、親衛隊の多くが所属しているグリード軍の損害は、過去最高だった。

それでも親衛隊の人達は、皆満足そうだった。

損害も多かったが、楽しく勝利できたのだから、それで良いのだと思った。

23時過ぎ、カニさんは戦場から消えていった。

なんだか嵐が過ぎ去った後のような状況が残された。

中山西子

完成！テンダネス

地上戦を始めて1カ月が過ぎた頃には、グリード軍の目標拠点数10は当然として、拠点は20まで増えていた。

俺の当初の予想よりはるかに少ないが、それは俺の見解が甘かっただけで、20でもかなり順調と言える。

紫苑軍の地上戦初心者な面々も、ようやくそれなりに納得できる戦いができるようになっていた。

そんな時、俺が以前から研究していた関節パーツの完成が報告されてきた。

一生「よっしゃ！」

俺は誰もいない自室で、ひとり吠えた。

一度失敗した研究だったけれど、通常の間節パーツのデータを調べ、自分の頭で考えうる全てをぶつけて研究した。

調べてみると、やはりどうしても能力の低下は免れないが、十分戦闘に耐えうるだけのパワーは維持できていた。

問題は、製造コストがややかさむ事と、時間がかかる事くらい。

俺は早速パーツの製造を指示した。

次の日、パーツは完成していた。

人型パーツで、これほど時間のかかるものもそうはない。

これは、破壊された時に、修理する時間もかかってしまうって事だ。

俺は、パーツの予備を準備する事も必要だと考え、再び製造指示をだしておいた。

ドルをかなり使う事になるが、元々俺は、さほど破壊される事も無いし、修理をする事も少ないから、お金は余っていて大丈夫。

ただ、地上戦を始めてからは減る一方なので、軍から融資してもらう事も一応考えていた。

さて、数時間で目的の「パーフェクトテンダネス」が完成した。

パッと見、どちらが前でどちらが後ろか分からないような機体にする事もできたが、俺はあえて違いをつけた。

前後両方使える機体だとばれないようにするのも理由の一つではあるが、やはり全く同じだと格好悪い。

それに、後ろ向きで戦うと、レベルによる制限がかかる事は既に決まっている事だから、同じにする意味もない。

俺は早速テストバトルをして、試してみる事にする。

NPC相手にテストするのも味気ないので、友軍に誰かいないか声をかけてみた。

すると意外にも、あまり面識のないおとめさんが声をかけてきてくれた。

おとめ「完成したんだあ。じゃあちょっと私と遊ぼうよw一度戦ってみたかったしw」

アライヴ「ありがとうございます。ではよろしくお願いします。」

平日の昼間にゲームできるのも、やはりゲームで食べている人たちだからか。

ほとんどニートの自分と比べて、少しやるせない気持ちになった。

だからこそ、たとえテストバトルでも負けたくない、なんとなくそんな気持ちになった。

さて、地上でのテストバトルは、宇宙とは勝手が違う。

宇宙では宇宙空間に出て戦うわけだが、まさか街で戦うわけにもいかない。

だからその拠点の、地形特性にあったフィールドで戦う事になるわけだ。

たとえば、以前話に出た海中都市アクアの場合は、水中戦がテストバトルのフィールドとなる、という話だ。

実際にテストバトルした事がないので、一応こういう言い方をしておく。

さて、これから我々がテストバトルする場所は、どうやら荒野のようだ。
これまで地球で戦ってきた戦場の多くが、荒野であった事を考えれば、当然のフィールドだ。
荒野に、我が愛機であるテンダネスが映った。
その向こうに、おとめさんのマイヒメも小さく映る。
マイヒメのビジュアルは、今まで見た人型の、どの人型とも違っている。
スカート部分が長く、地上で戦う時はホバータイプの人型としての移動が可能だ。
その分、敵に蹴りをいれたりといった攻撃はほぼ不可能で、接近戦での対応力は落ちる。

一生「まさに姫といった感じだな。」

俺がそうつぶやいた瞬間に、バトルがスタートした。

接近戦での対応力が落ちるマイヒメとはいえ、おとめさんは接近戦が得意な人だ。

すぐに接近しようとしてこちらに向かってくる。

対応力を減らしてまで、こういったホバータイプにする事に疑問もあるが、おとめさんの戦い方に必要な要素なのだろう。

俺はまず、距離をとってビーム砲で狙い撃つ。

全く当たる気がしないくらい、華麗にかわされた。

一生「流石にゴッドブレス、この人も並じゃない。」

俺は嬉しくなってきた。

これだけ強い人と戦える事に。

出し惜しみしても仕方がないので、フェネルも展開する。

キュベレイに搭載している数には及ばないが、フェネルは俺のこだわりの兵器だ。

地上戦では、その力を完全には発揮できないが、それでも俺には必要なものだった。

フェネルがマイヒメに向かう。

空中で静止させる事ができない地上では、常に飛行を続けなければならない。

だからフェネルの設定は、常に相手と一定の距離を飛行し、攻撃できるタイミングで自由に攻撃するようにしていた。

それに合わせるように、こちらも攻撃を繰り返す。

マイヒメは意外とフェネルに手こずる。

近接格闘には定評のあるおとめさんだが、ビーム砲などの飛び道具は、少し苦手のようだ。

それでも時間をかければ、そのうち全てのフェネルは落とされるだろうし、攻撃チャンスは今のうちだ。

しかし、フェネルを展開し、ビーム砲で隙を狙っても、ことごとくこちらの攻撃はかわされてしまう。

そのかわす姿は、なんとも美しい。

見とれている場合ではない。

長距離での、この絶対回避とも言える華麗さを見ては、接近して戦う以外に選択肢はないように感じる。

これがマイヒメの強さか。

俺の顔は、きつとにやけているに違いなかった。

何故ならとても楽しいから。

俺は意を決して、マイヒメに突っ込んでいった。

接近する際、一発ビーム砲を撃った後、ビームソードを起動する。

俺のビームソードは、ビーム砲もそうだが、腕に最初から搭載されているタイプだ。

手首によるひねりがきかない分、いくらか融通のきかない部分がある。

通常なら、ロックオンできるタイミングが100あるとするならば、俺の機体では90から95くらいになる。

でもそこは俺の操作、人型の体の向きを上手くコントロールする事で、十分カバーしていた。

接近した途端、マイヒメの動きが変わった。

持っていたライフルをその場に捨て、ビームソードを手を取った。

既に分かっている事ではあるが、マイヒメは二刀流だ。

そして俺の機体、テンダネスも二刀流が可能。

もう片方のビームソードも起動して、こちらも二刀流でいどむ事にした。

その間もフェネルはマイヒメに攻撃を続けていたが、そんな事を忘れてしまうくらい、ただそこで息をしているような感覚で、全ての攻撃がかわされていた。

さて、この状態で近接戦闘をするとすると、フェネルでの利点はほとんどないだろう。

俺はフェネルを戻す事にした。

不規則に飛びまわっていたフェネルは、テンダネスの肩と腰あたりにある格納場所へと戻ってきた。

急に画面が静かになった。

何故か一瞬両者動きを止める。

そして再び、戦闘が始まった。

ビームソードでの戦いでは、いつも不思議に思う。

何故、ビームソードでビームソードが止められるのだろうか。

それを不思議と感じたところで、何がどうなるわけではないが、戦いながらなんとなく考えていた。

戦いは一進一退。

関節のパーツも問題無く動き、今までよりも動作ブランクが少なく、それは限りなく0に近い。

動作ブランクとは、こちらが操作してから、それが実行されるまでのほんのわずかな時間の事だ。

それが0に近いという事は、パワーバランスがしっかりしていると言う事だ。

たとえば重い武器を持ったりすれば、それに伴うパワーが無い場合、すぐには動かせないというわけ。

いくらすばやく操作していても、思いどおりに動かなければ意味がない。

今まではそれでも、先を予想して操作し、或る程度の敵には立ち向かえていた。

しかし、実際思いどおりに動かせる機体に乗ると、その良さがひしひしと伝わってくる。

厳しい戦いを続けてきたのも、無駄ではなかったと思った。

今、自分の成長を肌で感じていた。

地上戦が得意なマイヒメと、接近戦が得意なマイヒメと、互角に戦っているのだから。

しかもこっちは、陸戦よりも、宇宙戦の方が得意な機体だ。

パイロットの力ではこちらが上だと、自分自身思えるに十分な戦いだった。

それでも、やはりマイヒメは強かった。

俺が少し隙を見せたら、見事に背後に回り込んできた。

おとめさんは、俺の機体が前後両方使える機体である事を知っている。

そして今回、その機体が完成した事も話している。

それでもあえて背後をとってきてくれたのは、このテンダネスがちゃんと機能するかどうか、試せるようにしてくれたのだろう。

俺はそれにこたえる為に、前後カメラを切り替えた。

それはすぐに完了し、前後逆のモードへと移行する。

後ろ向きでのレベルも十分にあげてあるので、機体の能力はほとんど落ちてはいない。

目の前のマイヒメが、得意とする技、ソードを両手に持ち、手をひろげて回転し攻撃する技、「旋風斬」で向かってきたが、一方のビームソードで回転軸をずらし、もう一方のビームソードでマイヒメを斬りつけた。

テストバトルは、俺の勝利で終わった。

テンダネスの完成と共に、俺自身の実力が、今までにやってきたきつい戦いのおかげで、大きく成長している事を確認できた戦いだった。

仕様変更

今日は、運営から重大な発表があった。

と言っても、以前から話が出ていた事だったので、大した驚きは無かったが、この事についてもう一度みんなで話し合いをしなければならない。

重大な発表と言うのは、ゲームの仕様変更の一つ。

ゲームと言うのは、仕様変更や、新たな機能が徐々につけられたりする。

理由は、ずっと同じだとゲームに飽きたり、プレイヤーの成長に応じて調整が必要だからだ。

だけど、俺は仕様変更があまり好きではない。

それによってゲームバランスが崩れると、一々戦略や戦術を見直さなければならなくなるし、最悪、力の上下関係まで変わってしまう。

たとえば、フェンネルという武器がある。

これを、使う人が少なくて楽しめないからといって、もっと簡単に使えるように仕様変更されたりすると、俺の今までの努力が無駄になる事は確実だ。

もちろんそんな変更は無いと信じたい。

だけど現に、俺は仕様変更でネットゲームを辞めた事が多くて、仕様変更の発表があるたびに、俺は不安になった。

さて、今回の仕様変更だが、特にゲームバランスが崩れるものではない。

理由は、既に利用している人は利用しており、それがゲームの正式な機能として、導入されただけだからだ。

スカエポと言う、ネット上で複数の人が回線を繋ぎ会話ができる、ネット通話システムが今回の新機能。

ゲームバランスは崩れないし、より便利になる訳だから良いわけだが、今回わざわざ話し合いをしなければならないのには理由があった。

理由の一つは、正式な機能以外は使わないという人がいて、コレを期に使う事にするのかって事。

もう一つは、喋った事を文字に変換したり、色々細かく設定できるようになったので、使うなら全ての指揮システムの再編も必要になる事だった。

ちなみに、我が紫苑軍は、軍としてスカエポは使用していなかった。

一部の人が、仲の良い人同士、使ったりしているとは聞いている。

でもそれだけだった。

外部チャットシステムも、紫苑さんが、サイファさんなんかとチャットする為に、IRCを使っているような話は聞いたが、積極的には使っていなかった。

つまり我が軍は、基本ゲームシステム内で、ほとんどやり取りをしていたってわけだ。

アライヴ「スカエポ、結構使えそうな感じだね。」

俺は紫苑さん達と話をしていた。

実は俺は、今回の仕様変更によるスカエポ導入は、かなり有りがたい。

人型乗りってのは、戦闘中はかなり大変で、チャットしている余裕がないからだ。

でも、声で相手とやり取りできるなら、戦闘中でも作戦行動がやりやすくなるってわけだ。

紫苑「ん～悩む。(@_@)」

紫苑さんは、実はスカエポ反対派だ。

ネットの良さは、喋らなくて良いところだとか言う人だし、ギリギリの戦闘時は、通信が混乱して、チャットの方が良いと考えていた。

ちなみに、前作とは違い、通信の傍受、盗聴、通信記録の奪取など、通信が相手に漏れるような仕様は廃止されていた。

理由は、外部チャットなどを使う人が多く、意味を持たないから。

だから、スカエポを使うメリットは「手が離せない時にでも簡単に連絡できる」その一点だけだった。一方、スカエポのデメリットも話しておく、「連絡が簡単にできてしまう事による、情報過多の混乱」と「喋る事の恥ずかしさ」となるのかもしれない。

じえにい「あれえ〜？わたしのお〜がめん、スカエポつかえないよお〜？」

アライヴ「あ、それ、バリューネットブラウザ、バージョンアップしてないからだよ。一度ブラウザ再起動してみなw」

銀河バリューネットのサービスシステムは、普通のサイトとは若干異なる進化を遂げていた。

だから、現在のシステムも、他とは微妙に異なる。

現在のネットゲームの主流は、ブラウザゲーム、通称ブラゲーである。

利点は、インストール不要な事だ。

ただし、ブラゲーは複雑なゲームには向かない。

理由は此処では割愛するが、そういった理由で、銀河ネットバリューのサービスをサポートできないのだ。

だから元々は、ソフトをダウンロードし、バージョンアップの度にバッチプログラムをあてて、更新するという作業が必要だった。

しかしそれは、それなりにPC知識のある人なら全く問題ないが、素人には難しく、ユーザーの伸び悩みに繋がっていた。

そこで出てきたのが、銀河ネットバリューサイト専用の、独自ブラウザだった。

このブラウザは、普通にブラウザとして使っても使いやすく、コレ自体がゲームプログラムになっているすぐれものだった。

バージョンアップ更新を自動にしていれば、インストールしておけば、後は何も問題無かった。

ただし、バージョンアップの更新は、主ブラウザを立ち上げた時と、18時から19時前にチェックが行われるので、ずっとブラウザを開いたままだと更新されない。

よって、更新が必要な時は、一度ブラウザを閉じる必要があった。

じえにい「ただいま〜でできたよお〜」

アライヴ「良かったね！」

じえにいと話していると、少し癒される。

子供の相手をしていると癒されるのは、人間の本能だから当然と言えば当然か。

と言っても、中学生だからそれほど子供でもないのだけどね。

さて、スカエポをどう扱うか、議論は一向にまとまらなかった。

マイクとイヤホンを持っていない人に関しては、もちろん無理に使用を強制する事はない。

使いたい人同士で、喋りながらやるのも別にかまわない。

問題は、紫苑さんが指揮する作戦行動中、どうするかって事で意見が別れていた。

ただし、通話という意味では、夜遅い時間に大きな声を出せないとか、喋りたくない人もいるので、無理強いはいできない。

全ては、スカエポの導入にあたってつけられた、新しい機能が問題だった。

それは、喋った音声データを文字データに変えて、チャット文字として自動的に書き込みができる機能だった。

紫苑「ためしにやってます」

アライヴ「もじになりますねー」

スピードスター「おんぷ」

これは確かに便利である。

だけど、ただでさえ情報過多でチャットスペースが少ないのに、喋りやすくなったからと言って沢山やり取りすると、すぐに情報が流れて行って、把握できない。

紫苑さんの命令もすぐに流れては、まとまった作戦行動ができなくなる。

でも、人型乗りとしては、スカエポで伝えられるなら伝えたい。

話し合いでは結局まとまらず、一度試してみるって事で、話し合いは終わった。

今日の戦闘は、スカエポを使いたい人は使って、音声ではなく、文字変換してチャット画面に流す機能を使う事になった。

紫苑「あじさいとほしはきよてんひだりからしんこう これいはみぎからでおねがいます」

紫陽花「りょうかい」

スピードスター「おんぷ」

小麗「しゃおれいだよ」

アライヴ「そろそろでるよ」

じえにい「わたしも」

ハルヒ「おれもでていいのかな」

紫苑「ひとがたもそれぞれのたいみんぐでしゅつげきよろ しく」

サラ「りょうかい」

じえにい「もうでちゃってるよ」

アライヴ「あ ごめん しゃべりすぎ」

スピードスター「だめだ よめん」

他にも多くの文字が、チャット画面を埋め尽くした。

試してみるとハッキリした。

これは使えない。

紫苑さんは、全ての人からくる情報を受けているわけで、俺よりもチャット画面がっぱだろう。

この流れだと、命令を見逃すだろうし、ひらがなばかりで読みづらく、なんと言っても味気なかった。

結局スカエポは、その時の作戦によって、紫苑さんの判断で、必要な人だけ使うって事で決着がついた。

レイズナーさんの指揮している人達は、もちろんレイズナーさんに任せる事になった。

ただ、今回スカエポの導入で、軍のやり方について行けないと言って抜けた人が、3人いた事は、紫苑軍にとっては痛手だった。

やはり仕様変更ってのは、あまり良い物ではないなと、改めて思った。

あ、一応今回の戦闘は、我が軍の大勝利でした。

多少指揮系統が混乱しても、強い人が集まっているから、強い事に変わりはないからね。

砂漠での戦い

地球での戦闘は、後半戦へと突入していた。

と言っても、グリード軍が地球を制覇しそうだとか、そういう意味ではない。

連合期間が、残り1カ月を切ったって事だ。

そして、今日からは、新たな戦闘フィールドになる。

今までは、荒野、街が中心のフィールドだったわけだが、今度攻撃する場所は、砂漠がフィールドの大半だ。

話を聞くとところによると、砂漠での戦闘は、ホバータイプの人型が圧倒的に有利なフィールドであるという事だ。

ウイングをつけて、空を飛んで戦おうと思っていたが、一度ホバータイプを試してみる必要があるそうさ。

俺の所持機、SSとテンダネスは、足がスカートタイプではないので、ホバーシステムをつけられない。

俺は久しぶりに、キュベレイに乗る事にした。

宇宙から地球におろし、ホバーシステムをつける。

意外と調整が難しく、今までのようにフェネルを大量に搭載する事はできそうになかった。

それでも、戦闘開始時間の19時までには、それなりに納得できる状態になった。

いざ、戦闘開始だ。

まずは艦船で敵の拠点へと向かう。

俺はキュベレイ内で待機中だ。

この時間は毎回ワクワクするが、今日は少しドキドキも混じっていた。

しばらくすると、紫陽花さんから通信が入る。

紫陽花「そろそろ出撃よろしくw」

アライヴ「ラジャ！」

チョコビ「はい」

みゆき「了解w」

紫陽花さんの指示により、いよいよ出撃だ。

今回は、チョコビとは共闘しない。

なんせキュベレイだからね。

ちなみにチョコビも、人型をホバータイプに改良していた。

元々、素早い動きを旨とする機体でも戦い方でもないし、つけておいてマイナスはほとんどないはずだ。

問題は、お互いホバータイプで戦闘するのも、砂漠が多いフィールドで戦うのも初めてだって事だ。

艦船から発進して、砂漠へと降り立った。

足元がしっかりしていないから、ゆっくり機体が傾く。

放っておくと倒れるので、少し動いて体勢を整えた。

俺もチョコビも、今までの戦闘で、多少砂地を経験はしているので、倒れる事は無かった。

しかし、やはりこんなところで戦うとなると、辛い事は確か。

みゆきちゃんも倒れはしなかったが、かなり苦労しているのが見えた。

敵の機影がレーダーに映る。

俺は早速ホバーシステムを起動した。

体が少し地面から浮き、機体が安定した。

ふわふわ浮いているような感覚は、今までにない感じだ。

ホバータイプと言え、先日前おとめさんとテストバトルした時の事を思い出す。

他にもサラさんやサウスさんが、ホバータイプを使うのを見ている。
どういう戦い方ができるかは、イメージとして頭の中には既にあった。
戦闘が始まった。

一生「思ったより結構きつい。調整が必要だなあ。」
動きは早く、スムーズに動けるのは良いが、上半身が安定しない。
こんなのでよく戦えるなど、少し感心する。
俺のキュベレイは、下手な踊りを踊っているように、フィールドを移動していた。
それでもなんとか、敵をうまく倒していった。
チョビを見てみると、なんの問題も無かった。
元々不安定な機体で戦い続けていたし、動きまわる戦術でもない。
むしろ回転が楽にできる分、今まで以上に良い戦い方ができているようだ。
チョビには砂漠がっているのだなと思った。
概ね砂漠の敵を撃破したところで、グリードさんの艦船の近くに集まる。
敵本拠地を落とすのは、今日はグリードさんの軍が行う。
同盟軍は、グリード軍に吸収されるような形をとっているのだから、別に誰が落としても、奪った拠点はグリード軍の拠点になる。
でも、拠点を落とした時の経験値や、陥落ボーナスアイテムなどは、拠点を落とした個別の軍、個別の部隊、個別の人へ入る事になる。
此処までは結構、紫苑軍やサイファ軍が落とす事が多かったのだから、今日は譲ろうと言うわけだ。
グリード軍と同盟を結び、共同戦線を張っているのは、あくまで地球戦になれる事と、地球用パーツを手に入れる為。

その代償として、拠点を増やす事に協力しているわけだ。
もちろん、今後の良い関係を築く為なのは言うまでもないだろう。
だから、経験値や戦利品は、譲る事も当然の事だった。
ただ、今日は手こずっていた。
グリード軍には、そこそこの人型乗りはいるみたいだが、トップクラスで戦えるパイロットがいない。
一人で状況を打開できるようなパイロットが一人でもいれば、グリード軍はもっと強くなっていただろう。
グリード軍が、今までなかなか拠点を増やせなくて、我々の協力を必要とした理由はそこにあった。
どうやら拠点の中に、強い敵が1機いたようで、手こずっている。
本来、拠点や要塞内で、人型によって迎え撃つ事はしない。
理由は、拠点内でビームやミサイルなど攻撃する事によって、拠点内や要塞内を損傷させてしまうからだ。
ただ偶に、拠点内での戦闘を得意とする人もいるし、もう相手に明け渡す覚悟で、拠点内の戦闘を選択する人もいた。

グリード「しかたない、俺が行く」
グリードさんが今までに何度か人型で出ているのを、俺は見ている。
そこそこ強い人だとは思いますが、俺クラスから見ると、それほどではないし、大將がひとりで行くには危険だ。
万が一にも落とされるような事があれば、グリード軍には後に有力者はなく、軍自体存続は難しいと思われた。

サイファ「危険です。誰か護衛をつけてください」
真でれら「俺行こうか〜」
サイファ「いや、真じゃホントに護衛になるw敵の人型を倒せる人がいるだろ。」
サイファ軍の面々は、グリードさんとは仲良しなので、発言も結構気軽にできる。
しかし紫苑軍は、友達の友達みたいなものなので、少し発言しにくかった。

グリード「いや、大丈夫だろ。敵は一機らしいし、うちの軍のメンバーもいるし。」
確かに数では圧倒的に勝っている。
でも、今まで手こずっていた相手に、グリードさんが行ったところで、状況を変えられるとは思わない。
俺か今日子さんか、後はサラさんか、この中の誰かはつれて行って欲しいところだ。
なんだか嫌な予感がする。
此処での行動が、今後を大きく左右する気がする。
もし誰も一緒に行かなければ、きっと・・・
グリードさんの人型「飛影」が、旗艦「大和」より出撃するのが見えた。

グリード軍消滅

敵拠点へと、ただ一機向かう、グリードさんの人型「飛影」の姿が見える。

このまま行っても良いのだろうか？

きっと、今まで自力で落とせた拠点がほとんどなかった事と、今日はグリード軍が落とすと作戦で決まっていたから、無理して出撃しているのではないだろうか。

俺はとりあえず、紫苑さんに相談する為に、全軍チャットではなく、自軍チャットに切り替えて、声をかけた。

アライブ「紫苑さん、このまま行かせて良いの？誰か一緒に行った方が良いんじゃない？」

紫苑「ちょっと考える。待ってて。」

この状況で考える？

紫苑さんの発言に、少し違和感を覚えた。

飛影の姿は、完全に拠点の中に消えていった。

すぐに紫苑さんから、個人通信が入った。

俺は回線を開く。

紫苑「内緒の話がある(^0^)」

この通信、何か謀略の匂いがした。

アライブ「おけw」

紫苑「実は俺は、此処でグリードがやられる事を期待している。」

やはりそうか。

でもこの言葉には、まだ嘘がありそうだ。

紫苑さんとの付き合いは長い。

これはきっと、この地球での作戦が決まった時から、既に決められていた事だろう。

俺の予想するシナリオはこうだ。

此処でグリードさんがやられる。

そうすると軍は、後継者に継がせるか、消滅かを決定する事になるが、グリードさんの軍には、後を継いでやっていける人物はいない。

となると、消滅やむなしって事で消滅させる事ができる。

本来、通常の状態解散した場合、解散ペナルティとして、賞金査定にも響くと言われているし、将校以上の者は3ヶ月間、上位軍には入れない。

しかし、消滅だと話は別だ。

やられた大将は、人型、又は旗艦を失う事になるし、経験値も少しばかり減る。

おそらく賞金査定でも、それなりにマイナスになるだろう。

それでもグリードさんなら、大将として此処までトップクラスの軍を率いてきたわけだし、そもそも最初、サイファ軍に入りたいと言っていた。

1週間入る事はできないが、3カ月待つ事を考えれば、やられた方がメリットがあるのではないだろうか。

やられるなら、艦船に乗っている時より、人型に乗っている時の方が、予算的に考えても良い事を考えると、これはますます作戦だと思えてならない。

そして今まで既に40もの拠点を得ている。

グリード軍のメンバーが、自ら軍を立ち上げたり、周りの軍が中立拠点を奪うとしても、いくつかは紫苑軍とサイファ軍で奪う事ができるだろう。

というわけで、だいたいこんな感じになるものだと思っていた。

間もなく、グリードの死と、グリード軍の消滅を告げる告知が出た。

此処まではやはり予想どおりだった。

紫苑「紫陽花の艦だけ残して、後は中立拠点を奪いに行く。アライヴでも此処の拠点無理そうなら、諦めて撤退してくれ。」

予定どおりと言わんばかりの命令が、当然のように発せられた。

気がつくや、星さんの艦船、スピードスターの姿はない。

既に向かっているようだ。

流石に早い。

小麗さんの艦船、月天も既に行動を開始していた。

星さんの速さは定評があるし、紫苑さんとはリア友だから、こうなる事を聞いていたのだろうし早いのは理解できるが、小麗さんとゴッドブレスのメンバーは流石だと思った。

アライヴ「チョビ、行くよ！みゆきちゃんは一応、パープルフラワーの守りを！」

チョビ「はい。」

みゆき「了解」

俺はチョビをつれて、拠点へと向かった。

サイファ軍と競争になるかもしれないと思ったが、どうやらその様子はないので、既に話がついているようだ。

この素早い決断が、以前からの作戦だった事を確信づけた。

拠点に入っても、攻撃は全く無かった。

どうやら本当に、敵一機に止められていたのか。

拠点内を慎重に進んだ。

司令室まで無事たどり着ければ、拠点は落とす事ができる。

拠点戦ってのは、敵の攻撃をかくぐり、無事そこまでたどり着く事が主な目的だ。

後はそこで、指定された操作を行うだけ。

拠点の内部構造は、全ての拠点で違う。

それに拠点の防御力によって、司令室までの距離が長くなったり、通路の開閉で迷路のように変わったり、指定操作が複雑化するので、防御力の高い拠点攻略は結構面倒くさい。

でも此処は、事前の諜報活動で、レベルはさほど高くない事は分かっている。

攻撃を受けなければ、5分もしないうちにたどりつけるだろう。

思ったとおり、2分ほどでゴールまでの道のりが見えてきた。

おそらく此処の細い通路をまっすぐ行ったところが司令室だ。

と、そこで思い出した。

此処には一機、強い敵がいた事を。

強力なビーム砲とミサイルが沢山襲ってきた。

狭い通路で、人型が2機、すれ違うのがやっとなくらいだ。

これだけ数を撃たれてはかわせない。

こんな風に守っている拠点だったのか。

今更知っても遅い。

俺はとにかく、致命傷にだけはならないように、被害を最小限にする事だけを考えた。

その時だった。

チョビの人型、ガードナーが俺のキュベレイを押しつけて前にでた。

そして盾の拡散ビーム砲を放った。

助かった。

チョビ「私が止めるから、すうすんえ」

敵の攻撃を防いだチョビは、慌てているようで、チャットの文字がおかしかった。

でも言いたい事は理解した。

アライヴ「了解！」

了解って返事は、ダイレクトキーとして設定してあるので、ボタン一つで返事をした。
チラッと、部屋の時計を確認した。
時間は22時45分だった。
PCディスプレイを見た。
ようやく敵機影を確認できた。
名前はアブサルート。
人型名は「拠点の虎」だった。
見ただけで分かる、火力重視の機体だ。
接近さえできれば一気に勝負を決められそうだが、この一本道で接近するのは至難の業だ。
本来なら出直して、強力な盾を持つ人型を2機、つれてきたいところだ。
だが今日を逃すと、再びここを攻める事は、しばらくできそうにない。
多かれ少なかれ、今日手に入れるであろう拠点を元に、地球での足場を固める必要があるからだ。
チョビには悪いが頑張ってもらおう。
接近さえしてくれれば、俺が必ず仕留める。
沢山のビーム砲とミサイルが襲ってくる一本道を、俺達はチョビの盾で受け止めながら、とにかく進んだ。
23時が近づいてくる。
23時は、チョビが寝る時間だ。
これを破る事は許されない。
いつも5分前に落ちるから、今日もきっとそうなるだろう。
ちなみに、戦闘中に落ちた場合は、一番近い友軍基地、又は艦船へと自動的に戻る。
その間攻撃されたら、もちろんダメージを食らう。
回線を切断して、30秒以上たってから完全破壊されても死なないが、機体のダメージは残るし、奪われれば相手の物になる。
意地でも終わらせなければ。
俺は、わずかに距離を残したところで、フェンネルを飛ばした。
そしてガードナーの前に出た。
目の前が爆発に包まれた。

わずかな道を抜けて

俺は爆発の中へと飛び込んだ。

もう、すぐ目の前に、敵が存在した。

俺はビーム砲を一発撃ってから、ビームソードを出した。

キュベレイは良い。

一瞬の瞬発力では、どんな機体にも負けないスピードだ。

行けると思った。

全てが俺の思いどおりに動いた。

しかし、ただひとつ思いどおりには動いていなかった。

俺がビーム砲を撃てば、敵はかわすだろうと予想していた。

だが、そのまま受けていたのだ。

このままではヤバイ。

俺のビーム砲の攻撃で、機体がいくらか損傷していた拠点の虎だが、その力が失われているようには見えなかった。

駄目だ、やられる。

俺は、相当なダメージを覚悟した。

もしかしたら負けるかもと頭をよぎった。

それでも俺は、そのまま突進するしかなかった。。

ビーム砲の発射の兆候である光が、拠点の虎の機体に見えた。

間に合わないか。

その時だった。

俺の後ろから、チョビのビーム砲が、拠点の虎の足を撃ち抜いていた。

バランスを崩した拠点の虎のビーム砲は、キュベレイのすぐ上に抜けていった。

直後、キュベレイのビームソードが、拠点の虎を斬り裂いていた。

決着はついた。

チョビと二人でつかんだ、ギリギリの勝利だった。

無事拠点を攻略した後、チョビはゆっくり話す間もなく、奪ったばかりの拠点に人型を格納して、ネットから落ちた。

俺は紫陽花さんに連絡を入れてから、拠点の司令室で拠点の設定をいじった。

普段あまり拠点の設定はいじらないので、俺にはよくわからず、結局紫陽花さんにほとんどをやってもらった。

俺がやったのは、拠点の防衛システムの起動と、損傷個所の復旧作業依頼だけだった。

紫陽花さんが一通り設定を済ませ、落ち着いたところで、拠点の虎の機体に乗っていたアブサルートさんと話をした。

二人がかりでようやく倒せた相手、地の利と戦略上の優位性を持っていたとはいえ、俺がこれだけ苦しめられた相手はそうはいない。

是非仲間になって欲しいと思った。

紫陽花「アブサルートさん強いですね。うちのエースが此処まで苦しめられるなんて。」

アブサルート「機体が良いと、此処の拠点が守りやすかったですよ。」

確かにそれはそうだが、普通の人ならよけたくなるビームをかわすそぶりも見せず、攻撃を選んだ選択は、やはり強さを感じる。

少なくともこういった形の拠点なら、もう少し拠点レベルが高ければ、一日二日で落とさせやしないだろう。

拠点レベルが低くて良かったと、改めて思った。

紫陽花「で、うちの軍にきませんか？」

これが本題だ。

とらえられたプレイヤは、必ずと言っていいほど、こういった話を持ちかけられる。

味方にするか、逃がすか、選択肢は2つしかないからだ。

大将の場合は味方にするコマンドは無く、処刑か逃がすかになる。

ただ、吸収可能の軍の大将の場合は、吸収というコマンドも使えるみたいだが、ほとんどの大将は戦場で倒れる事になるので、俺はそのコマンドを見た事は無かった。

さて、今回の場合は、味方にするか、逃がすかである。

そして即時逃がしたりすると、再び戦いを挑んでくる人もいる。

味方にする事を選んで拒否された場合も、即時自軍に戻る事になるので、同じ危険がある。

だからまずは話をして、味方になる意思を確認し、味方にならないなら、戦闘時間が終了してから自動的に解放という事になるのが普通だった。

アブサルート「サイファ軍だったらと思っていたんだけどね。どうしようかな。」

どうやら仲間になる事を少しは考えているようだ。

嫌な人は、普通だと即断る。

条件次第って事だろう。

おそらく階級を要求しているのだけれど、紫苑軍の階級の上位に余裕はない。

さて、紫陽花さんはどうするのだろうか。

紫陽花「そうですか。残念です。では、サイファさんに、アブサルートさんのお気持ちだけお伝えしておきますね。」

紫陽花さんの発言は、予想外のものだった。

これだけ強い人だ。

なんとか説得するものだと思っていた。

それに本人も、条件次第だと言っているようなもの。

何かひと押しがあれば・・・

そう思ったが、結局なんの問題もなかった

言われてみて納得した。。

アブサルート「いやだなあ。仲間になりますよ。これだけでかい軍に捕らえられたチャンス逃すのも惜しいし。」

別の軍に入るには、何らかの方法でフリーになるか、裏切るか、捕らえられた時に誘いを了承するか。

この中で一番査定リスクの少ないのが、今回のような場合だ。

まず、裏切りに関しては、取り返し不可能なマイナス査定となる事は、運営も話している。

次に軍を抜ける行為も、退役、死亡、どちらをとってもマイナスは大きい。

で、今回のようにとらえられた場合だが、敗戦によるマイナスは既にあるが、他と比べると査定マイナスは少ない。

他の拠点にある自分の艦船や人型を失うというマイナスもあるが、今回の場合それは考えなくてよさそう。

アブサルートさんの艦船も人型も、全てこの拠点にあったから。

なるほど、そういう事か。

元々アブサルートさんは、此処が落とされるような事があったら、落とした軍に入るつもりだったんだ。

さっき拠点の設定をしている時に、紫陽花さんはアブサルートさんの艦船と人型があるのを見て、それを悟ったのだろう。

紫陽花「あら、そうですか。ありがとうございます。よろしくお願ひしますねw」

こうしてアブサルートさんは、我が軍の一員となった。

24時をまわり、戦闘時間が終わって、全てを確認したら、元々グリード軍の拠点だった場所は、32個がサイファ軍、6個が紫苑軍、2個がその他の軍に取られる形となっていた。

サイファ軍はどうしてこれだけの拠点を獲得できたのだろうかと思議に思ったが、後で聞いた話によると、やはり作戦だったらしい。

内容はこうだ。

全ては関係者が個別に内密に行った事。

先日、人気アイドルしゃこたんが来た時に、グリード軍内での、サイファ軍の人気は一気に高まった。サイファ軍に行きたいと思う人が増えたが、吸収合併できる条件はクリアできないし、退役や裏切りなどは考えられない。

グリードさんは元々サイファ軍に入りたいと思っていたし、これだけ拠点を増やしても、グリード軍だけで維持するのは難しいと思われていた。

なんとかグリード軍を、サイファ軍と一緒にできないか。

考えて一番デメリットの少ないやり方が、大將がやられて、軍を消滅させる方法だった。

解散は、そう簡単に解散されて、強い軍に人が集まれば、運営側にとってよろしくないもので、デメリットが大きく設定されてある。

壊滅は、戦いに負けたと言う事で、これもまたデメリットが大きい。

しかし消滅は、軍としてよりも大將が負けたという色が濃く、よって中立化した拠点の司令官は、すぐに軍を立ち上げる事ができた。

グリード軍の各司令官は、グリードが敗れるとすぐに、多数の軍を立ち上げた。

その軍は、一時的にグリード軍の残党軍のような扱いになり、友好関係なども引き継がれる。

簡単に言えば、小さなグリード軍が沢山いっぺんにできたような感じだ。

本来これは、無能な大將の被害を受けないようにとの処置で、残党軍どうしは、合併吸収もリスク無しで行う事が可能だった。

ただ、此処に抜け道があった。

残党軍は、別の軍へ吸収される事も可能だった。

ただし、条件やデメリットは、普通の吸収合併と同様だが。

簡単に今回の事を説明するならば、グリード軍も、サイファ軍も、大きな軍になりすぎて、吸収合併が不可能だった。

そこで、グリード軍を多数に分けて小さくし、サイファ軍に吸収可能な条件を整えたというわけだ。

紫苑軍は、そのおこぼれに与ったというわけ。

1週間後、サイファ軍に、グリードさんが登用された。

遷都と作戦S

思わぬ形で地上に7つの拠点を得た我々紫苑軍だったが、その防衛は容易では無かった。地上戦になれているグリード軍と、プレイヤー数が圧倒的に多いサイファ軍と一緒にいたから、今まで上手くやれていた事を思い知らされた。

パイロットの質は高い紫苑軍だが、複数個所の物量作戦を仕掛けられては、守るのが精いっぱいだった。

拠点のレベルや守りも安定しておらず、もうしばらくの我慢が必要だった。

そこで紫苑さんはある決断を下した。

紫苑「地球の方が重要だ。宇宙は最悪捨てる覚悟で。ガンダーラに遷都する。」

思わぬ発言だった。

ガンダーラは、地球で所持している拠点の一つだった。

安定している宇宙を捨てて、混戦の中の拠点を本拠地に？

でも確かに、そうする方が良いかもしれないとも思う。

地球の拠点は何処も生産性が高いし、ガンダーラは中でも最高クラスだ。

それに、早い段階で地球に安定した基盤を築く事は必要だった。

コロコロコロニーから、宇宙専用の艦船と人型以外、全てを移動してくる。

宇宙は、全てレイズナーさんに任せた。

壁さんとてけと一さんも、地球へと降りてきてもらった。

紫苑さんの決断は正解だった。

宇宙は比較的安定しており、時々攻めてくる敵もあったが、レイズナーさんで十分守れた。

それとも光合成さんの活躍か。

とにかくなんの問題もない日々が続いた。

地球上はと言うと、壁さんに本拠地ガンダーラを固めてもらい、すぐに安定した守りになった。

地球上にある7つの拠点は、本当の意味で、紫苑軍の拠点として機能し始めた。

しかし、後数日で新たな作戦行動を起こそうかという時に、宇宙に敵が攻めてきた。

と言っても、本来我々が負けるような相手ではない。

ただし、レイズナーさんの部隊だけでは、守りきれないかもしれない戦力だった。

下手をすると、一気に拠点を飲みこまれるかもしれない。

それくらいの相手だった。

紫苑「せめて今日だけ守れば、明日には宇宙に何人か戻せるな。」

スピードスター「俺、即行戻る？♪」

紫苑「いや、今から行っても時間も無いし、敵領域をいくつも行くのは危険。元々捨てる覚悟だったし。」

俺は戦闘中で手が離せなかったので、二人のチャットをただ見ている。

しかし、今まで守りぬいていた要塞やコロニーを取れるのもしゃくだなぁと思った。

一生「ま、仕方なし。」

俺は目の前の戦闘に集中しようとした。

でも、チャットはまだ終わっていなかった。

紫苑「でも、みすみす負けるつもりもないけどね。作戦S発動！（笑）」

紫苑さんの悪知恵キター！と、少し顔がにやけた。

この発言が気になって、今日は少し集中力を欠いた戦闘となった。

そして結局、1つの拠点も落とされる事なく、24時をむかえた。

後から聞いた話だが、作戦Sとは、前に我が軍に入った、「ジーク」を使った作戦だった。

巨大勢力を率いる大将ジークの情報を徹底的に集めて、色々とそっくりにしていた。

会員ナンバーはそれぞれに違うし、所属軍も階級も違う。

でも、まず戦闘時に表示されるのは、プレイヤー名と機体名である。

情報画面を開かれれば、すぐに偽物だとばれるが、自分たちもそうだけど、一瞬の戦闘時に情報画面を開く人は少なかった。

それが有名人ならなおさらだ。

情報を調べなくても知っているのだから。

我が軍のジークが、バルバロッサという名の艦船に乗ってあらわれると、戦場は一瞬止まったようになったらしい。

そこから人型が出撃し、敵を攻撃し始めると、敵は混乱したようだ。

「紫苑軍とジーク軍は繋がっていたのか？」「ジークを倒せば英雄だぞ！」「ヤバイんじゃないか？逃げた方が良くないか？」

色々な事を言っていたであろう敵の姿が想像できる。

でもきっと、すぐに偽物だとばれたはずだ。

ただ、その一瞬の混乱のチャンスを、光合成さんが見逃さなかった。

背後から敵の主要機を狙い撃った。

運が良かったのか、それとも光合成さんの実力か、とにかく状況を打開するには十分だった。

後は、光合成さん、レイズナーさん、ジークさんで混乱する敵を討った。

隠していた、一度しか使えない作戦は、見事に成功した。

水中戦

次の日、我が紫陽花部隊は、宇宙へ戻る事を命じられた。

しかし俺は、地球でやり残した事があったので、これを拒否した。

地球でやり残した事。

それは、まだ水中戦を経験していなかった事だ。

先日 of 戦闘で手に入れていた、水陸両用の機体を、少し俺仕様に改造していて、是非試してもみたかった。

紫苑さんは俺の希望を聞くと、快く地球に残る事を了承してくれた。

代わりにサラさんが、紫陽花さんのパープルフラワーに乗って、宇宙へと飛び立った。

19時になった。

今日は俺の気持ちを酌んで、南の島にある拠点へ遠征する事を、紫苑さんは許可してくれた。

これは負けられない。

ただ、紫苑さんは「駄目ならすぐに戻ってきてても良いよ。」とも言ってくれていた。

なんとなく、意地でも攻略したいと思った。

まず一つ、敵の領域を通過して行く事になる。

俺の機体は、今日初めて乗る「モノトーン」だ。

名前は、白と黒のツートンカラーでペイントされた機体だから、そう名付けた。

モノトーンを乗せた小麗の艦船月天が、高速で敵領域を突っ切る。

敵は拠点の周りに集まって、守りを固めていた。

これはすんなり通らせてもらえそうだ。

それにしても驚いたのは、乗ってる艦船のスピードと操舵だ。

この領域のマップの、もっとも航行しにくい山岳地帯を、山をぬうように高速で突き進んでいた。

艦船の操作は複雑ではないが、これだけの航行には、反射神経がかなり必要だろう。

小麗さんは、レースゲームが得意なのかも、そんな事を考えていた。

敵領域を一つ抜けて、いよいよ目的の領域へと入って行った。

陸地が途中までしかなく、後は海が広がっていた。

艦船でこのまま進むと、水中から攻撃を食らうだろう。

アライヴ「そろそろ人型行くよ。」

おとめ「了解～w」

サウス「蹴散らしてくれるわ！」

この面子で戦うのは初めてだ。

俺は少しワクワクした。

まずは砂浜に降下する。

一応警戒はしたが、特に攻撃はなかった。

とても静かだった。

だけど、水中に必ずいる。

何故か確信があった。

俺達は後方に小麗さんの月天を残して、3機水中へと入って行った。

NPCの乗る人型は出さなかった。

初めての水中戦だし、逃げる事も考えていたから。

水中に入ると、体が少し重く感じた。

動きも遅い。

これは、今日初めて乗る機体だからレベルが1な事も影響しているが、それだけではない。

でも、これだけ反応が鈍い動きも、テンダネスで経験していたので、すぐに対応できる自信があった。レーダーに反応があった。

魚雷の接近だ。

既に敵には、こちらが捉えられているようだ。

俺はすぐに迎撃用ミサイルを発射した。

水中で爆発がいくつも起こった。

その向こうで、おとめさんのマイヒメが、スクリューのように、島の方へと進んでいる姿が見えた。

一生「すげえw」

おとめさんは、変わったフィールドの戦闘が得意だ。

だから水中戦も得意だとは聞いていたが、コレは凄い。

サウスさんも迫力がある。

俺は少しにやけながら後に続いた。

すぐに敵機を目視できた。

同じくしてレーダーにも捉えた。

敵の数は15機といったところか。

数では圧倒的に不利だが、頼もしい味方もいるし、なんとかなりそうな気がした。

だがやはりそう簡単では無かった。

相手は水中戦になれた人達だ。

こっちには、素人もいる。

おとめさんが3機、サウスさんが4機落としていたが、俺はまだ0だった。

そして、サウスさんの人型サウスドラゴンが、かなり傷んでいるように見えた。

サウスさんは、強烈な攻撃力が売りな人だ。

だけど守りが弱く、誰かが守ってあげないと、その戦闘時間が長くはない。

俺は自分の無力さを受け入れ、サウスさんを守る事に戦い方を絞った。

後ろをフォローし戦う感じは、チョコビとのコンビに似ていると思った。

今までやってきた事が、色々なところで生きている事が嬉しかった。

時間はかかったが、敵の数が残り3機となったところで、俺は1機でも落とそうと、戦いを挑んだ。

この戦闘の中で、人型レベルが2に上がっていた。

少し動かしやすくなってきた。

戦いは一進一退だった。

ただ戦っていて思ったのだが、地上戦よりは、宇宙戦に似ている気がする。

上下関係なく戦えるし、重力を感じない。

浮力と重力のバランスが釣り合えば、こんな感じになるのか。

宇宙戦をスローにした感じだと思った。

俺は試しに、フェネルを出してみた。

横に動く事はできないが、地上で使うよりも使えそうだ。

水流はあるが、静止もできる。

フェネルが使えたこの後の戦いは、俺は正に水を得た魚のように、縦横無尽に動き回って戦闘に勝利した。

島に上がって、小麗の艦船も参戦し、拠点は意外と簡単に落ちた。

敵側としては、頼りにしていた水中戦で負けたのが、痛かったようだ。

こうして、地上8つ目の拠点「尖閣」を手に入れた。

水中戦を経験した俺は、モノトーンを改良ドックに入れて、宇宙に帰る。

水中戦の要領はつかんだ。

次に水中で戦う時は、完璧にする。

その日から、俺は暇さえあれば、尖閣での模擬戦を繰り返した。

発表

今日の軍チャットは騒がしかった。

チャットだけではない。

2chや外部チャットでも、そしてテレビのニュースでも放送されていた。

いよいよ、このゲームの賞金と、査定ポイントの細かい内訳が発表されていた。

査定ポイントに関しては、ちよくちよく個別に発表があったので驚くところはない。

勝てば増えるし、負けたり、裏切ったりしたら減る、当然の配分だ。

テレビで騒いでいるのは、もっぱら賞金総額だった。

俺達から見れば、既に噂されていた事なので驚きは無かったが、20億という事でうわさどおりだった。

では、チャットで騒がれているのは、一体なんなのか。

それは、現状のランキングが発表された事だった。

そしてそれを見て、一番驚いたのは、俺だったかもしれない。

一生「俺が3位？」

テレビでは、このままいくと誰がいくら貰えるとか、予想までしている。

どうやら俺は3億貰えるらしい。

あり得ない。

ちょっと手が震えていた。

ちなみに1位は、多くの人が予想したとおり、ジーク、2位がサイファさんだった。

サイファさんと俺の差はほとんどなく、次いで4位が紫苑さんだったが、俺との差は結構大きかった。

ジークトップの内訳をみると、あらゆるポイントが多く、中でも買い物ポイントが多かった。

どれだけ買ってるんだとも思ったが、なんだかゲームに関係ないポイントが多いのもどうだろうか。

それがなくても1位だけだね。

サイファさんは、レベルの高さと、友好関係、共同作戦ポイントが多かった。

そして俺は、プレイヤキル、PKポイントが多かった。

プレイヤキルにデメリットが設定される前、俺は大量のプレイヤキルを続けた。

今では安易にプレイヤキルできないようになっているので、この3位は今だけのものであると理解できた。

ちなみに、一緒にプレイヤキルをしていたじえにいには、13位だった。

俺達二人は、いままでどおりやれば、確実にこの順位より落ちるのだろうと思った。

一生「でも、10位くらいはキープできるんじゃないかね？三千万くらいは貰えるんじゃないかね？」

俺はちょっと浮かれていた。

今日の戦闘は、なんでもない戦闘のはずだった。

しかし、金が目の前をちらつくというのだろうか、戦闘が雑になってしまっていた。

一生「しまった！」

俺が声を上げた時には、背後をとられていた。

テンダネスに乗っているなので、冷静ならばすぐにカメラを切り替えればいいものを、何故か前方へ進んで距離をとろうとした。

すぐに距離を詰められ、背後から斬りつけられた。

みゆき「どうしたの？今日はなんだか調子悪いね。」

チョビ「そのぶんがんばる。」

2人から通信が入ったが、俺は返事をする余裕がなかった。

今の攻撃で、テンダネスのシステムに不具合が出て、動きが20%落ちていた。

金の事は忘れてやらないと。

やられて目が覚めた。

そこからは、チョコビとのコンビネーションに集中し、上手く敵を倒していった。

致命傷でなくて良かった、強い敵がいなくて良かった。

運があるのかなと思った。

戦闘を終えて、テンダネスをパープルフラワーに帰還させた。

今回の戦闘では、久しぶりにかなりの修理が必要だ。

実際の時間で、1日では直らないように感じる。

こういう場合、リアルマネーをつぎ込めば、即時だったか早くだったか忘れたが、修理する事ができる

。

一瞬リアルマネーをつぎ込みそうになったが、こんな簡単な事をつぎ込んでいてはきりが無い。

三千万円くらい入ると思ったら、少し金銭感覚がくるってきたのかもしれない。

俺は自嘲し自重した。

修理は結局、次の日の戦闘には間に合わなかった。

これだけやられるのは、俺にとっては敗戦と同じだ。

この敗戦を忘れない為に、俺は切られた背中に、傷の形のペイントを入れた。

背中に稲妻を背負っているような感じになったが、格好良いとは思わなかった。

何処かの漫画に出てくる剣士が、背中の傷は恥だと言っていたが、ホントだなと思った。

静かな日々

テナダネスが修理中で使えなかった日から、俺は少し前から計画していた、水陸両用人型モノトーンの宇宙戦を実践していた。

理由は、モノトーンのレベルを上げる為。

しかし水陸両用人型を、宇宙で使うなんて普通あり得ない。

だけど、意外と環境が似ているからか、それともただのゲームだからか、不可能ではなかった。

仕様追加の改造を行ったら意外に早く完成した。

これにウイングでもつければ、どこでも戦える万能人型の完成だ。

と言っても、あのテレビアニメで有名な白い奴は何処でも戦っていたし、ぶっちゃけあれをパクっていると思われるゲームなので、この程度はアリなのだろう。

俺は不思議な感覚で宇宙にでた。

チョビ「なんかうけるw」

みゆき「だねwただのバカみたいw」

アライヴ「うるさいなwま、俺も自分で凄く変な感じだけどなwww」

水陸両用の人型は、宇宙で戦う人型と比べれば、頭が大きくまるい感じだ。

水中での移動は、水の抵抗を避ける為に、頭から進む感じになるからだ。

宇宙でそれをやると、頭突きしているように見えて面白い。

水どころか空気すら無い空間で、頭から進むメリットはなさそうだ。

アライヴ「でも意外と戦えるなw」

みゆき「全然戦えてないから!!!www」

ま、確かに、未だに1機も落とせてはいないけど。

でも、こちらも全くダメージをくらっていない。

瞬発力には劣るけど、トップスピードに乗った時のスピードなら、飛行タイプの人型のような戦い方ができる事がわかった。

あのアニメで表現するなら、モビルアーマーって事ねw

ただし、あのアニメに出てくるこのタイプは、火力があるから強いわけだが、これはただの人型なので、その利点はない。

不利な戦いをする事にかわりはなかった。

俺はなんとか弱っている敵の人型を1機撃破した。

アライヴ「ふ~なんとか1機w」

パイロットはもちろんNPCだろう。

これで対人とか、まだしばらく無理そうだった。

みゆき「私の方が今日は倒してるねw勝ったら初めてかも~」

みゆきちゃんの言うとおり、一緒に出撃して、みゆきちゃんの方が俺より多く墜とすなんて事は、おそらくなかったように思う。

そう言われると、なんとなく悔しくなった。

アライヴ「まだ終わってないー!!」

俺は一番弱そうな人型を探して、突進していった。

結局この日落とせた敵機は、2機だった。

みゆきちゃんに負けて、ちょっと悔しかった。

こんな戦いを続けて、1カ月が過ぎた頃、ようやくレベルが6になっていた。

これで一応、問題なく動かす事ができるレベルだと言われている。

俺クラスのパイロットだと、それでも動作ブランクを感じるが、パソコンの性能などでも、これくらい

の空白を感じる事がある。

ま、一般的には、問題無いレベルって事だ。

これだけ動けば、地球での水中戦も大丈夫だし、一応紫苑さんに報告しておこう。

紫苑さんには、ここ1カ月色々配慮してもらっていた。

紫苑さん本人はそうは言っていないが、比較的弱そうなところを、我が紫陽花部隊にまかせていた。

我が軍もいつの間にか大所帯になっていて、担当を決めて、紫苑さんと行動を共にする事は減っていた

。

ちなみに我が軍の現状を説明すると・・・

紫苑さんの主力部隊、紫陽花さんの紫陽花部隊、スピードスターさんの星部隊、小麗さんの月天が中心のサラ部隊が、攻撃担当。

敵の強さに応じて、単独で攻めたり、行動を共にしたりしている。

本拠地の守りは壁さんが担当。

地上最前線基地の守りは、アブサルトさんだ。

宇宙の守りと管理は、レイズナーさんが仕切り、スクランブル担当として、てけと一部隊とジークさんがいた。

それにしてもこのところ、各軍大きな動きがなくなっていた。

こう着状態と言うか、なんとなく静かと言うか、前回の宇宙の絆の時の、ジーク対連合軍の大戦を思い出す。

俺は少し気になって、久しぶりに2chを除いてみた。

此処の掲示板では、日々情報戦が行われている。

ただの誹謗中傷も多いが、時々真実も存在する。

真実と嘘を見分ける事ができたら、戦いはかなり有利に進められるだろう。

それにしても、改めて見て、嘘が多い事が分かった。

ジークと紫苑が繋がっているだとか、ダイユウサク軍がそろそろジーク軍に前面攻撃を考えているとか、紫苑がサイファに対して、次の同盟終了時に攻撃を仕掛けるだとか、冷静に考えてあり得ないだろう

。

ま、強いチームを敵視させて戦わせたいのだろうけど、サイファさんとは最後まで仲良くする約束だし、裏切られるなんてこれっぽっちも思っていない。

向こうもおそらくそう思っているはずだ。

ダイユウサク軍に関しては、強い人達も多いし、ジーク軍を攻める事もあり得るとは思うが、前作の戦略や、夢さんと話をしてみて、それはあり得ないと思う。

俺は続けて、古いレスから順番に読み進めていった。

このあたりは、査定基準が発表された時か。

「3位アライヴってだれよ？ww」

なんてのもある。

そらそうだな。

なかなか大将以外の名前ってのは出てこない。

実際戦った事のある人なら分かるかもしれないが、まだまだ戦った事の無い軍は沢山ある。

きっと、強い人もいるのだろうな。

少しのワクワクと、かなりの疲れを感じた。

そろそろレスの日付が、ここ数日まできていた。

ようやく読み終えられそうだ。

「アライヴ、水中戦用人型で宇宙で戦っとるぞw落とすなら今だぞww」

もう乗らないけどね。

次は久しぶりに、テンダネスか、キュベレイで出るよ。

そんな事を考えながら、最後のレスまできた。

読み終わった。

特に気になる事は無かったな。

そう思ってブラウザのタブを閉じようとしたが、何かが引っかかった。

あれ？最後のレス。

そのまま見過ごしそうになったが、チラッと見えた文字に、俺はもう一度見直した。

「賞金見て参戦か？美菜斗よ。もう入る余地ねえぞw」

このレスを見た瞬間、間もなくゲームが大きく動き、荒れる予感がした。

美菜斗

最近の俺は、再びテンダネスに乗り、宇宙で暴れまわっていた。

日本最大の掲示板サイト2chで、俺が水陸両用機で、バカみたいに宇宙で戦っている事を書かれたのが、1カ月前。

それからやはりと言うか、わざわざ遠征して戦いをいどんでくる奴がいた。

しかし俺は、もうモノトーンで出撃していない。

乗りなれた最近の主力機、テンダネスに乗っている。

来る敵来る敵、倒しまくっていた。

するといつからか、白い稲妻とか、稲妻アライヴとか、言われるようになっていた。

二つ名は、強い者につけられる勲章みたいなものだから、俺は嬉しかったが、同時に照れくさくもあった。

ちなみに、ジークやサイファさんにも二つ名はあるし、ダイユウサク軍には、二つ名持ちが大勢いた。

俺もようやくその仲間になったのだなと思った。

ところで、俺がそう呼ばれるようになった理由にはもちろん強さもあるが、稲妻ってのは、テンダネスにペイントした背中傷。

雷みたいだとは思ったけれど、まさかこれが二つ名になるとはね。

俺にとっては戒めの為のペイントだったのに。

少し苦笑いした。

俺がテンダネスで出撃するようになったからだろうか。

このところは戦闘も、各軍の動きも活発になってきた気がする。

戦闘時間中は、頻繁に各軍の戦闘結果が表示されているし、静かだった頃が嘘のようだ。

前に見た、あの2chに書いてあった最後のレス。

「賞金見て参戦か？美菜斗よ。もう入る余地ねえぞw」

これを見た時、何かが起こりそうな予感がした。

俺は美菜斗という名前に見覚えがあったから。

俺はすぐにこの名前を、宇宙の絆Ⅱ内で検索した。

確かにいた。

そしておそらく本人に間違いのないと思った。

美菜斗さん。

シミュレーションネットゲームでは、超有名な人。

アクション系ではドリームダストが有名だが、シミュレーションでは美菜斗さんと言われるような人。

でも決して、戦略が凄いとかが、戦術に長けているってわけではない。

一言で言うなら、エンターテイナー。

高い能力値を言うなら、カリスマ。

長くネットゲームをやっているそうで人脈も広いし、人柄も良い。

宇宙の絆Ⅱを始める前まで、俺はこの人と、ブラウザ戦国大戦というネットゲームで、半年ばかり一緒に遊んでいた。

たった半年だったが、シミュレーションが得意ではない俺でも、この人の元だと楽しめた。

とにかく味方からの評判は良い。

ただし、美菜斗さんに負ける人は、すごく面白くない負け方をする。

だから一部、凄く嫌っている人がいるのは、仕方の無いところだろう。

不敗の美菜斗と呼ばれる彼が、美菜斗にだけは手を出すなと言われる彼が、宇宙の絆Ⅱに参戦してきたのだから、きっと何かが起こる気がしていた。

先日までの静けさも相まって、俺はそう確信していたわけだが、いつの間にか忘れるくらい、普通の日

々へと変わっていた。

2chで見た時は、もちろんすぐに紫苑さんに連絡を入れた。

紫苑さんは全く知らなかったようで、気をつけておくって話だった。

それ以後、この話が話題に上る事は無かった。

更に数日が過ぎても何事もなく、紫苑軍は絶好調。

元々戦力は、ジーク軍、サイファ軍に続いて3位だったが、下との差はドンドン広がって、サイファ軍とももう差は無い。

ちなみに戦力ってのは、プレイヤの数と、生産性で判断している。

人型の数や、艦船の数は、だいたい生産性で決まると言っているからね。

2位や3位と言っても、今まではそれ以下ともドングリの背くらべ、五十歩百歩だったが、今では確実に抜け出そうとしていた。

ちなみにダイユウサク軍は相変わらずで、軍の戦力としては、30位前後といったところ。

それでも、トップレベルの軍と差の無いポテンシャルを持っているからね。

一騎当千って言葉があるけれど、ダイユウサク軍のメンバーは本当に、一機が千機の働きをするから。

こう考えると、4軍がやや抜け出しつつある状況だ。

ファーストの時と同様な展開だなと思った。

一生「結局美菜斗さんでも、此処からじゃ何もできないか。」

俺は独り言をつぶやき、PCの電源を切った。

2chのスレに、「そろそろ美菜斗がくるぞw上位の軍は気をつけろよww」と書かれていた事を知るのは、全てが終わってからだった。

前触れ

土曜日の朝、紫苑軍はドタバタしていた。

原因は、紫苑さん宛てに送られてきた、1通のメール。

宇宙の絆IIでは、メールに相当する機能は無かったが、銀河バリューネットの会員として、別の会員にメールを送る事はできる。

以前、ゲームのシステムに組み込む話もあったが、無駄な機能だとして、その話は無くなっていた。

まあそんな話はどうでもいい。

とにかく、問題は送られてきたメールの差出人と、その内容だ。

差出人は美菜斗。

内容は、紫苑軍領域に隣接する曹操軍が、今夜、我々に大攻勢をしかけてくると書かれていた。

狙いは、有人要塞カテーナ。

我が軍領域の後方に位置するこの要塞は、かつての最前線基地であり、後方を守る重要な場所でもある。

普通に今までどおり対応しても、そう簡単に落とされる要塞ではないが、落とされると流石に痛い。

とりあえず曹操軍への対応と、美菜斗さんがこういったメールを送ってきた意図を相談したいが、紫苑さんは「これから会社だから。対応は帰ってから(^0^)」と言い残し去って行った。

土曜日なのに仕事とは、全くついていない。

さて、どうしたものか。

誰かと相談したいが、こんな時間に相談といっても、相談できる人はおそらくいないだろう。

俺はぼんやりとモニターを眺めていた。

それにしても、とうとう美菜斗さんが動いた。

少し嬉しい気持ちもあった。

美菜斗さんと直接話をしてみるか？

いや、俺は戦国大戦の時と名前も違うから、話しかけても分からないだろうし、戦国大戦の時の名前を告げても、覚えてくれているかどうか。

それに通信じゃなく、わざわざIDナンバー宛てにメールを送ってきたわけだから、何か意図があるのかもしれない。

更にどうして、こんな情報を教えてくれたのか。

美菜斗さんの軍はまだまだ小さな軍なのに、現在3位の我が軍に有利な情報を、わざわざ教えてくれるだろうか？

これが、相手がジーク軍だとかなら話は分かる。

強い軍が更に強くなるのを防ぐ為って事だから。

でも、曹操軍が勝った方が、美菜斗軍には有利なはずだ。

だいたいこれは正しい情報なのだろうか。

いや、正しい情報だろう。

美菜斗さんが嘘を言うとは思えない。

美菜斗さんの人徳は知っている。

冷静に考えれば結論は一つ。

曹操軍は今夜、カテーナに大攻勢をかけてくる。

そして現在紫苑軍は、ERROR軍と交戦中だ。

今日も攻める予定だったし、向こうももしかしたら反撃を考えていたかもしれない。

マップ下側はサイファ軍との隣接地帯が多いから安全そうだが、以前戦闘状態だったしゃにや軍との隣接は切れてはいない。

曹操軍、ERROR軍との交戦を知ったら、空き巣狙いにしゃにや軍が攻めてくる事も十分あり得る。

だがこの中で、一番厄介なのは、攻撃箇所、軍の規模、領域の場所、全てで曹操軍が際立っている。ERROR軍も軍全体としては規模が大きい、領域が二つに割れていて、我々と隣接している方は重要視されていない観がある。

俺の考えは固まった。

美菜斗さんの情報を信じ、今日は曹操軍に対応すべきだと。

紫苑さんが来たら、そう伝えようと思った。

18時頃、ようやく紫苑さんがあらわれた。

俺は既に他の人にも意見を話し、概ね同意を得ている。

だから紫苑さんも、そうする事に決定するものだと思っていた。

しかし紫苑さんは、ハッキリと言いつつ。

紫苑「今日もERROR軍領域に進行する！土曜日だし、今日と明日で、こちら側の領域を全部奪うぞ！(^0^)」

どういう事だろうかと思った。

曹操軍は間違いなく攻めてくる。

アライヴ「いやでも、前面にERROR軍、後背に曹操軍、しゃにゃ軍もどう動くかわからないし、此処は曹操軍に全力であたった方が良くないの？」

紫苑「曹操軍は別に怖くない。背後つかれてカテーナとか、シオンまで取られるかもしれないけれど、曹操軍なら簡単に取り返せる！(^-^v)」

紫苑さんは、カテーナも、そして最初の本拠地だったコロニーシオンさえも、取られて良いと考えているのか。

確かに、まともに戦ったら、俺達は確実に勝てる相手だけど、取られないに越したことはないのではないだろうか。

そこまでして、今日ERROR軍を攻める意味はあるのだろうか。

せっかく得た情報を無駄にする事もないようなきもするが。

紫苑「レイズナー、もし曹操軍が攻めてきたら、カテーナ取られても問題ないから、なるべく損害を少なく、敵のダメージは多く、これだけ考えてくれ。」

レイズナー「取られても良いのかよwだったら衛星兵器爆破してやるかw」

紫苑「イイネ！まかせた！(^0^)」

マジでそんな事するのだろうか。

アライヴ「そんな事したら、取り返しても、元に戻すまで時間も金もかかるよ。」

紫苑「俺達は、既に地球に拠点を持っている。多くのコロニーや有人要塞もあるし、生産性は十分足りている。今更この程度の有人要塞を失っても、全く問題なし！(^0^)」

言われてみればそうかもしれない。

俺は愛着ある要塞だったから、失う事が嫌だったただけなのだろうか。

アライヴ「了解！じゃあ地球の人の作戦行動もそのまま？」

紫苑「もちろん！(^0^)壁はガンダーラの守備、アブサルートはサハラの守備を、サラには地球での攻守全ての作戦指揮を頼む。宇宙はイゼルローンを中心に、てけとーとジークが駐留、レイズナーは後方全ての指揮を、前面は俺と紫陽花と星で。しばらくはこの形で大丈夫。」

此処までついてきた紫苑さんだ。

ファーストの頃からずっとやってきたんだ。

紫苑さんを信じよう。

俺はそう思った。

アライヴ「美菜斗さんへの対応は？」

紫苑「無視無視！(^0^)」

紫苑さんらしい。

そう思うと、なんだか安心してきた。

そして、程なくして、時計は19時をさしていた。

この紫苑さんの決定が、全ての人の勝敗を左右するほどの、大きな結果を、いや功績をもたらすとは、この時誰も知る由もなかった。

嵐の中へ

19時を回ったところで、俺達紫苑軍の主力部隊、紫陽花部隊、星部隊は、ERROR軍領域への侵攻を開始した。

とすぐに、レイズナーさんから連絡が入る。

レイズナー「曹操軍、ほぼ全軍が集まってきてるぞ。本当にカテーナは放棄する方向で良いんだろうな？」

紫苑「オッケーオッケー(^0^)」

やはり曹操軍が攻めてくる情報は、嘘ではなかった。

ピンチな状況なのに、美菜斗さんが嘘を言っていなかった事に少し安心した。

紫苑「俺達は、全力でERROR軍を蹴散らすぞ！(^0^)」

アライヴ「了解～」

スピードスター「♪」

紫陽花「頑張ってるねw」

相変わらずの紫陽花さん他人事発言に、少し笑えた。

紫苑軍としては、今までで一番の攻勢を受けようとしていたわけだが、俺はワクワクしていた。

やはり戦いは、強敵がいる方が面白い。

曹操軍が強敵だとは言わないが、結局俺達紫苑軍の敵は、その他全てなのだから。

前方からERROR軍、そして後方から曹操軍、おそらくこのチャンスは逃さないだろうしゃにゃ軍も含めて、全て同じ敵だと考えたら、それは強敵だ。

紫陽花「前方に敵影、人型発進お願いします。」

アライヴ「今日は早いね。もしかしてこっちに攻めてこようとしてた？」

紫苑「曹操軍がこちらに攻めてくる事を知っていたのは、俺達だけではないって事だな。(^-^v)なるほど。

そしていつもよりも戦力が大きい気がする。

ERROR軍と曹操軍が繋がっていても、なんら不思議はない。

アライヴ「アライヴいきまーっすw」

紫陽花「w」

なんだかテンションが上がってきた。

戦闘は、いつもよりも調子が良かった。

アライヴ「5機目！」

チョビ「3き～」

みゆき「まだ1機だよお～泣」

戦況は良かった。

なんとなくだけど、相手は戸惑っているような感じに見えた。

もしかしたら、紫苑軍は今日攻めてこないとでも思っていたのだろうか。

確かに俺が指揮官だったら、きっと曹操軍防衛に動いていたから、ERROR軍を攻める事もなかったけどね。

流石紫苑さんだ。

きっとERROR軍が攻めてくる事も分かっていたのだろうなと思った。

しばらく優位な戦いを続けていると、イゼルローンのでけとーさんから通信が入った。

でけとー「なんだかしゃにゃ軍の動きもおかしいぞwこっちの領域のすぐそばに、ほぼ全軍集めてるんじゃないか？」

思ったとおり、このチャンスを逃しはしないか。

紫苑「オッケーオッケー(^0^)でけとーはイゼルローンだけよろw星、真面目に戦わなくて良いから、

適当に足止めしてきてw」

スピードスター「♪」

これで結局、一番恐れていた状況になったって事か。

曹操軍への対応を、もう少ししっかりしていたら、地球からサラ部隊だけでも引き揚げてきていれば、何処も失わずに済んだかもしれない。

でも今の状況だと、曹操軍としゃにゃ軍には負ける。

ERROR軍に今日勝つ意味はあるのだろうかとも考えたが、楽しいから良いかと気持ちを切り替えて敵を倒しまくった。

戦闘開始から1時間が過ぎた頃、しゃにゃ軍の侵攻も始まった。

曹操軍とレイズナーさんは既に交戦中だ。

我々は戦力を分散されて、一見負けているように見えるが、これが作戦どおりというか、紫苑さんの指示だから問題ないのだろう。

それにしてもERROR軍、今日は本気だ。

この戦力は、ほぼ全ての戦力をこちらに向けているとしか思えない。

だがこれはありがたいかもしれない。

この戦いで勝利すれば、ERROR軍は屠ったも同然だ。

紫苑さんの言っていたとおり、今日明日で、ERROR軍に勝利できる。

と言っても、マップ右上ブロックのERROR軍だけだ。

それでも戦力のほとんどは削れるわけだ。

あれ？という事は、紫苑さんはこの展開をやはり読んでいた？

紫苑さんは流石だなと思ったり、さっきはもっと良い方法があったのではと思ったり、そしてまた凄いなと思ったり、俺も忙しいな。

まあでも、ただ言える事は、俺は紫苑さんを信じて決めている事。

これさえ間違えなければ、なからず優勝争いできると確信した。

更に1時間が過ぎた頃、とうとう曹操軍に、要塞を1つ落とされた。

アライヴ「もう落とされたか・・・」

紫苑「いや、思ったよりレイズナー頑張ってるなwこの調子なら、カテーナは大丈夫かも(^-^)」

俺は落とされるのが早いと思ったけれど、紫苑さんは思ったより遅かったというのか。

これは、良い感じだと思って良いのだよな？

目の前の戦闘も勝っているし、しゃにゃ軍の侵攻にも星さんが対応している。

チラッと美菜斗の名前が頭をよぎった。

何か嫌な予感がした。

そう思った時、情報告知スペースに、美菜斗の文字を見つけた。

「美菜斗軍が、クマクマ軍を吸収。クマクマ軍は消滅した。」

あ、そうか。

この手があったか。

俺は美菜斗さんの台頭を確信した。

美菜斗の狙い

美菜斗軍にクマクマ軍が吸収されたのを皮切りに、次々と弱小軍が美菜斗軍へと吸収されていった。吸収や合併には制限がある。

クライアント側で発表するランキングで、50位以内の軍同士では、合併も吸収もできない。

更に、吸収される側の軍に所属する者は、査定ポイントが大きくマイナスされる。

それは、その後優勝しても、たいして賞金は貰えないほどの、大きなマイナスだ。

優勝しそうな軍に吸収されようとする者を防ぐ為の処置だが、当然吸収される事を良しとしない人が多くなるペナルティだった。

だから、俺の頭の中には、合併や吸収という戦略は端から無かった。

しかし、冷静に考えれば、美菜斗さんらしい戦略だと思う。

ブラウザ戦国大戦の時も、同じような手を使って、一気に勝負を決めていたのだから。

それを知る者なら、この話を持ち掛けられれば、優勝できると思うだろう。

そして優勝すれば、査定で大きくマイナスがあったとしても、多少は賞金を手にできるかもしれないし、なんと言っても優勝だ。

ゲームだから勝ってなんぼだ。

賞金ばかり意識していたが、やはり勝たないとゲームは面白くない。

紫苑「うはwドンドン美菜斗軍がでかくなっていくよ(^0^)」

紫苑さんの言葉に、全体マップを開いてみたら、秒単位で領域が塗り替えられていくのが分かった。

もう凄いといしか言いようがない。

これだけ多くの人を巻き込んだ作戦は、ジークでも無理だろう。

ふとジーク軍の勢力図が気になった。

マップ左下ブロックをみると、ジーク軍領域を、着実に美菜斗軍が取り囲んでいくのが分かる。

そう、美菜斗軍へと塗り替わるのは、もっぱら左下ブロックが多かった。

アライヴ「美菜斗さんの狙いは、もしかしてジーク？」

なんとなく思った事を書いただけだったが、それは的を射た発言だったようだ。

紫苑「おお！間違いない。ナイスアライヴ。これはできるだけ早くERROR軍を殲滅しないと。よろしく！(^0^)」

どうやら紫苑さんは、ERROR軍との決着を早めなければならない何かに気がついたのだろう。

アライヴ「了解w」

俺はマップを閉じて、ERROR軍との戦闘に集中した。

23時を過ぎ、チョコビがネットから落ちた後も、激しい戦闘は続いていた。

チョコビがいなくなると、俺達の戦力はガタ落ちだ。

それでも俺達優位は変わらないが、今までより敵機を墜とすペースが落ちる事は必至だった。

紫苑「曹操軍完全無視でも良かったな。(^0^)」

それは、レイズナーさんや光合成さんも、こちらに回せば良かったと言う事か。

俺は今ままで良い感じだと思うのだけどな。

しかし、ERROR軍を早く倒さないといけない何かがあるのだろう。

紫苑「ん〜どしよ」

紫苑さんは悩んでいるようだった。

すると直後吉報が入る。

スピードスター「じゃにゃ軍撤退していく♪サイファが動いたかな？♪」

星さんから入った通信は、今あった懸念を払拭するものだった。

紫苑「サイファ来たかwよし！星、こっちに戻ってきてくれ！」

スピードスター「♪」

星さんがこっちに戻ってくる。

これで再びペースが上がりそうだ。

なんだかわからないけど、とにかく良かった。

そしてこうしてる間も、美菜斗軍は吸収を繰り返し、どんどん大きくなっていった。

0時を過ぎた頃、美菜斗軍の拡大は、ようやく終わりを迎えていた。

発表されている同盟ランキングでは、既にジーク軍を遥かに追い越して、1位になっていた。

そして、どうやらジーク軍へ大攻勢をかけるべく動き出したと、情報が入ってきていた。

情報発信者は、サイファさん。

サイファさんも、美菜斗さん同様、多くの人達と良い関係を築く事で勝利をものにするプレイヤーだ。

だから今日この事態を、事前に知っていたのかもしれない。

ちなみに、サイファさんのところにも、美菜斗さんからID宛てにメールが届いていたそうだ。

我々に届いたメールと同じような内容で。

実際侵攻してきたようだが、サイファ軍は攻撃してこないと信じて無視したらしい。

するとすぐに撤退を開始したようだ。

撤退の完了を見届けた後、空家になったしゃにゃ軍を攻めてたという話。

しゃにゃ軍が撤退した理由は、やはりサイファ軍の侵攻だったわけだ。

美菜斗さんは今、ジーク軍を攻める。

その際、紫苑軍とサイファ軍を介入させない為に、こういった小細工をしたとすれば、我々は、この戦いに参戦する事こそが、美菜斗さんの計算を狂わせる最大の行為。

だから紫苑さんは、できるだけ早く、ERROR軍と決着をつけたいのだろう。

マップ右上ブロックにあるERROR軍の領域を全て取れば、先ほど美菜斗軍領域になったばかりの場所と隣接できる。

簡単に言えば、ジーク軍を攻める美菜斗軍の背後をつけるって事だ。

美菜斗軍は、ERROR軍を壁にして、しばらく凌ごうとでも思っていたのだろう。

だからもしかしたら、曹操軍をあおって戦闘へとかきたてたのかもしれない。

それでも実際、曹操軍、ERROR軍、しゃにゃ軍が全て全力で攻めてきたら、俺達が負ける事だって可能性としてあつただろうし、そのあおりは良い助言であったとも言えるのか。

サイファ軍も、きっと同様の事態だったのだろうか。

ただ、美菜斗さんに計算違いがあつたとすれば、サイファさんもまた人気の高いプレイヤーであつた事と、紫苑さんを侮っていた事。

それでも、美菜斗さんの大きな優位は揺るがないわけだけどね。

せめて少しでもダメージを与える為に、俺はこの戦局に関係ないERROR軍との戦闘を続けた。

マップ上では、先ほどまであわただしく塗り変わっていた勢力図が、完全に沈黙していた。

絆決戦

時計の針は、朝の6時をさしていた。

流石にぶっ続けで戦闘を続けるのは辛い。

だが、此処で眠るわけにはいかない。

要塞を落として、艦船に戻って移動している間が唯一の休憩タイム。

わずかな時間に食事をして、風呂にも入ったが、寝る事は不可能だった。

寝たら数時間は起きられそうになかったから。

敵も同じだろうと思う事で、なんとか気力を振り絞ってコントローラーを操作していた。

みゆきちゃんは今日予定があるとかで、1時を回ったあたりで早々にネットから落ちていた。

最前線で残っている主力は、紫苑さんのパープルアイズに、じえにいとハルヒくんと美夏さん。

紫陽花さんのパープルフラワーに俺。

スピードスターに暗黒天国さんだけだった。

こういった、朝まで戦闘するのは何度か経験しているが、準備もせず一睡もしないのは初めてかもしれない。

実際やってみると、かなりグダグダになる事がわかった。

曹操軍の侵攻も勢いを無くし、2つ目の要塞を落とされたところで、動きは止まっている。

動きがあるのは、俺達がいる戦場と、しゃにや軍の領域が、徐々にサイファ軍へと変わっていきただけだった。

それにしてもおかしいのは、ジーク軍と美菜斗軍との戦闘だ。

サイファさんからの情報だと、確かに今も戦闘は続いているとの事だ。

だけど、未だに1つも拠点の持ち主が変わる事が無かった。

それはすなわち、お互い要塞を占領する事を考えていないって事だろう。

美菜斗さんのやり方を考えれば、おそらくジーク狙いだと確信できる。

そしてジークがもしやられれば、ジークの性格を考えると、軍を消滅する事も考えられる。

それで決着がついてしまう。

この戦いは、美菜斗さんがジークを倒せるか倒せないかで勝敗がきまりそうだ。

いや、この状況をつくっただけで、既に美菜斗さんがこの週末の勝利者である事は、誰の目にもあきらかである。

だからせめて、完全勝利だけは、なんとしても阻止しなければならなかった。

結果ジークを助ける事になったとしても、それは必要な事だと思った。

8時になろうかという時間、チョコビがあらわれた。

少しの間だけならやれるというので、俺は一旦チョコビと代わって寝る事にした。

紫苑さんと紫陽花さんは、指揮をどちらかに任せて交代で寝ているようだ。

星さんは、寝なくても大丈夫って事でフル活動。

それに付き合っ、暗黒天国さんも頑張っていた。

そして11時を過ぎた頃、ようやくERROR軍の最後の要塞を落とす事に成功した。

ちなみに俺が寝ている間だった。

すぐにチョコビと交代して、一旦イゼルローンに戻る。

これからが本番。

美菜斗軍との戦闘の前に、補給と休息の時間がとられた。

補給は本来、あまり必要がない。

土曜日から日曜日の戦闘をフルに戦えば、艦船でも流石に燃料は尽きるが、ずっと戦い続けるなんて事はまずあり得ないから。

時々ミサイル兵器と言うか、物理兵器が底をうつ事もあるが、そもそもミサイル兵器の利点はそれほど多くはなく、無ければ無いでそれほど困らない。

物理兵器の利点は、追尾ミサイルや、弾幕に必要なくらいで、スピードも遅く目視で十分回避できるので、デメリットの方が多い。

後は、バリア対策くらいか。

実はこのゲームにはバリアというシステムがある。

艦船でピンポイントバリアを使うのが一般的だが、艦船、人型共に、全方位バリアが存在する。

ただ、全方位バリアをはると、ビーム兵器が使えなくなるし、自分の意思で動くことも不可能になる。コストもバカみたいに高いし、使う人はごくわずかだった。

とはいえ、バリアを使った戦術を得意とする人もいるし、バリアを張られるとビーム兵器の多くがほぼ無力化されるので、保険程度の物理兵器を搭載する人が多かった。

紫苑「一応この後の戦いは遠征もあり得る。アライヴはこっちに乗って、紫陽花にはパープルリリーで、後方支援と補給艦的役割を果たしてもらおう。」

紫陽花さんの第二の艦船パープルリリーは、とにかく火力重視の鈍重な艦船である。

あらゆる兵器を大量に搭載しているが、もちろんこんなただ兵器を搭載しただけの艦では、まともな戦いはできない。

では何故こんな艦船を造ったのかと言えば、補給の為である。

この宇宙の絆IIでは、補給艦は存在しない。

だけど、別の艦船の物資を移してくる事は可能だ。

そこで補給艦的役割の艦船を、こんな形で造っているというわけ。

アライヴ「遠征になるの？美菜斗さんなら、守りも考えていると思うけど。」

俺は一応の疑問に対して、答えを求めた。

これから攻撃をしかけるのは、美菜斗軍の要塞であり、領域である。

その要塞や領域は、昨日から続く戦闘タイム内に手に入れたものだ。

となると、もともとその要塞を管理していた軍のプレイヤーの、艦船や人型が残されたままである可能性が高い。

美菜斗さんはこういったところにも配慮する人だから、みすみすそれを渡してしまうかもしれない作戦はとらないだろう。

ならば守りも考えているはずで、我々が侵攻して行ったら、そこでの戦いになる可能性が高い。

たとえ守りがいなくても、要塞を落として行くには時間もかかるし、遠征をする可能性は限りなく0なような気がした。

紫苑「おそらく守りは無い。曹操軍がこちらに攻めてくる事を伝えてきたのは、守りができないから、他に気をそらせる為でしょ。(^^)v」

なるほど、確かに紫苑さんの言うとおりで。

対策はしていた。

おそらくこういった方法で、多くの軍に対して、今回の対ジーク戦に介入してこないように、なんらかの手をうっていたに違いない。

俺の勘だけど、その対策にのらなかつたのが、紫苑軍とサイファ軍だったってわけだ。

今回の作戦は、宇宙の絆IIでは非常識な戦略だが、美菜斗さんはシミュレーションゲームの王道的戦略を、素直に持ちこんだに過ぎない。

でもこれだけやられてしまっている。

なんとなく、宇宙の絆IIの古くからのプレイヤーがバカにされている感じだ。

宇宙の絆IIのゲーマーと、美菜斗さんの対決のような気もした。

紫苑「よし、そろそろ時間だ。勝つぞ！(^0^)」

12時ちょうど、紫苑さんの命令を受けて、俺達は出発した。

宇宙の彼方へ

後方にパープルリリーを取り残すような感じで、俺達は美菜斗軍領域へと入っていた。

パープルリリーは航行速度がバカ遅いので、一緒に行動はできない。

こんな時に要塞戦艦があればと思うが、まだ見た事もないものを求めるのもおかしな話だ。

公式に発表されている説明でしか、その機能を知らないのだから。

要塞戦艦は、要塞の機能を持った巨大な戦艦らしい。

細かくその機能を話すと長くなるので割愛するが、要するに拠点を色々なところに移動して戦える便利なものと言えるだろう。

現在1隻はジーク軍、1隻は美菜斗軍、もう1隻はランキング12位のまさくん軍が所持している。

今行われているであろうジーク軍と美菜斗軍の戦いでも、きっと活躍しているに違いない。

さて、その美菜斗軍領域に侵攻しているわけだが、美菜斗軍の影も形も無い。

既に有人要塞ネコミミを視界にとらえられる距離にいるのに、防衛行動がないところを見ると、これは無人である可能性が高いだろう。

一応、要塞の防衛機能による攻撃がもうすぐ始まるだろうが、無人なら攻略に1時間もかからない。

アライブ「とりあえず出ますね。」

紫苑「そうだな。速攻片付けてくれ(^0^)」

アライブ「了解！」

美夏「りょーかい」

ハルヒ「はいw」

じえにい「らくしょう〜」

それぞれに返事をして出撃すると、要塞へと近づいてゆく。

射程距離に入ると攻撃がとんでくるが、敵の人型もいない状況では、楽に回避しながらネコミミに接近できた。

アライブ「本当に誰もいないね。」

美夏「これなら俺一人で制圧できるなw」

確かに要塞攻略は、敵がいなければ、時間さえかければ攻略が可能だ。

ただ、防御力が高ければ高いほど、時間だけがかかる。

一応言っておくが、やられる可能性はゼロではない。

能力の低いパイロットや、俺でも油断していたらやられる事もある。

NPCの並のパイロットなら、30機ほど人型が必要かもしれない。

紫苑「じゃ、美夏一人でやってくれるか(^0^)」

美夏さんは、要塞攻略の得意な人だ。

というか、要塞攻略ばかりやっていて、いつの間にか得意になっていた感じ。

だから美夏さんなら確実だろう。

美夏「お前らどうすんの？」

美夏さんの返事に、確かにそう言えばそうだと思った。

俺達もただ黙って見ても仕方が無い。

紫苑「落としたら、後からくる紫陽花に拾ってもらって(^0^)俺達は、ジークを助けに行く(^-^v)」

一生「えっ？」

俺は紫苑さんの発言に、一瞬目を疑った。

結果的にジークを助ける事になるとは思っていたが、直接ジークを助けに行くというのだ。

そしてそれは、全面对決している戦場に向かうという事。

危険だし、遠いし、そこまでする必要のあるのだろうか。

パープルリリーを発進させたのは、最初からジーク軍領域まで行くつもりだったのだろう。

最初に、一応このネコミミを攻めたのは、確認の為か、それとも使える有人要塞だからか。きっと両方か。

紫苑「アライブ早く戻ってこい(^0^)おいてくぞ！」

一瞬ボーっとしてしまっていた。

俺は「すみません」と一言いれて、急いでパープルアイズに帰還した。

俺が帰還するとすぐに、パープルアイズは発進した。

次いでスピードスターや部隊所属艦船も後に続いた。

紫苑さんはどうやら、少しの時間も惜しいようだ。

だが、遠征するとなると、しばらく俺は暇になりそうだ。

一応PC前の待機は必要だし、アライブはテンダネスに乗せたまま。

やる事もないので、暇つぶしに、俺は現在の状況を確認する為、宇宙の勢力マップを開いた。

まだ1日もたっていないのに、昨日とは大きく違っている。

マップ上では分からないが、このジーク領域内で、激しい戦闘が行われているのだろう。

それとももしかしたら、ジークが反撃して、美菜斗軍領域に侵攻している事もあるのだろうか。

そんな事を考えていたら、今思っていた考えをうち砕くような変化が始まった。

ジーク領域が、ドンドン別の軍の領域へと変わっていく。

奪っているのは、美菜斗軍ではない。

ジーク軍に隣接している軍や、その近隣の軍だ。

俺は早速、紫苑さんに通信を入れる。

アライブ「ジーク領域がどんどん奪われてるよ。奪ってるのはよく知らない軍ばかり。」

そう、特に今まで目立った活躍をしてきた軍ではない。

どちらかと言うと平和主義の軍で、戦わずに終盤までマッタリプレイを望んでいる軍。

賞金を貰う事や、勝つ事を目的としていない、ゲームを内わで楽しむ人達。

強い人型をつくって、模擬戦闘を中心に楽しむ人もいる。

そんな人の中には、もちろん隠れた名プレイヤーもいるわけだが、今はそんな事はどうでもいい。

紫苑「美菜斗はこんな軍まで動かすのかw(^0^)」

相変わらずの笑顔マークだが、なんとなく凄く驚いている気がした。

いや、俺も驚いたから。

まあ間違いなく、美菜斗さんが声をかけて、攻めさせているのだと思う。

ブラウザ戦国大戦では味方だったけれど、協力関係にある軍を、味方ですら全て把握する事はできなかった。

底知れないコネクションだ。

美菜斗さんの戦略は一環している。

とにかく多くの人と仲良くなり、仲間を増やし、都合が良いように攻めてもらったり、守ってもらったり。

そして必ず、WinWinの関係を築く。

戦い方や兵器に関しては、とにかく強いものをシンプルに使う。

多くの人を集めたり、強い武器を作ったり、コレを戦略と言うなら、美菜斗さんは凄い戦略家だ。

ジーク以上だろう。

でも、やっている事は、ネットゲームとしてはごく普通の事だ。

だから美菜斗さんを評価しない人も多いけど、だからこそ俺は凄いと思う。

当たり前な事を、当たり前にする事、実はこれは難しい事だから。

1時間後、ジーク軍領域だった場所は、色々な軍が混在する場所へと変わっていた。

その変化によって、今ジークがいるであろう場所を示しているように、一本の道を浮き上がらせていた。

。

美菜斗軍領域から、ジーク軍本拠地、イスカンダルへ。

運命を変える時間

ジークはおそらく、本拠地近くにいる。

宇宙の全体マップを見ていたら、まず間違いなくそう見えた。

場所は、我が紫苑軍の領域がある右上ブロックではなく、左下ブロックの左下隅。

コロニーシオンとは真逆の位置だ。

我々からみれば、正に宇宙の彼方。

日曜日でもなければ、こんなところまで行こうなんて思えない。

ただ高速で移動するだけでも、イゼルローンから2時間はかかりそうだ。

索敵し、警戒しながら進む今は、その倍はみておいた方が良くかもしれない。

面倒なところを本拠地にしてくれたものだ。

ちなみに、本拠地と言っても、システム上で決められているわけでもなければ、此処を落とされたら負けるわけでもない。

ただ、予備の艦船や人型を格納していたり、生産性の要だったりするので、他より重要な場所であるっただけだ。

その本拠地へ向けて進む俺達。

退屈だが、緊張感のある時間が静かに流れて行く。

そんな静けさの中、時々チョコビから通信が入る。

チョコビ「だいじょうぶ？まだへいき？」

親の目を盗んでは、状況を気にして通信をいれてくる。

一応チョコビのキャラと人型ガードナーは、スピードスターに乗せてはいる。

昼間は戦えないが、今夜参戦するであろう、かつてないほどの大規模な戦闘では、きっとチョコビの力が必要になる。

俺達二人のコンビなら、人型で敵など存在しないはずだ。

アライヴ「うん、大丈夫だよwこのままいくと16時から17時くらいになるんじゃないかな。」

時計を見ると、14時を回ったところだ。

チョコビ「そっか！17時にはさんせんでできるようにがんばよ！！」

アライヴ「無理しないでねwもし辞めるとか言われたら、200万円貰えるかもって言えば、もしかしたら許してくるかもしれないよw」

チョコビが無理をして、ゲーム参加できなくなったら、紫苑軍には大きな痛手だ。

でもさ、親も大金が手に入るかもしれないと分かれば、許してくれそうな気もするんだけどねえ。

確か前に発表された賞金予想だと、チョコビは200万円くらいあった気がする。

そしてきっと俺とは逆に、その後増えていると思われる。

チョコビ「あ、ママだ！じゃ！！」

一言残して、チョコビは又ネットから落ちていった。

この子が完全体だったら、と、前にも思った事だな。

できる子ってのは、何故かこういうハンデを持つ事が多いんだよね、きっと。

あのサッカーアニメの貴公子も、心臓病を抱えて15分しか試合に出れなかったし。

そんな事を考えている自分が、自分自身おかしかった。

それにしても眠い。

3時間程度しか寝ていないし、ずっとPC前で待機だ。

そろそろ戦闘もしないと眠ってしまいそうだ。

ヤバイ。

瞼が下がる。

ちょっとくらい寝ても大丈夫かな。

敵襲があったら、きっと警報音が知らせてくれるだろう。

俺は睡魔という名の誘惑に負けようとしていた。

とその時、まさに警報音が敵襲を知らせてくれた。

一生「うおっ！」

俺はビックリして、椅子から落ちそうになった。

モニタを見ると、既に紫苑さんから命令が入っていた。

紫苑「美夏！はいねえ、じえにい、ハルヒ、アライヴ、その他もろもろ、発進よろしく(^0^)」

じえにい「きたあ〜」

ハルヒ「眠りそうだったw」

俺も少し遅れて通信を入れる。

アライヴ「俺は寝てたよw」

紫苑「w」

だけど、もう目が覚めた。

俺は発進した。

発進したはいいが、肝心の敵はどここの軍なのか。

当然美菜斗さんの軍だと思っていた。

なんせ此処はまだ、美菜斗軍の領域だったからだ。

だけど敵は、聞いた事もない軍だった。

流石に、美菜斗軍領内を突き進んでいたわけで、俺達がイスカンドルを目指して動いている事は、美菜斗さんにもバレバレのはずだ。

それでも美菜斗さんは手が離せない。

そこで仲良くしてる軍に足止めを依頼したと考えるのが普通だろう。

それにしてもいったい、美菜斗グループはどれだけいるのだろうか。

もしかしたら、紫苑軍とサイファ軍とジーク軍以外全てがそうなのではと思ってしまう。

ま、それならそれでも良いけどね。

何故だかわからないけど、俺は嬉しかった。

戦いは意外に手こずった。

普段戦闘をしていない聞いた事もないような軍は、意外と強かったりする。

それはセオリー通りにいかないからだ。

こう打って出たら、こう返してくるって当たり前の事が、当たり前ではなくなる。

麻雀なんかで、弱い人が1人入ると、強い人は逆に手こずるってのと似ているかもしれない。

とにかく戦っていて、面倒くさい相手だった。

それでも実力の差は明らかで、なんとか殲滅できた。

紫苑「早くもどれー！直後にパープルリリーが追い付いてきてるぞー(^0^)」

なんとまあ、かなり先を行っていたと思っていたけれど、それほどでもなかったようだ。

実際、こっちは索敵しながら慎重に進んでいるわけで、その後を全力で追いかけてくれば、いくら遅い艦船でもそれなりにはついてこれるって事か。

帰還したのは俺が最後だった。

一瞬パープルフラワーを探して遅れてしまった。

しかしこの遅れが、この後絶妙なタイミングを生む事になるとは、俺は思いもしなかった。

セオリー

俺達はようやくジーク軍の領域に入っていた。

此処も美菜斗軍の領域と同様、どこもかしこも無人の空域。

この意味するところは、総力戦で対決しているって事だろう。

そこに俺達が入って行って、ジークに加担する。

もし、ジークが勝っていたらどうするのだろう。

ふと思った。

いくら戦力差があると言っても、ジーク軍にはあの四天王がいるんだ。

そう簡単にはやられないはず。

群青さん、元気だろうか。

もしかしたら今日、一緒に戦う事もあるのだろうか。

少しドキドキしてきた。

時間は16時を過ぎていた。

予定ではもう間もなく到着のはずだったが、戦闘で足止めされていたので、1時間近く遅くなりそうだ。

17時頃かな。

17時にチョビが戻ってくると言っていたが、果たして戻ってこれるだろうか。

とにかく、確実に戻ってこれる時間は、19時だ。

いつもは18時頃には顔を出してるから、それくらいには戻ってくるかな。

そんな事を考えていたら、時計の長針は、真下をさしていた。

16時半。

イスカングルまであと30分くらいか。

いよいよ決戦だ。

此処から先は食事もトイレも行けないかもしれない。

食事はさっき、パンを食べたので24時まではおつだろう。

トイレは今のうちに行っておいた方がいい。

アライヴ「ちょっとトイレw今のうちに行っておかないとねw」

紫苑「行ってら〜(^0^)」

紫苑さんの返事を確認して、俺はトイレに行った。

サクッと行って、サクッと済ませ、サクッと俺は戻ってきた。

特に慌てて行ったわけでもない。

きっと何事もないだろうから。

そう思って戻ってきたのだが、俺は画面を見てビックリした。

美菜斗軍の大艦隊が、索敵画面に映しだされていた。

紫苑「どうやらこっちにはまだ気がついてないようだな(^0^)」

紫苑さんの通信に何人かが返事を返していた。

ハルヒ「ジーク軍と戦闘中みたいですね。」

じえにい「あのかずう〜はんばないい〜」

暗黒天国「背後とれたし、奇襲するべwでもまさか、有人要塞阿蘇山で迎え撃っていたとはね。当たり前と言えば当たり前か。」

スピードスター「コロニーじゃ戦いにくい♪」

俺の思った事は、皆が代弁してくれていた。

そう、まずは数が凄い。

艦船がこれだけ集まるなんて、前作ファーストの頃のような艦隊戦でもしようと言うのか。

そしてどうやら美菜斗軍は、ジーク軍と交戦中らしい。
だからか、背後の索敵を怠っていたようで、こちらに気づく様子も無く、何か動きがあるわけでもない。

奇襲をすれば成功するかもしれない。

それにしても、戦い方はシンプルというか、織田の鉄砲隊のようだ。

艦船を3グループに分けて、補給しつつ攻撃しているのだろうか。

詳細はまだわからないが、そのような戦術に見えた。

紫苑「では星、暗黒天国いつものかましてくれ(^0^)」

なんにしても今がチャンス。

紫苑さんは迷わず、奇襲を指示した。

まずは俺達の攻撃パターンのひとつで、相手に先制パンチを食らわず。

星さんの艦船、スピードスターに、動きは重いが火力は最強の、暗黒天国さんの人型ボスを乗せて突進する。

スピード最強のスピードスターにボスを乗せる事で、火力のある高速戦艦の出来上がりだ。

少ししたところでどうやら相手も気がついたようだが、今更遅い。

紫苑「アライヴ達も、出撃よろw(^0^)」

じえにい「もういってるよお〜」

ハルヒ「はいw」

アライヴ「俺も今出るところ！」

それぞれに返事を返して出撃し、星さんの後を追った。

先制攻撃は成功した。

敵はかなり乱れていた。

それでも数が多いわけで、すぐに体勢を整えてくる。

どうやら対応策は最初から用意してあったようで、ジーク軍への攻撃と、こちらへの攻撃、そして補給グループに分けて、ローテーションして対応し攻撃してきた。

大量の艦船が、一斉に攻撃してくると、俺達は近づくどころか、攻撃をかわすので精いっぱいになった。

向こうはただ、大量の艦船で、単純な攻撃を繰り返しているだけ。

こっちはコントローラーの操作に必死で、息つく間もない。

完全な物量作戦だ。

弾切れまで頑張ればとか、一瞬甘い期待ももったが、初めて見る要塞戦艦がそれをうち砕く。

一生「バカでかい・・・」

きっと今日の24時までは補給できるように、物資を積んである事は確実だ。

いずれ俺が操作ミスすれば、そこでジエンドって事かよ。

それにしても、敵の人型が見えないのは助かった。

いやこの作戦は、人型がいては、味方も関係なく攻撃してしまう。

最初から人型なんて使わない作戦なんだ。

要塞内にジークがいる場合は人型も出すのだろうが、今はまだ敵戦力を削ぎ落す時間なのだろう。

それにしてもなんて作戦だ。

人型で戦うのがセオリーのこのゲームで、艦隊戦を繰り広げるなんて。

美菜斗さんらしいと思った。

人型よりも、艦船の方が火力あるもんな。

より強いものを使うのもセオリー。

それを素直に実行する、それが美菜斗さんだ。

でも、このまま人型をないがしろにされては面白くない。

絶対、どこか隙をついてなんとかしてやる。

そう決意して、俺は我慢比べを続けた。

チョコビ！完全体！

ただ敵の攻撃をかわす事を繰り返し、20分ほど経っただろうか。

俺は手がしびれてきていた。

本当に息つく間もないとは、こんな状態を言うのだろう。

人型同士の対戦なら、1機倒したところで息をついたり、攻撃にも間がある。

しかし無数に飛んでくるミサイルとビームは、それを許さない。

じえには大丈夫だろうか？ハルヒくんは？

確認しようにも、チャットする余裕は全くない。

一応スカエポはいつでも使えるようにしているが、連絡が無いって事は、なんとかやっているのだろう。

ハルヒくんは最近、逃げるのだけは上手くなったもんな。

言い方が悪かった。

よく言えば、敵の攻撃をかわす事にかけては、右に出る者少数w

タイプとしては、カズミンに似ているかもしれない。

それにしもヤバイ。

手がしびれてきて、気力も衰えてきた気がする。

いかん。

気合入れないと。

俺は自分の体勢を立て直そうと、椅子に座りなおそうとした。

その時、思わぬ事がおきてしまった。

不用意に動いたからか、俺はコントローラーを落としてしまった。

一生「しまった！」

すぐにコントローラーを拾ったが、敵の大量の攻撃が、テンダネスに向かってきていた。

駄目だ、墜とされる。

それでも必死にかわそうとする。

無理か。

諦めかけた時、俺の前にチョコビの機体、ガードナーがあらわれた。

一生「チョコビ！」

俺は思わず声をあげた。

聞こえるわけもないが、俺は「ありがとう！」と言った。

チョコビ「だいじょうぶ？おまたせ～」

チョコビは意外と余裕で、通信してきた。

そうか、盾か。

チョコビの盾は強力で、前方からの攻撃をほぼ完全にシャットアウトできる。

盾なんて動きが遅くなるし、戦闘の後のメンテナンスも必要だから、いらぬものだと思っていた。

だけど地球での要塞戦の時も、今回も、ギリギリのところまで助けてくれたのは、チョコビの盾だった。

チョコビとコンビを組んでいて、本当に良かったと思った。

そして、美菜斗軍領域での戦闘で、俺の帰還が5秒遅れたのを思い出し、その5秒でチョコビが間に合ってくれたのだから、あの時の自分にも感謝した。

一生「ありがとう。よし、これから反撃だ！」

チョコビの盾のおかげで、俺も余裕がでてきた。

チャットも可能な状態。

行ける！

チョコビ「そうそう、お母さんにしょうきん200万円もらえそうって言ったら、ゲームやっていいこ

とになっちゃったw」

一生「えっ!？」

こんな時に話すのもどうかとは思ったが、これはもしかして、チョコビが完全体になったという事だ！
そう考えると、俺はにやける顔を元に戻せなかった。

アライヴ「さて、話は戦いが終わってからだw行くよw」

チョコビ「らじゃw」

チョコビがライフルで敵の艦船を狙い撃つ。

俺はチョコビが取りこぼした、敵からの攻撃をフォローする。

いつもの俺達の戦い方だ。

流石にこの状況でフェネルは使えないが、この状態だと負ける気がしない。

チョコビのライフルは、1隻、また1隻と、敵艦船を落としていった。

一気に戦況は変わった。

小学生盾使い恐るべしだ。

いや、あれからもう1年以上経っているかな。

だったらもう中学生か。

ずっとゲームばかりしているから、時間の流れがわからない。

たぶんもう中学生だろう。

俺の最高のパートナーが中学生ってどうよ？と思わなくもないが、ゲームに年齢は関係ない。

リアルじゃ、年功序列だとか色々五月蠅くて、人づきあいが面倒くさいけど、ゲームって良いなと思った。

気がつくと、じえにいもこちらにやってきていた。

じえにい「わたしもお～よせてw」

アライヴ「いえいw」

元はじえにいとコンビを組んでいたんだよな。

この子もまだ中学生か。

俺って、子供と相性が良いのかな。

じえにいが来た事で、更に艦船への攻撃は勢いを増していた。

チョコビのライフルより、じえにいのライフルの方が、威力が格段に上だ。

もう3人で無双状態だった。

ただビームとミサイルを撃ってるだけの艦船など敵ではない。

でも、この無双状態は長くは続かなかった。

前方の艦船が全て、青く輝いていた。

全方位バリアだった。

ビーム兵器が通用しない。

俺達は再び、打つ手を失った。

カウントダウン

全方位バリアに、俺達は打つ手を失っていた。

今までよりも断然攻撃はかわしやすくなったが、持っている武器全てが、敵に通用しない。

バリアは、ビーム兵器のほぼ全てを無力化する。

ビームソードなら、多少のダメージは与えられるが、艦船にちまちまダメージを与えても、逆にそこでやられるリスクの方が高い。

じえにいのライフルならもしかしたらと思ったけれど、雀の涙程度で意味がなかった。

暗黒天国さんのボスにミサイル兵器はあったが、狙い撃つタイプではないし、接近できないようでは簡単に迎撃された。

ミサイル兵器なんて無駄だと思っていたけれど、こうなってくるとミサイル兵器を持つ事も考えなければならぬか。

とりあえず、今はそんな事を考えている場合ではなかった。

お互い打つ手の無い状態は、むしろ美菜斗軍に好都合。

この間に、ジークを倒す為に、全力を尽くせるだろう。

早くなんとかしなければならなかった。

こちらが打つ手がないと見るや、バリアを解いて、再び全力攻撃をしてくる。

再びチョコビの元に集まると、バリアを張られる、こんな事を繰り返していた。

しばらくこう着状態を続けていると、ようやく紫陽花さんのパープルリリーが後方に到着した。

紫苑「アライヴ、一度リリーに撤退して(^0^)その後艦船も参戦する！」

アライヴ「了解！」

パープルリリーが到着したって事は、艦船への兵器補給が可能になったわけだが、ミサイルの撃ち合いができるようになったところで、数に差がありすぎる。

とにかく命令に従って、パープルリリーに帰還だ。

俺は一旦戦場を離れた。

パープルリリーに着艦すると、紫陽花さんが通信してきた。

紫陽花「どれがいい？」

一瞬言ってる意味が分からなかったが、すぐに兵器リストが送られてきた。

紫苑さんからも通信が入る。

紫苑「どれでもいいから、近距離からぶち込めないか？」

リストには、バズーカー、ミサイルランチャー、グレネード、他にも通常のソードなんかもあった。

バズーカーもミサイルランチャーもテンダネスには重すぎる。

ソードはあつかえなくはないかもしれないが、パワー不足で大きなダメージは求められない。

となると、グレネードしかない。

俺はグレネードを選んだ。

早速装備をつけると、俺は再び宇宙にでた。

少し動きが鈍い気がするが、そう大したステオチはないだろう。

チョコビに協力してもらい、なるべく敵艦に近づき、グレネードをぶつける作戦だ。

紫苑さんのパープルアイズやスピードスターも、ビームとミサイルを撃ちまくって、援護してくれる。

パープルリリーは、長距離砲を装備した高コストの艦船なので、敵の射程距離の外から、ちまちまミサイルを撃っていた。

そのほぼ全てが迎撃されていたが、そちらに気がいけば、こっちが手薄になる。

俺はなんとか接近し、グレネードをぶつけまくった。

地味な攻撃だけど、停滞していた戦況が、ほんの少しだけ動き出した。

敵を1隻落としては、パープルリリーに戻ってグレネードを補充する戦いでは、なかなか状況を変える事は出来なかった。

停滞しているよりはマシだが、こうしてる間にも、ジークがやられるかもしれない。

そうすると、今度はこちらに全力で攻撃してくるだろう。

今、俺達とジークは、運命共同体になってしまったのかもしれない。

少なくとも、逃げなければならぬ状況になれば、パープルリリーはやられるだろう。

逃げようにも、この艦だけは逃げられるスピードがない。

懸念は、徐々に現実へと動いていた。

美菜斗軍の動きが変わってきた。

全ての艦船が、どうやらこちらに攻撃対象を変えようとしている。

ジークがやられたのか？そう思ったが、どうやらあちらには人型を発進させているようだ。

最終段階に入ろうとしている。

群青さんは無事だろうか。

これは負けたなと思った。

ジーク軍を攻撃していた艦船が、こちらに向かってきている。

そしてローテーションで補給中だった艦船もこちらに集まってきているように見える。

紫苑「そろそろ潮時か。残念。」

紫苑さんがそう通信してきた直後、我々の背後に沢山の機影をレーダーが映し出した。

サイファさんだった。

そしてすぐに、サイファさんが、我が軍上層部のメンバー特定通信に、通信の許可を求めてきた。

紫苑さんがすぐに回線を開く。

サイファ「お待たせ！しゃにゃ軍に手こずりました。えっと、とにかく、我が艦船の前、あけてください。アレいきますw」

紫苑「まってました！(^0^)」

アレとはもちろん、波動砲だ。

負けたと思った戦いに、少しだけ光が見えてきた。

サイファさんの艦船、補給できないじゃまいか！が、惰性でこちらに向かいつつ、波動砲の充填をしている。

その先は、今敵艦船が集まってきている場所。

このチャンスを逃したら、敵のフォーメーションが完成して、今後波動砲に大きな戦果は求められないだろう。

敵のフォーメーションは、縦横に平面に艦船を並べるのだから、波動砲で倒せるのはごく一部になるからだ。

この最初の一発に、今後がかかっていると言えた。

俺はこの一発の重要性を考え、通信を入れる。

アライヴ「発射までのタイムを教えてください！」

俺はそれだけ通信を入れると、できるだけ戦場にとどまった。

何かあると思わせてはいけない。

そしてギリギリまで、敵を集める。

サイファ「後50秒！」

すぐに時計を確認。

そして目標退避時間を算出。

前に波動砲を見た時の事を思い出し計算すれば、このテンダネスなら退避に20秒ちょっと。

通信のタイムブランクを加味して25秒、保険に2秒入れて、残り27秒前まで中心にいる。

俺はそう決めて、戦場に残った。

23秒が過ぎるのはあっという間だった。

俺は波動砲の射線上から退避する。

しかし、敵の攻撃がそれを阻む。

しまった！敵の妨害を計算に入れていなかった。

かわすだけでも大変な状況で、まっすぐ逃げられないのは当然じゃないか。

多少のダメージは覚悟して、突き進むしかない。

だけど敵のビーム砲による攻撃が止まった。

紫苑「はやく(^0^)」

どうやら紫苑さんが、ビーム砲でけん制し、敵艦船にバリアを使わせているようだ。

ミサイルだけなら、逃げ切れる。

俺は、全てのグレネードを投げつけ、弾幕にしながら突き進んだ。

そしてなんとかギリギリ、波動砲の射線上から退避する事ができた。

直後、俺のすぐ後ろを、光の柱が敵艦船の集まる場所へと伸びていった。

今結ばれる絆

サイファさんの艦船、補給できないじゃまいか！から放たれた波動砲は、敵艦船の多くを破壊した。流石にバリアしていた艦船を完全破壊する事は出来なかったが、戦闘不能状態にはなっていた。この様子だと、破壊された艦船のプレイヤは、脱出すらできなかつたろう。ちなみにプレイヤキル、PKのペナルティは、人型でのみの適用である。要塞を占拠する事と、艦船の破壊が戦闘の目的なのに、それができなくなってしまうから当然だ。とにかく、状況を一変とまではいかなかったが、まだなんとか戦える最低限の戦果は得られたようだ。俺達は再び、我慢比べの戦いを続ける事となった。

サイファさんから、作戦の提案があった。

次の波動砲で、敵の壁に穴をあけ、そこを突破し、敵の背後を突く、又はジークを助けに行くってものだった。

サイファさんは、何故だかジークを助ける事にノリノリだ。

前作からのライバルで、助けてやったらどんな顔をするのか見てみたい、だそうさ。

ま、ネットだから顔なんて見えないわけだが、そこは何を意味しているのか察して欲しい。

俺達はその作戦を採用し、順番に補給を行っていた。

じえにい、ハルヒくん、暗黒天国さん、そして紫苑さんのパープルアイズ、スピードスターも万全にした。

最後はチョコビ。

チョコビは、現在のこう着状態を維持している要だ。

もしかしたら、チョコビが補給に行ったタイミングで、敵が攻撃を強めてくるかもしれない。

そこで一気に艦船を前にだしてくるかもしれない。

美菜斗さんにしてみれば、現状維持で十分だから、リスクを負う戦術はとらないと思うけど、一応警戒して、チョコビがいなくても前線で敵をけん制し続けた。

結局、特に戦術を変えてくる事もなく、とりあえず現状維持には成功したが、此処で問題が起こった。敵の要塞戦艦が、場所を移動し、艦船の壁のすぐ向こう側に来ていた。

今までは端に位置し、ジーク側とこちら側、両方をカバーする形をとっていたのに。

艦船補給はこちらだけで良くなったからだが、全てが後手の状況にジレンマを感じた。

作戦成功の可能性は、これでほぼ皆無ではあるが、どちらにしても波動砲の攻撃はする事になる。

俺達はどうするか話し合っていた。

と言っても、人型に乗っている俺が、話に入る余裕は全く無かったが。

紫苑「一か八か、やるしかないか。」

サイファ「失敗すると、みんなで敗走する事になりますよ。」

紫陽花「でも、このままの状況が続けたら、ジーク軍はからならず終わりますよ。」

真でれら「一応撤退準備は万全にして、やるしかないっしょ！」

美菜斗軍の人型は、既にジーク側の空域には、姿は見えない。

既に要塞内での戦いに突入しているって事だ。

此処の要塞は、確か防御力が高いから、そうそう拠点エリアまでは到達できないだろうが、このままいけば、必ず落とされるだろう。

そしてその前に、必ずジークがやられているわけだ。

次の機を逃したら、どちらにしても我々には撤退しかないだろう。

撤退か、逃避か、少し意味合いが変わるだけ。

行くしかないと思った。

その後結局、決行する以外に選択肢は無いて事でもとまっていた。

作戦としては単純である。

あちら側に向かうのに一番最短である左端に波動砲を打ち込む。

スピードスターに暗黒天国さんのボスを先頭に、チョビ、俺、じえにい、ハルヒ、その他数人を乗せて、穴の開いたところを一気に突破。

突破できたら、スピードスターとボスは艦船の背後を襲い、他の人型は要塞へ向かう。

問題は、索敵できない死角に、敵艦船が潜んでいる可能性がある事と、要塞戦艦の能力がどれほどのものか知らない事だ。

ま、もちろん艦船をまだ隠していると考えの方が普通だし、今要塞戦艦とまともに戦うのは、無理だろうけどね。

もう俺達には、わずかな可能性にかけるしかなかった。

作戦はスタートした。

補給できないじゃまいか！から、波動砲が撃たれる。

すると敵の艦船による防衛ラインに穴が開いた。

スピードスターが高速でその穴に向かう。

紫苑さんのパープルアイズや、他の友軍艦船は援護射撃。

紫陽花さんのパープルリリーは、既にこの領域を去っていた。

失敗したら即撤退なわけだが、パープルリリーで撤退は不可能だからだ。

そうなったら、誰も安全とは言えないけどね。

追撃されれば、みんなどうなるかわからない。

此処は敵軍領域で、我々の帰るべき場所は、遥か宇宙の彼方なのだから。

美菜斗軍は、すぐに対応に動いていた。

流星に簡単には突破させてはくれない。

沢山のビームとミサイルが襲ってくる。

それを、スピードスターの弾幕と、ボスの攻撃で撃ち落とす。

前の見えない光の中を突き進む光景は、なんだか幻想的だ。

星さんと暗黒天国さんは、いつもこんな戦いをしていたのか。

これはこれで楽しそうだなと思った。

一縷の望みを託した作戦は、成功を目前としていた。

この調子なら突破できる。

誰もがそう思ったかもしれない。

だが、やはりそれほど甘くはなかったようだ。

壁を埋めるべく、何処からともなく敵の艦船が集まってきていた。

やはり、死角に艦船を隠していたか。

それともただ単に上手くやられたのか。

今の俺には知るすべが無かった。

今、星さんがどうするか、急ぎ紫苑さんと話していた。

スピードスター「突進する？俺死ぬけど♪」

紫苑「それでも他が突破できればねえ。」

スピードスター「暗黒天国も死ぬな♪」

紫苑「いろんな意味でイタイな(^0^)」

追い詰められているとは思えない、軽い会話だった。

だからだろうか、何とかなるような気がした。

紫苑「ちょっとまって、通信がw」

一体誰だろう？

今、我が軍の上層部と、サイファ軍上層部のメンバーは、メンバー指定通信をしている。

この中のメンバーなら、何かあればチャット画面に表示されるはずだ。

すなわち、紫苑軍でも、サイファ軍でもない人から、通信が入った事になる。

美菜斗さんだろうか？

それともジークか？

その答えはすぐに分かった。

紫苑「回線に入れます(^0^)」

回線に入れるという事は、おそらく味方だろうが、俺達に味方などいただろうか？

紫苑さんの通信の後、すぐに表示された通信と、発信者の名前。

俺は見て驚いた。

ドリーム「やっほーw仲間に入れて！」

なんと、ダイユウサク軍の夢さんだった。

そしてすぐに、索敵マップにダイユウサク軍の艦船の機影が表示されていた。

助けにきてくれたのか。

俺達の選択肢に、撤退と逃避以外の選択肢が、再び輝きを増していた。

力の差

とうとう此処に、前作の宇宙の絆、上位4軍が集まった。

いや、グリードさんもいるから上位5軍か。

そしてそれがみんな、ジークを助けようとして集まってきているのだ。

一時的なものではあるが、全てが味方だ。

そして敵は、ネットゲームのカリスマ、不敗の美菜斗さん。

数時間で圧倒的勢力をつくり上げた彼に、絆連合が挑む。

サイファ「よし、俺達も続くぞ！」

紫苑「(^0^)」

ビューティフルベル「敵艦船は我々が引き受けます。夢と和己は一緒に行って良いよ。」

ダイユウサク軍の大將は来ていないようなので、どうやら中將のこの人が、ダイユウサク軍の指揮官のようだ。

俺はバトルグリードはやった事がないので知らないが、きっとこの人もかなりやる人なのだろう。

この状況で引き受けますとか、簡単に言えるものではない。

今日子「えー！！私も行きたい。今すぐ行きたい。とにかく行きたいー！！」

これは・・・

サイファ軍の今日子さんが出ていた、同じ名前の人か。

どうやら性格は全く違うようだ。

チサト「では私もお〜いくねえ〜」

ビューティフルベル「ちょっ！あんたら。まあ良いけど。て事は、ダイスケとトイキも行くんでしょ。」

ダイスケ「俺はチサトを守らないといけないからね。」

トイキ「ダイスケとは、ゲーム内ではパートナーだから行くしかないさ。あ、サラ達がお世話になってます。」

ダイスケさんとトイキさんは、確かドラゴンブレスのメンバーだ。

うちのサラさんとサウスさんとおとめさんが所属するゲームグループ。

チサトさんはドリームダストのひとりだし、正に「ドリーム」チームだなと思った。

戦況は変わりつつあった。

ダイユウサク軍のメンバーは、真っ向勝負と言わんばかりに、俺達作った突破口ではなく、敵艦船のいる場所へと突進していった。

じっくり戦いを見られないのは残念だけど、あの人たちなら突破してくる、そう思った。

で、いくらダイユウサク軍が助けにきたと言っても、俺達の目の前の敵がいなくなるわけでもなく、残念ながらスピードスターは、突破と同時に破壊されていた。

直後足元を失った暗黒天国さんのボスも、戦闘不能になった。

星さんは直前、人型で脱出していた。

艦船を失うのはかなり痛いけど、戦場に残れただけでもよしとしよう。

それにこの戦いは、おそらくこの先の展開を、大きく左右する戦いなのだから、艦船の1隻くらい、仕方のないところだ。

さてこれからどうするか。

前衛の艦船の壁は突破したが、既に前方には新たな壁ができていた。

この中で更なる突破に挑むのか、それともダイユウサク軍のメンバーが突破できるように、艦船の背後を攻撃するのか。

俺は迷わず、正面突破を挑む事にした。

アライヴ「チョビ、つきあってくれ！」

チョビ「えっ？えっとあの・・・」

ん？どうしたんだ？

一生「あ・・・」

戦闘中の咄嗟の通信だったので、短く簡潔にしたら、どうやら勘違いされたようだ。

つか、中学生にゲーム中に告白する大人って、ないでしょ。

俺は再び、しっかりと伝わるように通信しなおした。

アライヴ「正面突破につきあってw」

チョビ「あ。はい～」

どうやら分かってくれたようだ。

アライヴ「じえにい、ハルヒくんもよろしくw」

じえにい「やるきだよお～いくよお～」

ハルヒ「マジっすか。僕死にたくない～」

じえにいは、迷う事なくついてきてくれた。

ハルヒくんも、なんだかんだ言って、今日の戦いで此処まで生き残ってきたプレイヤだ。

大丈夫だ。

俺達はただ4機で、気合をマックスに再び敵の大艦隊に向かっていった。

戦闘は困難を極めた。

今まで無理だったのに、気合でなんとかなるものでも無かった。

結局此処でもこう着した。

そんな中、ダイユウサク軍の通信だけが、通信画面を動かす。

ビューティフルベル「弥生、右の艦船止めて！こっちに向き変えてるよ。あんじゅ、あんたの妻が危険よ。フォローして。達也、死んで良いから突撃！！」

弥生「簡単に言うわね。マナ！3秒後行くわよ。」

あんじゅ「おねえさま～今行きます～」

スター「おい！俺を何度殺す気だ！ポイントが全くねえぞ！」

ビューティフルベル「おかげで艦船スタッフレベル最高じゃん！攻撃くるわよ！」

ウララ「私も守りますから大丈夫です。」

ビューティフルベル「夢、和己、左開いたよ。ゴーゴー！」

ドリーム「分かっている！」

カズミン「分かっている！」

チサト「流石夫婦～息があってるう～」

ダイスケ「う～俺もチサトと組みたい・・・」

トイキ「ゲームなんだから、今は忘れるのさ。」

今日子「死ね死ね死ね～うははははは～」

この手の離せない状況、ただ驚いているわけにもいかない。

けどなんだこの人達のこの余裕。

通信の文字がひらがなだけではない事から、スカエポの通信を使っているものではない。

となると、戦闘中にも関わらず、これだけのタイピングをしている事になる。

キーボードの上にコントローラーを固定するアイテムもあり、俺も通信する時は使っているが、この状況では通信などできるものではない。

向こうの方が多少余裕のある状況だとしても、凄すぎる。

それに今も流れる通信ログ、ゲームで食べていると言われる人たちは、此処までやっていたのか。

状況を完璧に把握する司令官、その指示を確実に実行するメンバー、今の俺達では、全く歯が立たない相手だと感じた。

もしかしたら、今日同じ通信網で戦ってくれているのは、コレを見せる為だったのかもしれないと、俺は勝手に思った。

俺達が苦戦する中、間もなくダイユウサク軍の面々が、美菜斗軍の壁を突破してきた。

勝負

ダイユウサク軍の面々が、敵を突破してきた。

戦力の数だけで言えば、俺達よりも少ないダイユウサク軍なのに、それでも突破してきたのは、やはり力の差を認めざるを得ない。

でも、軍の能力で負けていても、個人的に負けたと思うのは癪だ。

此処からは条件は五分。

必ず俺が1番に突破してやる。

とは言っても、接近するのに、チョビの力を借りている事は内緒だ。

艦船には、ある程度までは近づく事ができる。

だが、艦船を抜ける時に挟み撃ちに合うので、どうしても此処だけが抜けられない。

ドリーム「アライヴさん、人型だけで突破しようなんて、無茶するねw」

俺達に追いついてきた夢さんが、通信をいれてきた。

俺は通信する余裕がなく、仕方なくスカエポの音声変換機能で話す。

アライヴ「まけたくなかったんで」

此処でも、ダイユウサク軍の「要塞戦艦落とすよ〜」とか、「はさみ撃ちでおけw」とか、通信が画面を流れていたが、夢さんとの会話に関係ないので割愛してお伝えする。

ドリーム「じゃあ私も負けたくないから、人型で突破しよw」

アライヴ「きょうそうだな」

ドリーム「とはいえ、流石に接近するまでは、誰かに協力を願いたいね。チリ！よろしく！」

チサト「おっけえ〜だよお〜」

こうして、なんとなく夢さんと競争する事になってしまった。

人が集まってきて攻撃が分散したからか、多少余裕も出てきた。

飛んでくるミサイルは、誰かが落としてくれるし、ビームにだけ気をつければ行けそうな気がした。

チラッとモニターの隅に、美菜斗軍の艦船が、体勢を立て直し更に向こう側に壁を作るべく、移動しているのが見えた。

時間がない。

俺は一か八か、突き進んでみようと思った。

これだけのメンバーが集まっている。

きっと誰かが、助けてくれるはずだ。

アライヴ「チョビ！じえにい！ハルヒくん！戦闘タイム0520丁度に、俺は突撃する。援護頼む！」

画面の隅に、軍が戦闘を開始してから、どれくらいの時間が経過しているかが表示してある。

これを元にタイムを合わせて作戦行動するわけだが、同じ軍でないと時計表示は一致しない。

だから波動砲の時は使えなかったが、今度は正確にタイム指定した。

チョビ「はい！」

じえにい「りょうかいですう〜」

ハルヒ「無茶ですってば！」

みんなの言葉が心強い。

ハルヒくんの言葉の何処が？なんてツッコミは無しだ。

これがハルヒくんなりの最高の返事である事は、今までの戦いで理解していた。

ドリーム「カズミン！うちらも行くよ！チリ、今日子、大輔、トイキ、援護よろしく！」

カズミン「はい！」

チサト「シールドフェネル使うよお〜」

今日子「了解iiiiiiii！！！」

ダイスケ「俺達は普通に後方から援護するよ。」

トイキ「わかったさ。」

ダイユウサク軍も此処で行くようだ。

チサトさんの通信に「フェネルシールド」という文字が見えたので俺は気になった。

つい最近導入されたもので、あのアニメでは、シールドビットと呼ばれるものだ。

導入を検討していたので、後で見る事ができれば参考にしよう。

そんな事を考えていたが、0520の数字を見た瞬間、全てを忘れて、俺は敵の中へと向かって行った

。

思ったとおり、ミサイルは誰かが撃墜してくれるので、俺は真っすぐ飛んでくるビームにだけ気をつけて突き進んだ。

突破できる。

此処を突破したら、要塞まで一直線。

そしてようやく、俺の得意な対人型戦だ。

艦船に最接近した。

もう一息だ。

正面以外は、爆発の光で眩しい。

そして俺は見事に突破した。

一生「やった！」

部屋で一人声を上げた。

しかし、まだ、最後の攻撃が俺に向かってきていた。

艦船から後方に撃ちだしたミサイルが、鋭角に向きを変え、艦船前方に進む。

それは俺の前方から、まっすぐ俺に向かってきていた。

盾もない俺に、コレをかわす術は無かった。

覚醒

向かってくる大量のミサイル。

俺に、かわす術は無かった。

いや、無いはずだった。

俺は無意識のうちに、フェネルを前方に、半球状に出していた。

さっきチサトさんが「シールドフェネル」とか言っていたからだろうか。

それとも、俺のフェネルへの信頼からだろうか。

両方かもしれないし、どちらでもないかもしれないが、とにかく俺は、ミサイルにフェネルをぶつけて、九死に一生を得たようだ。

やろうと思ってやったわけではない。

体が勝手に動いた。

自分でも信じられない。

俺、覚醒した？なんて思って、少し嬉しくもあるが、まだ現実感が無かった。

そして今も無意識のうちに、ジークの要塞へと向かっていた。

ドリーム「ちょっと負けちゃったwやるねえ！」

夢さんの通信に、俺は我にかえった。

どうやら夢さんも無事、あの壁を突破したらしい。

そしてどうやら、俺は夢さんよりも先に、あの壁を突破したようだ。

夢さんに勝ったのか。

仲間があつての勝利だが、勝ちも勝ちだ。

俺は顔がにやけた。

それでも、さっきの自分はなんだったのだろう。

今一受け入れられず、俺に慢心は全くなかった。

アライヴ「まぐれだよ。なんか勝手に体が動いてさ。」

俺は正直に話した。

すると夢さんは、それが当然と言わんばかりだった。

ドリーム「ん？いつも勝手に動くよ。違うの？」

それを聞いて理解した。

いつも夢さんは、さっきのあの感覚の中で戦っているのではないか。

だから人間業とは思えないスピードが得られるのではないか。

もしそうなら、勝てるわけがない。

でも、もしさっきのアレが、再び俺にできるなら、ようやく俺は、夢さんに追いついたのかもしれない。

。

今更ながらドキドキしていた。

突破したのは、俺と夢さん、そしていつの間にか、カズミンさんもこちら側にいた。

俺は要塞を目指したが、夢さんとカズミンさんは、後方から艦船を攻撃していた。

ありがたい。

残った仲間の事は、任せて大丈夫そうだ。

俺はただ一機、広がる空域を突き進んだ。

そして間もなく、要塞内へと突入した。

要塞内は、静かだった。

本来ジークから見れば、紫苑軍は敵であるわけだから、防衛機能が働いていたら、攻撃があるはずだ。

それが無いって事は、この辺りの防衛システムは既に破壊されている事になる。

当然だが、美菜斗軍にやられたのだ。

これは一刻の猶予もない。

俺は先を急いだ。

しばらく進むと、両軍の人型の残骸が、そこかしこに見られるようになった。

この辺りから、本格的な戦闘が行われたのだろう。

美菜斗軍の人型が一機、こちらに攻撃してきた。

俺は軽くかわして、敵機をビームソードで切りつけた。

その後も要塞内で、何度か美菜斗軍の人型と戦闘した。

俺はことごとく勝利する。

そして、もうすぐ司令室のある拠点エリアに入ろうかという辺り、広くなった場所で、信じられない光景を見た。

無数の人型が、その空間を埋め尽くすように漂っていた。

屍がゾンビとなって、行く手を阻んでいるようだった。

これだけ沢山の人が、導入された大戦争、それほどまでに重要な戦い。

此処でジークが負ければ、美菜斗軍に宇宙は制覇されるって事だろうと理解した。

人型をどけながら、俺は進んだ。

一刻も早く進みたいのに、本当にじれったい。

それでも焦らず、俺は残骸の海を渡り、ようやく拠点エリアへとたどり着いた。

さて、此処からは迷路だ。

そして、より一層美菜斗軍とはち合わせる可能性が高まる。

それでも俺は全速で司令室を目指した。

拠点内では、何度も美菜斗軍の人型と遭遇した。

その度に俺は速攻で倒して、先を急いだ。

そんな時、通信が入った。

紫苑「その有人要塞阿蘇山、美菜斗に持ち主が変わってるんだけど。(^^)」

どういう事だ？

ジークは司令室にいたのではなかったのか？

この拠点が落とされたからと言って、ジークが負けるわけではない。

生き残る事が目的なら、別に司令室を放棄して、何処かに時間切れまでかくれている事もできる。

俺はふと思いついた。

隠れるのに、うってつけの場所。

さっき通ってきた、屍の海。

木を隠すなら森の中。

人型を隠すなら、人型の中。

俺はまた無意識に、先ほど通ってきた、人型の残骸の海を目指して、来た道に戻っていた。

無意識の中の決着

人型の残骸の海に戻ってくるまで、ただただ俺は、向かってくる美菜斗軍を倒した。それは覚えているのだが、いつからか、どんな戦闘をしてきたかも思い出せなくなってきた。眠気からだろうか。それとも疲れだろうか。俺の意識は、先ほどからハッキリしない。まる一日以上ゲームをしていれば当然か。そして今も、更に意識が薄れていくようだ。そんな状態で、俺は再び残骸の中へと入って行った。今度は此处でも、敵の攻撃があった。お互いむやみに攻撃はできない。戦闘不能となった人型を盾に、敵はこそこそと攻撃してくる。でも、面倒くさいとか、ましてや勝てないなんて思わなかった。俺はいつもどおり。来る敵来る敵、俺は排除していった。そして少しずつ、屍の海の果てを目指して進んでいった。とうとう見つけた。追い詰められたジークが、今、目の前にいた。

その後の事は、もうほとんど覚えていない。ジークのそばには、群青さんと疾風さんがいた。四天王の残りの二人、麒麟さんと紅蓮さんは既にやられていた。その時群青さんと通信してそう聞かされた事を、かろうじて覚えている。後は24時まで、ジークを守る為に、美菜斗軍の人型を倒しまくっていたようだ。気がつけば夢さんがいて、カズミンさんがいて、じえにいがいて、チョコビがいて。戦闘時間が終了した後、寝オチした俺が目を覚ました時には、有人要塞ネコミミに戻っていた。俺は慌てて、状況を確認した。ジーク軍は健在だった。もちろん、紫苑軍も、サイファ軍も、ダイユウサク軍も、問題なかった。俺達は、負けなかったのだ。宇宙の領域マップは、多くが美菜斗軍の領域になってはいたが、ギリギリ対抗できるだけの状況は守れたと言える。もしあのままジークがやられ、美菜斗さんが完全勝利していたら、もっと多くの人が、美菜斗さんに味方する事になっただろう。やはり勝てないと諦めていただろう。勝負が決しようとしていたが、まだまだこのゲームは終わりそうになかった。

美菜斗軍は、大量の物資を投入した作戦だったので、3カ月程度、大規模に戦闘はできない。いや、おそらくもうこんな戦いはできないだろう。かたやジークは、本拠地を地球へと移し、復活にかけるようだ。サイファ軍は、相変わらずの戦いを、ダイユウサク軍は地味に領地を増やしていた。そして我が軍と言えば、あの大战の後、快進撃を続けていた。まずは曹操軍を叩き、再び地球方面へと侵攻していた。あの大战の後、俺は紫苑さんに進言した。

アライブ「俺達も、艦長と指揮官を分けて、ダイユウサク軍のように指揮する人が必要ではないかと。」

でも紫苑さんは、その進言を受け入れなかった。

紫苑「あれはあの軍だからできる事。逆に言えば、あんな作戦は、あの軍の司令官じゃなきゃ出せない。俺達は俺達のやり方を貫く。それでも勝てる！(^0^)」

正直その時は納得できなかったが、俺は紫苑さんに従うしかなかった。

それでも、今の快進撃があるわけで、あの大战の後、俺達は強くなったと感じられる。

結局は、今までのやり方があっていただと納得できた。

大战から2カ月が過ぎた頃、面白い現象がおきていた。

地球から月の外側二周り分くらいの領域が、ぽっかり空いてしまっていた。

コロニーや有人要塞には所有者は存在したが、要塞は皆取ろうとしなかった。

取っても空家状態。

生産性の無い要塞を維持したり、守ったりするコストがもったいないってわけだ。

それに中心付近は、戦場になる事も多いから、誰も欲しがらなかった。

そんな状況を見て、一人のプレイヤーが、その地を狙って動こうとしていた。

そしてまた別の軍が、この状況をチャンスととらえて、作戦行動を開始していた。

この偶然のタイミングの一致が、こう着状態になりつつあった戦況を、大きく動かす事になった。

ジーク再び

最近の俺は、フェネルダガーと、シールドフェネルを試していた。

あの大人気アニメのファングと、シールドビットをパクったものだが、今一使い勝手が悪いからか人気は無く、使う人はドンドン減っていた。

まずフェネルダガーから説明すると、大きさはフェネルの約3倍で、フェネル3機のスペースに1機しか搭載できない。

攻撃は、簡単に言えばフェネルの突撃で、それで相手を斬りつける。

それなら、フェネルでビームを撃った方がコストも良いし、スピードも速く、要するに、バリア対策のミサイル程度にしか役に立たないと分かった。

それでも俺はあの大战で痛い目をみたので、フェネルダガーを4機ほど、テンダネスに搭載する事にしていた。

次にシールドフェネルだが、こちらも微妙だ。

大きさはフェネルの約4倍で、専用の搭載ボックスが必要となる。

この時点で、人型の動きが落ちる事が想像され、あのアニメと同様、狙撃タイプの人型でしか使えそうにない。

数が無いと大きな効果も望めず、シールドフェネルを使うくらいなら、盾を持った方が使えるってのが、一般プレイヤーの評価だった。

だけど俺は、フェネルを盾にして攻撃を防いだ経験もあったので、2機だけ、フェネルのスペースを削って、搭載ボックスを肩のあたりにつけた。

さて、今日もまた俺達は、地道に領地拡大する為に出撃する。

最近はどの軍もおとなしく、積極的に動いているのは、俺達くらいなものだ。

もちろんあちこちで、小さな戦いは行われているが、どうしても良いような要塞の取り合いで、戦略性が見受けられない。

俺達が領地を拡大するのは、生産性の拡大の為に有人要塞とコロニーを取る事もそうだが、強さを誇示する事も大切な目的だ。

美菜斗軍だけではないって事を示さなければ、みんなあちらに味方しかねない。

それだけでなく美菜斗さんはネットゲームのカリスマなのだから、得意になって見せつけるくらいでないといけないと思った。

アライヴ「そろそろ出るよ！」

紫陽花「了解～よろしく！」

俺は再び、紫陽花さんのパープルフラワーと行動を共にしている。

大战の時は久しぶりに紫苑さんのパープルアイズに乗ったけれど、どうもしっくりこなかった。

俺の帰る艦船は、もうパープルフラワーなのだな。

今日も必ず此処に戻ってくる、そう決意して出撃した。

戦闘は今日も絶好調。

なんの問題も無い。

フェネルダガーを使ったり、シールドフェネルで何処まで守れるか試したり、それでも楽勝なのは、俺が成長した証拠だろう。

今なら水陸両用のモノトーンで戦ってもそれなりにやれそうさ。

俺は勢いにのって、敵の要塞内へと入って行った。

外にもまだ敵は残っていたが、楽勝だし、あとはチョコビとみゆきちゃんできなかなるだろう。

それにチョコビはもう完全体だ。

何かあっても、戦闘終了まで戦える。

チョビの話によれば、毎日のように、母親から200万円は？なんて聞かれるらしい。

ご安心くださいお母さん。

おそらく今では、金利で400万円くらいに増えてますよ、きっと。

そんな事を考えながら、楽しく要塞の防衛機能を無力化していった。

もうすぐ20時になろうかという頃、要塞エリアから、拠点エリアへと入ろうとしていた。

その時、紫苑さんから通信が入る。

紫苑「ダイユウサク軍の最前線コロニーが、ジークに落とされた。(^^)」

なんと、とうとうジークが動き出したのか。

それにしても、よくもまあ2カ月で立て直して、ダイユウサク軍のコロニーを落とせたものだ。

やはり地球に拠点を持つ事は、かなり有利だという事か。

ちなみに、ダイユウサク軍や美菜斗軍は、未だに地球に拠点を持っていなかった。

ただ、美菜斗軍に関しては、息のかかった軍がいくつもあるだろうから、機会があれば一気に美菜斗軍へと変わるだろうし、あると言って差し支えないだろうけどね。

それにしても、ダイユウサク軍の拠点がこんなに簡単に落とされるとは、どうも信じられなかった。

アライヴ「ダイユウサク軍、何かあったのかな？こんなに簡単に落とされるなんておかしいよね。」
俺の疑問は、当然の疑問だと思う。

だから紫苑さんも、その辺りの情報を集めていた。

紫苑「どうやら、今、地球降下作戦を決行中らしいよ。チャレンジャーだね。ま、空家を狙われたって事かな。」

アライヴ「ジークはそれを知っていたのかな？」

身内だけの軍、情報が漏れる事はないと思うが、そう考えなければ、説明がつかない。

紫苑「どうやらジークは、地球周りの空き要塞を占領して、宇宙に返り咲くつもりだったって話も。」

アライヴ「そしたらたまたま、ダイユウサク軍のコロニーが空き屋同然だったんで、攻めた感じ？」

紫苑「うん。」

まさか、そんな偶然が。

でも、実際そうになっているのだから、これに対してなんらかの対応が必要になるかもしれない。

本来、ジークとダイユウサク軍の戦いは、現状あまりよろしくない。

美菜斗軍に有利になるからだ。

こんなタイミングなら、美菜斗軍も自由に動けるといもの。

俺達4軍と、美菜斗軍がにらみ合っているから均衡を保っているが、4軍が内輪で争ったりしたら。

紫苑「くるか？」

アライヴ「美菜斗さんなら、きっとこんなチャンス逃さないかと。」

俺達がそう言った直後、嫌な予感現実となった。

レイズナー「美菜斗軍が領内に侵攻してきたぞ。」

紫苑「紫陽花、チョビとみゆきだけ乗せて、ネコミミに急行！」

アライヴ「俺は？」

紫苑「自力できてくれwテンダネスなら、そんなに時間もかからんよね？」

アライヴ「いや、艦船と比べれば2倍はかかるかと。」

紫苑「頑張れ！」

こうして俺は、パープルフラワーに帰る事ができなかった。

ジークの逆襲

パープルフラワーが去った後、俺は急いで要塞をでた。

一応外にいた敵の人型は片付けてくれていたようで、全力で帰還に専念する事ができた。

なんとか有人要塞ネコミミまで帰ってきたが、どうやら戦場は別の場所が変わったようだ。

紫苑「最初のルートだと、狙いはネコミミだと思ったけど、どうやら旧曹操軍領域方面みたいw(^0^)

」
簡単に言ってくれるが、人型でそんなところまで行けるわけがない。

かといって、行かないわけにもいかない。

俺が行かなくても、こちらの領内ならそう簡単には負けないと思うが、敵は美菜斗さんだ。

俺は超久しぶりに、自分の艦船ノレンを出港させる事にした。

ゲーム終了まで、もう使う事はないと思っていた艦船。

それでも一応メンテナンスもしているし、それなりの能力もある。

逃げる能力だけだ。

俺はノレンに着艦した。

するとまた、紫苑さんから通信が入る。

紫苑「悪い！こっちは大丈夫そうだから、サイファ軍の有人要塞メロンぱんに援軍に行けないか？本命はサイファ軍みたいだ。(^^)」

なるほど。

ジークとダイユウサク軍の戦いを見て、我々紫苑軍にけん制をかけて、サイファ軍を撃つ作戦か。

今日は土曜日でもないし、時間もそれほどはないけど、重要な拠点を取るか、もしくは有利な状況で、大きな打撃を与えられればってところか。

俺が取り残された事は、どうやらサイファ軍には吉だったようだ。

此処からなら、メロンぱんの方が近いし。

アライヴ「ノレン発進！（笑）援軍了解～」

紫苑「(^0^)/」

俺はピクニックにでも行くようなウキウキ気分で、サイファ軍領域へと向かった。

有人要塞メロンぱんにつくと、戦場は十分に温まっていた。

これならいつ参戦しても、問題無くスムーズに入っていけるだろう。

なんて冗談を頭に思い浮かべながら、俺はサイファさんに通信をいれる。

アライヴ「援軍にきました。えっと、状況はどうですか？何すれば良いですか？」

全然スムーズには、入っていけなかった。

サイファ「ありがとうございます。今日子さんをサポートしつつ、カニさんと共に敵をひっかきまわしてください。」

アライヴ「了解～」

とりあえず今日子さんと一緒に、美菜斗軍を叩けばいいやと思って、俺はノレンをNPC艦長に任せて、テンダネスで発進した。

そして直後、サイファさんの言葉の重要性に気がつく。

一生「え？カニさんって、アイドルのしゃこたんじゃねえかよ！」

どうやら今日は、しゃこたんは艦船を操っているようだ。

とりあえず合流し、通信する。

アライヴ「どもw援軍にきましたw」

今日子「おおwありがたい！もう美菜斗軍面倒くさい！」

キャンサー「よろしくねえ～wあ、よろしく頼むぜ！（笑）」

今日子さんはどうやら、俺の援軍を心底喜んでくれているようだ。
カニさんは、どうせ通信している人はみんな知っているのだから、男にならなくても良いわけだけど、まあそのまま喋られると照れるし、男の方が良いかも、なんて思った。
カニさんが敵の真ん中へ突っ込んで行く。
なかなか大胆な行動を取る人だ。
それに気を取られる人型を、俺と今日子さんと狙い撃ちだ。
更にそのまま、敵艦船の背後に取りつく。
この人、人型で出ていた時は、ただのアイドルだと思っていたけど、艦船での戦闘は、なかなかどうして素晴らしい。
前作の宇宙の絆では、前線で戦っていた人なんだよな。
これくらいできて当然か。
数では完全に負けているサイファ軍だけど、コレは勝てると思った。

楽しい戦いをしばらく続けていた。
すると、急に敵が、撤退行動を開始した。
アライヴ「どうしたんでしょう？」
まだまだ数では圧倒的に敵が有利だし、撤退するには早すぎる。
実際こちらの要塞には、既に侵入も許しているし、勝負はどちらにころんでもおかしくない状況だった。
撤退の答えは、すぐにサイファさんからつげられた。

サイファ「どうやらジーク軍とダイユウサク軍が、美菜斗軍領域に侵攻しているみたいよ。ジークめ、憎たらしい事しやがるなw」
撤退の答えは分かったが、何故ジーク軍とダイユウサク軍が、一緒になって？
さっきまで戦っていたのではないのか？
サイファ「ジークから通信が入ったw借りは返したぞ！だってさ。最初からダイユウサク軍と共謀していたみたいね。」
どういう流れでそうなったか、今の俺達には予想する事しかできない。
予想でしかないが、これは最初から仕組まれた事ではなかったように思う。
偶々の状況の中で、ダイユウサク軍がジーク軍にコロニーをプレゼントした？
ま、今考えても仕方がない。
今どういう対応をとるかだ。

アライヴ「どうします？」
サイファ「カニさんのキャンサーに乗って、今日子さんと一緒に追撃してもらっていいですか？」
願ってもない。
しゃこたんと一緒に戦えて、しかも追撃だなんて。
俺は、自分の艦船ノレンの事はすっかり忘れて、美菜斗軍を追撃した。

しゃこたん追撃

紫苑さんからの通信によると、紫苑軍領域に入っていた美菜斗軍も、撤退を開始したようだ。

こちらが追撃をかけている事を伝えると、紫苑さん達も追撃するとの事。

図らずも再び、絆連合が結成されたと言う事か。

と言っても、同盟関係はサイファ軍だけだし、ジーク軍とダイユウサク軍は、最大の敵であるわけだが。

さて、現在敵を追撃中のキャンサーだが、俺はこの人の事を正しく評価せず、まだまだ軽んじていたようだ。

いや、素晴らしいプレイなのは先ほども言ったとおりだが、そんなに簡単に言い表せるような素晴らしいさではない。

この追撃戦の中で、既に敵艦船を4隻も落としていた。

しゃこたんの実力は、紫苑さんや紫陽花さん以上かもしれない。

小麗さんと戦っても良い勝負をしそうだ。

艦船同士で戦って、どんな勝負になるのかわからないが、そんな事を思った。

いくらか時間が流れた。

俺は既に飽きていた。

逃げる敵を追撃しているわけで、俺は戦況を見ているだけ。

特にチャットで世間話をする事もないし・・・

いや、言いなおそう。

特にしゃこたとチャットできるわけでもないし、なんてもったいない時間を過ごしているのだろうか。

まあ、前のグリード軍の方々のように騒ぐのもどうかと思うけれど、ちょっとくらいはねえ。

そんな事を考えていたら、俺はふと思った。

俺って何気に、女の子に囲まれてゲームしてないか？

パープルフラワーには、紫陽花さん（人妻）チョコビ（女子中学生）みゆきちゃん（女子大生？）と、主力は全て女性。

その前はじえにい（女子中学生）とコンビを組んでいたし、サイファ軍と一緒に戦う時は、いつも今日子さん（女子大生）と一緒にだ。

ダイユウサク軍と関わる時は、いつも夢さん（若奥さん）だし、意外と良い環境なのではないだろうか。

前作では、群青さんの元、むさくるしい男どもの中で戦っていたけれど、運が向いてきたのかな。

でもよく感がたら、こんなゲームに熱中できる時間があるのは、女性の方が多いかもしれない。

大人の男性って、なかなかディープに参加するのは辛いだろう。

紫苑さんがどんな仕事をしているのかは知らないが、定時に帰ってこれるから、これだけ参加できるのだし。

俺もそうだが、サイファ軍の主力はみんなニートだし。

ま、そのおかげで、20億円争奪戦ができていわけだから、ニートから賞金稼ぎにジョブチェンジできるかも。

「ニートはネットゲームで賞金稼ぎしなさい！」なんて親に怒られる時代がきたりして。

でも、人に凄いとさせうる事は、必ず金になるはずだ。

歴史がそれを証明している。

将棋や囲碁は、もともと単なる遊びだったはずだ。

その遊びで強い人が現れて、みんなから尊敬されるようになる。

そこでその戦いを見たい人が増えてきて、收拾がつかなくなってきて、見たい人から金を取って調整しているうちに、プロというものができたに違いない。

スポーツ選手もそうだ。

人を引き付ける魅力以外に生産性は何もないが、その人を引き付ける魅力が、プロスポーツ選手という職業になり得る。

広告塔だ。

そう考えるなら、近い将来、ゲームで強い人が人々の尊敬を集め、その戦いを見たい人が増えれば、プロゲーマーもきっと認められるのだろう。

既に、ドリームダストはそれだけでも生きていけると言われているし、ゴッドブレスの人達は、賞金で生活していると言っていた。

もしプロができたら、俺はプロゲーマーになりたいのだろうか。

そしてなれるだろうか。

きつとなれる。

なんせ、ドリームダストや、ゴッドブレスと、同じステージで戦っているのだから。

長きにわたり、頭の中で色々と考察をめぐらせていたら、いつの間にか、決戦の地へと到達していた。

此処まで俺の出番が無かったって事は、いくつかの要塞はスルーしてきたのだろう。

今更ただの要塞を攻略したところで、戦略的意味は少なくなっている。

基本的に、必要なのは生産性のある場所だけだ。

ただの要塞は、艦船の駐留場所として後方に必要なだけあれば良い。

このゲームは既に、成熟期に入っているのだ。

さて戦場は、おそらくは敵の最前線基地、コロニー心によによによだ。

コロニー心によによによと聞いて、全く誰がこんな名前をつけるのだろうかと思うが、ネット上では色々な人が集まってきてるので、この程度ならまだまだマシな方。

それよりも今回の戦いでは、コロニーってところがポイントだろう。

前線基地は、できれば有人要塞が最善だ。

でもこの辺りは意外と小さな軍が多い空域で、有人要塞を手に入れる事が出来なかったとみえる。

美菜斗さんは、カリスマであるが故に、小さな軍をむやみに攻めたりはしない。

誰が見ても明らかに、戦略上必要な場合は攻めるが、基本は話し合い重視だ。

だから今美菜斗軍が攻める可能性のあるのは、優勝争いに残っている、今戦っている軍だけだけと言える。

カリスマは維持するに値するスキルではあるが、それが今回あだとなるかもしれない。

コロニーの守りは、要塞のように防衛システムがほとんど無いし、地の利も全く無い。

同じ戦力なら、通常は守りの方が有利ではあるが、コロニーだけはそのイニシアチブはほぼゼロに等しかった。

長々と話したが、要するに俺達に有利な戦場って事だ。

今日子「やるよ！みんな出撃！」

アライブ「了解～」

キャンサー「頑張れよ！w」

しゃこたんに頑張れよと言われてたら、頑張るしかあるまい。

なんでもないただのコロニー戦だけど、俺にとっては少し気分が盛り上がる戦いとなった。

そんなコロニー戦が、この宇宙の絆IIの戦いを大きく動かす事になろうとは、この時はまだ、知る由も無かった。

なんでもないコロニー戦を開始してから間もなく、紫苑さんから通信が入った。どうやらジーク軍とダイユウサク軍は、快進撃を続けているようだ。そして紫苑軍も、もう間もなく美菜斗軍領域へ入るとの事。紫苑軍が作戦行動中に、別の軍で助っ人をしているのは、なんだか変な感じだが、今日だけはそれも良いだろう。

なんせアイドルと一緒になのだから。俺は注意力が散漫としていたが、戦闘の調子は良い。俺って、考えて戦わない方が良いかもしれないなんて思った。それにしても、さっきからなんだかおかしい。倒しても倒しても、一向に敵が減らない気がする。援軍でもきているのだろうか。

この程度のコロニー、最悪捨てても、美菜斗軍にはなんの問題も無いように思う。だから援軍なぞあり得ない気もするが、まあ良い。それだけじゃこたと一緒に戦ってられるわけだから。

直後、サイファさんと真でれらさんも、コロニーふによによによにやってきた。

アライヴ「サイファさん、この程度の戦い、任せてくれても良かったのにw」俺はしゃこたんを独り占めしたかったのか、自分でも理解できないくらい調子にのっていた。

サイファ「俺も久しぶりに、カニさんと一緒にやりたかったんだよ。」

真でれら「俺もいれてくれよw前作では俺とカニさん二人で、サイファ軍の双壁と言われてたんだからw」

二人とも、ゲームの戦略としてではなく、個人的欲求を満たす為にやってきたようだ。聞き流すところだったが、真でれらさんと双壁って事は、しゃこたんって、守りの方が得意なのかな？さっきの戦いを見ていれば、完全に攻撃タイプだと思っていたけれど、もし守りの方が得意だというなら、恐ろしい人だな。

そんな事を考えている時、俺は我に返った。あれ？俺、戦いながらもチャットしている。俺は二人に返事を返そうと思ったが、タイピングする隙が見つからない。もしかして、コレが無意識の領域だろうか。

手元を考えずにやってるとできるのに、いざ考えるとできない。そう言えば、以前友達と話した事がある。ブラインドタッチは、無意識ならできるが、考えて打とうとすると遅くなると。タイピングゲームなんかすると、日本語だと早く打てるが、アルファベット一文字だと、意外に打てなかったりする。

結局、体が覚えているんだよって事で結論付けたが、あながち間違いでもないと思った。サイファさんと真でれらさんが駆け付け、すぐに決着がつくだろうと思っていたが、意外に手こずっていた。

どうも、倒しても倒しても、敵が減らない気がするのは、気のせいではないらしい。俺は無意識に通信していた。

アライヴ「敵が全然減らない気がする。」するとサイファさんが、何をいまさらって感じで返事を返してきた。

サイファ「援軍がドンドン集まってきたじゃん？あれ？気がついてなかった？」

アライヴ「ええ。戦闘に集中していたみたいです。」

戦闘に集中ってよりは、なんだか楽しい気分を味わって戦っていただけなんだけれどね。

サイファ「ごめんごめん。どういうわけか、敵の援軍がドンドン来てるんだよ。きっとこのコロニー落とされるとかなりまずいんじゃないかな？」

言われて理解した。

今更美菜斗軍にとって、1つのコロニーなんて、被害を出してまで守るものでもない。

そこを防衛してきた事で、此处が重要である事がわかるじゃないか。

普通に考えると、サイファ軍を攻める最前線基地である事から、資源が多く置いてある事が考えられる。

今回の美菜斗軍の動きをみれば、次のターゲットはサイファ軍であったと予想できるからだ。

ジーク軍とダイユウサク軍の争いを見て、紫苑軍にけん制攻撃を入れて、サイファ軍に攻めていったのが何よりの証拠。

アライヴ「資源が美味そうですねw」

サイファ「落としてくれるか？w」

アライヴ「任せてください！」

今日子「頼もしいねwでも落とすのは私よ！」

実際は、ドンドン敵が増える中、勝てる可能性は徐々に減っているはずだった。

でも、何故か今の俺達に、勝てないなんて考えは、頭の中に無かった。

それもこれも、アイドルの「頑張ってるね！」の一言が力となっている事は、疑いようがない。

アイドルって恐ろしいと思った。

その恐ろしいパワーに引っ張られ、徐々に形勢を逆転していた。

援軍が大量にやってきた事で、明らかに戦況は不利だったのに。

「頑張ってるね！」パワーは凄いな。

そしてそれだけではない。

しゃこたん自身の快進撃も、俺達を勢いづけた。

アライヴ「カニさん凄いなw実は攻撃の方が得意だった？」

キャンサー「前の時は、守り重視でやってたもんねw」

真でれら「なるほど。艦船のチューニング次第で、どちらも強かったのねw凄すぎるw」

「しゃこたん、末恐ろしい子」なんて言う意味が違うが、感覚としてはそう言いたい気分だった。

23時を回った頃、この領域の空域は、全て支配していた。

宇宙空間に、これだけの人型が戦闘不能で漂っているのも初めてみる。

後1時間しかないが、コロニーなら軽く落とせるだろう。

アライヴ「では、コロニー攻略行きますねwあ、最後はもちろん任せます！」

普段なら「今日子さん後は任せました！」なんて言うところだ。

サイファ軍の突撃隊長LOVEキラさんもいるから援護も必要無いし、俺がコロニーを落としてしまうと、紫苑軍の所有コロニーになってしまうから。

でも今日は、なんだかまだまだゲームをしたい気分だし、もしかしたら、拠点エリアにも敵がいるかもしれない。

そしたらまだ戦える。

サイファ「じゃあよろしく！」

キャンサー「頑張れよ、おいw」

今日子「一人でも大丈夫なのにw」

LOVEキラ「じゃあ俺は此处でカニさんとチャットしようw」

真でれら「w」

アライヴ「ガン！w」

こうして俺と今日子さんは、コロニーの拠点エリアへと入って行った。

疾風のように

拠点エリアに入ると、敵が多数潜んでいた。

こんなところで戦闘すると、コロニーの生産性は落ちるし、防御力も大幅に下がる。

それでも大量の人型を潜ませていたって事は、それでも守らなければならない理由があるっていう事だ。

今日子「拠点の中に敵多数！」

アライヴ「これは資源ウハウハですよw」

LOVEキラ「俺も行く！やられんなよ！」

俺と今日子さんだけで、多数を相手にする不利な状況だが、俺はワクワクしていた。

今日の俺は調子が良い。

負ける気なんて、微塵もおきなかった。

実際、俺達は二人で、敵の人型を打ち破って行った。

将官クラスの強い人も中にはいたようだが、夢さんやカズミンさんと比べれば、赤子も同然だ。

それにしても、将官クラスの人が身を挺してまで守ろうとするコロニー、ますます落とした時が楽しみだ。

と同時に疑問もわいてきた。

たとえば軍所持の資源の半分があるコロニーだったとして、俺はそこを命がけで守るだろうか？

いや、全ての資源を置いていたとしても、生産性があれば再戦にかけた方が賢い。

なら何故、あの美菜斗さんが、そんなコロニーを守らせているのか。

もしかしたらと思った時、視界の隅に、美菜斗さんの人型、マサムネをとらえた。

まさか、大将がこんなところにいたのか。

俺はフリーズしかけたが、すぐに通信を送った。

アライヴ「美菜斗の人型、マサムネを発見！うはw」

今日子「マジで！」

サイファ「このチャンスは逃せない！全員突撃！！ww」

LOVEキラ「うっひょー！！」

サイファ軍は、一気にテンションが上がり、祭りのようだった。

キャンサー「じゃあ私は、戦闘不能の人型回収してるねw」

しゃこたんだけは冷静だった。

この直後、サイファ軍の人型が集まる前に、俺はあっさりと美菜斗さんを倒していた。

時計は、23時52分だった。

美菜斗さんは、後継ぎとして下杉影虎を選んでいて。

下杉影虎さんは美菜斗さんの腹心で、他のゲームでも共に戦っている有名人だ。

名前はこんなだけど、女性という話もある彼女もまた、楽しくゲームをする人気プレイヤーで、多くの人から支持されている。

でも、やはり美菜斗さん程の求心力はなく、サイファさんからの話になるが、本日捕らえた捕虜たちの半数は、下杉影虎軍へと戻る事はなかった。

そして、捕虜から聞いた話によると、このコロニーでは、明日完成予定の新兵器が開発中で、それをもって、サイファ軍を攻める予定だったらしい。

その1日前にチャンスが訪れ、結果はこのとおりだ。

もし、ダイユウサク軍の地球降下作戦が、1日遅れていたら。

ジークがダイユウサク軍を攻めなければ。

俺が紫陽花さんに、おいてけぼりにされなければ。

しゃこたんが偶々ゲームに顔を出したのも、全てが良い方向に重なって、不敗だった美菜斗さんは敗れる事となった。

負ける時はこんなにもあっさりとしているものなのか。

それでも、1週間もすれば復活する事が可能だ。

俺達はこのチャンスをものにする為に、ジーク軍、サイファ軍、ダイユウサク軍と、阿吽の呼吸か、それぞれの意思と判断で、1週間の間に下杉影虎軍に大きなダメージを与えた。

それが原因か、それとも最初から戻る気は無かったのか、美菜斗さんは、ゲームの離脱を宣言した。

すると、攻めていた俺達以外の軍も、下杉影虎軍に攻撃を開始し、美菜斗さんの敗戦から約2週間で、最大勢力だった美菜斗軍は、完全に消滅した。

あっけなかった。

この時俺は少し、気が抜けてしまっていたかもしれない。

それでも、これでいよいよ、次はジークか、それとも夢さんのいるダイユウサク軍との対戦だと思うと、俺は再びエナジーが沸き立った。

どちらも強敵だ。

でもどちらが相手でも負けない。

そう意気込んだが、直接対決は、まだもう少し先の話。

まだまだ予期せぬ事が、俺達を待ちうけていた。

仕組まれた企画

サイファ軍のキャンサーが、女優でアイドルの中山西子である事は、ファンの間では周知の事実であった。

深夜の番組や雑誌では、時々とりあげられ、一般ユーザーでも知っている人は知っている。

これだけ人が集まっていて、隠し通せるものでもなし、本人も特に隠す気はない。

それでも今までは、騒ぎが起きる事は無かったし、知っていても他と変わらない対応をとる事が普通だった。

でも、そんな日々も、今日で終わるのかもしれない。

美菜斗さんを倒したあの日、倒したのは俺だったが、テレビではしゃこたんの活躍が取り上げられていた。

確かに、しゃこたんがいなければ、美菜斗さんがやられる事は絶対に無かっただろう。

だから認めてはいるが、少し悔しかった。

で、話しはそれだけでは終わらなかった。

下杉影虎軍が消滅した後、テレビのゲーム情報番組の企画として、銀河バリューネットも協力して、しゃこたん v s 夢さんが実現していた。

放送は、土曜日の夜 21 時から 22 時まで。

その為、戦闘開始時間は 22 時からとされ、それまではサイファ軍 v s ダイユウサク軍のみに規制された。

お互いの大将にも許可を得て行われるこの戦争は、ガチンコ対決ではあるが、力の差を埋める為に、キャンサーには特殊な人型が与えられていた。

しゃこたんは、艦船での戦闘は強いが、人型での対戦は得意ではない。

かといって艦船で戦っても、地味すぎて一般の人は面白くもなんともないだろう。

そんなわけで、しゃこたんに強力な人型「しゃこ式」を与えて、夢さんと互角に戦えるようにし、対戦してもらおうってわけだ。

対決の場は、地球に近い只の要塞。

守るのはダイユウサク軍で、攻めるのがサイファ軍。

戦略上全く意味の無い戦いだけど、一般人が見てもそんな事はわからない。

そんな戦いが、もう間もなく開始されようとしていた。

アライヴ「以上説明したとおりなのだが、何故俺がこの戦いに参加する事になってるんだ？」

今日子「ん？誰に説明してるの？」

というわけなのだ。

そのサイファ軍 v s ダイユウサク軍に、何故か俺も参加する。

何故そうなったのか簡単に説明すると、美菜斗軍を倒した時に俺がいて、尚且つ倒したのが俺だった事。

そして戦力バランスを整える為に、助っ人を余儀なくされた。

単純な戦力では、サイファ軍の方が圧倒的に大きいわけだが、なんせあれだけのメンバーが集まったダイユウサク軍だ。

まともにぶつかったら完全に負けるだろう。

後はしゃこ式がどれくらい強いのか、そこにかけるしかない。

でもテレビ局の人達は、サイファ軍の楽勝だと思っているみたいだ。

そうなる事を期待するよ。

アライヴ「まっ、でもしゃこたんと一緒に戦えるんだから、楽しみましょうか！」

サイファ「でもさ、ドリームとの一騎打ちには手出し無用って言われてるからね。結局俺達は何の為

にいるんだろうか。」

真でれら「テレビ局につれて行かれなかっただけマシだな。」

そうなのだ。

最初は、主力はみんなテレビ局でやってくれとか言われたもんな。

なんとか断って、テレビ局でやるのは、しゃこたと夢さんだけになったけれど、ホント危なかったよ。

アライブ「でも、ゲームが注目されるのは嬉しいねw」

真でれら「だな！」

サイファ「そろそろ時間だ。通信も放送されるらしいから、下手な事言わないようにw」

下手な事を言わないようにと言われても、何が下手な事なのか。

とにかく、なるべく喋らないようにしよう。

そして間もなく21時になった。

サイファ軍 v s ダイユウサク軍の、茶番とも言える戦闘が始まった。

最初から楽しめるように、要塞のすぐそばからゲームはスタート。

索敵も作戦も何もない。

俺と今日子さんとLOVEキラさんは、すぐに出撃した。

グリードさんや薔薇の貴公子さんの姿も見える。

今日は全員集合のようだ。

ま、全員集合させないと、ダイユウサク軍には対抗できない。

かたやダイユウサク軍は、参加したい人だけが参加しているようだ。

ダイユウサクさんはもちろん、スターさんもビューティフルベルさんもない。

キャンサー「しゃこたん行きまーっす！（笑）」

テレビの視聴者サービスか、いつもは言わないような事を通信で言っていた。

しゃこたんも出撃し、向こうからはドリームとカズミンも近づいてくる。

いよいよ戦闘だ。

とは言っても、さりげなくしゃこ式 v s ドリームを演出しなければならない。

俺はなんとなくカズミンに攻撃する。

すると向こうもぎこちなく、俺に攻撃してきた。

お互い本気で戦ってはいけない気分なのだろう。

そんな中俺達は、ジワリジワリと、しゃこ式とドリームから離れた。

さて仕方なくそうなったとはいえ、俺はカズミンと1対1の状況になった。

こんな面白そうな状況はそうそうない。

俺は素直に、全力で戦いたくなってきた。

全力で戦っては駄目だなんて言われていない。

言われていないが、気合がはいらなかったのもまた事実。

それが今、絶好の舞台に、気分が高揚していた。

軍の通信は全てテレビで放送されているので、俺は個人通信でカズミンさんと話をした。

アライブ「本気でやりませんか？」

相手もノリきれていないのは明らかだったので、俺は真剣勝負を申し込んだ。

カズミン「いいですねえ！一度対戦してみたかったです。」

カズミンさんもどうやら同じ気持ちだったようだ。

アライブ「では、本気で行きます！」

カズミン「オッケー！」

こうして俺達は、しゃこ式とドリームの戦いが繰り広げられる隅で、本当の真剣勝負をする事になった。

頂点の戦い

テレビの放送とは関係の無いところで、俺とカズミンの戦いが始まった。
部屋にあるテレビでは、しゃこ式とドリームの戦いが放送されていたが、もうそちらを見る事はできない。

相手は夢さん以上とも言われる実力者、カズミンさんだ。
以前今日子さんが戦って、その強さは理解している。
ドリームの強さを一言でいえば、スピード。
かたやカズミンさんは、巧いと言われている。
こういう戦いで、ハッキリどちらが強いと判断するには、それなりの力の差が必要だ。
それは、相性ってものがあるから。
だからどちらが強いとか、そういう話は、戦ってみるまでわからない。
それも俺から見た強さって事になるわけだが。
まずは様子を見て、長距離から狙い撃ってみる。
普通にそれをかわして、普通に反撃してきた。
相手がドリームだったら、力を誇示する為にまっすぐ突っ込んでくるが、カズミンさんは突進してくる事はないようだ。
今のところ強さの欠片も感じない。
でも、強いと言われている人。
油断はできない。
今度は、最初にビーム砲でけん制してから、2発目のビーム砲を当てに行く作戦だ。
思ったとおり減速し、1発目のビーム砲をかわして来た。
俺は2発目を狙い撃つ。
とその時、こっちが2発目を撃つ前に、向こうから攻撃が飛んできた。
一生「うお！」
ビーム砲をかわすタイミングで狙い撃ってきた？
なるほど巧い。
だが、カウンターなんてものは、戦いでは常套手段。
それくらいやる人は山ほどいる。
よし、今度はそのカウンターにカウンターを返してやる。
そう思ってビーム砲を発射しようと思ったら、今度はこちらが撃つタイミングで撃ってきた。
一生「やべ！嫌な攻撃してくるな。」
それに正確だ。
並のプレイヤなら、コレでジエンドだったかもしれない。
出し惜しみしても仕方がない、俺はフェネルを展開した。
これあつての俺なのだ。
フェネルの攻撃と呼応して、俺は攻撃を強めた。
しかし直後、4機のフェネルが一瞬にして墜とされていた。
動きに規則性があるとはいえ、小さなフェネルを落とすのは、簡単ではない。
それでも時間をかければ墜とされる事もある。
でもこんなに早く、1発のミスもなく、完全にフェネルを墜とすとは、なんだこの人は。
チョビのように高性能の盾を持っているわけでもないのに。
みんなが巧いと言うのが、本当の意味で理解できた。
それでも、巧いだけでは俺は倒せない。
夢さんには圧力を感じたが、この人からは圧力を感じない。

俺は今度は、カズミンへの接近を試みた。

と同時に、正面からビームが飛んでくる。

俺は左にかわそうとしたが、一瞬見えたカズミンの動きに、咄嗟に上へとかわしていた。

本来移動していたであろう場所を、ビーム砲が通り過ぎた。

なんだこの人、俺の動きが分かるのか？

確かに、ビームをかわす時には、左右どちらかにかわす事がセオリーだ。

何故なら、人型は縦に長く、上下だとそれだけ大きく移動しなければならないからだ。

だから左右どちらかだと山を張って攻撃する事はある。

でも、カズミンさんの攻撃には、何故かそうは思えない何かがある。

よし、もう一度。

俺は再び突進を試みる。

同じように正面からビームが飛んできた。

今度は最初から、上にかわそうとした。

するとやはりというか、上に攻撃が飛んでくる。

おそらく来るだろうと思っていたから、なんとかギリギリのところであたらないが、これはやはり読まれている。

強い敵を前に、俺はテンションが上がってきた。

この人に勝つなんて、面白すぎる。

俺はどういうわけか、負ける気がしなかった。

次はシールドフェネルを出した。

出したのは1枚だけ。

これなら撃ち落とされる心配はない。

なんせ盾だから。

もちろん、威力の強い攻撃や、何度も攻撃を受けていれば破壊されるが、見たところ、カズミンに強力な武器は見受けられない。

俺は再び突進を試みた。

正面にビームが飛んでくる。

俺は右にかわそうとする。

すぐに右側への攻撃をするカズミン。

しかしこれはフェイント、シールドフェネルを盾に、俺は真っすぐ突っ込んだ。

今まで落ち着いた動きをしていたカズミンが、初めて大きく移動する。

ようやく人型の戦いが始まった感じだ。

俺は尚も追いつがる。

正確な攻撃は、最小限の回避とシールドフェネルで凌ぐ。

もうすぐ近接戦闘に持ちこめる。

そう思った時、俺が武器をビームソードに変更する直前のタイミングで、カズミンが進行方向を急に变えてこちらに向かってきた。

絶妙なタイミングだ。

これだと、ビームソードに切り替えたとしても、一拍攻撃が遅れる。

だがこれは計算済み。

カズミンさんならこれくらいはしてくると予想していた。

おれはフェネルダガーを出した。

数は2機。

実はフェネルダガーは、2機までなら、自分で操作する事ができる。

その場合両手の操作機能を失うが、代わりに両手のようにフェネルダガーを動かせるというわけだ。

手ほど自由には動かないが、どこまでも伸びる手を操るような感覚になる。

だか攻撃する刃の部分が短く、決して使える武器とは言えない。

それでも、意表を突く事はできたはずだ。

さあ、この攻撃をかわす事ができるのか？

と思った瞬間、フェネルダガーは2機とも斬り落とされていた。

お互い爆発を避けるように後方へと下がった。

カズミン「今のはなかなか危なかったよ。でも、そういった奇策は、うちのチサトさんが得意なんだよね。日頃から戦いなれているんだよ。」

アライヴ「なるほど。真っ向勝負でしか、カズミンさんには通用しないのかなwではそうしょうか。」

俺の通信は強がりだった。

カズミン「そうだね。一通りアライヴさんの戦い方は見たし、もう僕は倒せないと思うけどね。」

アライヴ「倒せるのは夢さんだけ？」

カズミン「今なら8割は僕の勝利だよ。もう手の内が分かっているからね。それでも時々負けるのは、やはりあの人が強いからなんだけど。」

アライヴ「では、俺なら五分の戦いができるな。」

強がりだったが、楽しくて負ける気がしなかった。

カズミン「イイネ！では、楽しませてもらうか。」

俺達は再び、戦闘を開始した。

運命の大金星

カズミンとの戦いは、俺の防戦一方になっていた。

とにかくこちらが嫌だと思うところに、正確に攻撃してくる。

このままでは、確かにカズミンさんの言ったとおり、俺に勝ち目なんてないだろう。

でも俺の気分は、強い敵を前に良い感じだ。

考えるな。

俺は頭は悪いが、今まで戦ってきた経験は、きっと体を動かしてくれる。

このゲームの戦場経験なら、俺は誰にも負けない。

普段、バトルグリードとか、他のゲームをしているような人には絶対負けるはずが無い。

俺は無意識に反撃に出ていた。

画面の隅には、しゃこ式とドリームの戦いが見えた。

ドリームの一方的な勝負だが、しゃこ式が墜ちる様子はない。

どれだけ強い人型なんだ。

あんな戦いを見せられて、テレビの向こうの人は楽しめているのだろうか。

本当に茶番だ。

片腹痛い。

すぐそばで、このゲームでの最高レベルの戦いが繰り広げられているのに。

しゃこたんも可哀相だなあ。

芸能人ってのはこんなものなのかな。

本人は絶対に、これがバカバカしい勝負だと思っているはずだ。

それでもテレビに映るしゃこたんは、笑顔で楽しそうにゲームしている。

プロだなと思った。

戦いは、互角以上の戦いができていると思う。

体は勝手に動き、カズミンを追い詰める。

カズミンの驚いた顔が目に浮かぶ。

と言っても、あった事も無いし、どんな人なのかも知らない。

ただ、二次元変換された、想像上のカズミンが、驚いている顔を想像した。

笑みがこぼれた。

行ける！もう少しだ。

だがここまできて、俺は少し色気を出してしまった。

最後は敵背後に回り込み、ビームソードで斬りつけて勝ちたいと。

いや、そうすれば勝てると、頭で考えてしまった。

待ってましたと言わんばかりに、背後へ回ろうとするテンダネスの後ろに、カズミンが回り込んだ。

一生「しまった！」

部屋で声をあげてしまったがもう遅い。

此処まで追いつめておきながら、俺は負けるのか。

でも此処までやれたのだから、満足するべきか。

俺は再び無意識の領域に、無意識に入っていた。

テンダネスを素早く裏に切り替えていた。

最近あまり使っていなかった、裏テンダネス。

人型戦で強い敵と戦っていなかったから。

そして今日の戦いでも此処まで使う事はなかった。

流星に意表をつかれたか、カズミンの動きが止まっているように見えた。

俺は正面から、カズミンを斬り裂いていた。

その後も、カズミンを何度か斬りつけ、とうとう戦闘不能状態にしていた。

勝った。

カズミンに勝った。

一生「よっしゃー！！」

俺は部屋で一人吠えていた。

その後、チサトさんやダイスケさんがやってきて、戦闘不能となったカズミンを回収していった。

こちらが回収して、人型の性能を調べたかったが、戦況はどうやらサイファ軍に不利なようだった。

俺達の戦いに誰も入ってこなかったのは、タイマンの邪魔をしてはいけないっていう、両軍メンバーの配慮だろう。

ここからはまた、通常の戦いに戻るのだなと思ったが、既に時間は22時になろうとしていた。

結局、しゃこ式v s ドリームは、引き分けで終わりそうだ。

テレビでは、司会の人在必死に状況をまとめていた。

サイファ軍が勝つと聞かされていたようで、ドリームを褒めるコメントばかりだった。

しゃこたん可哀相に。

そんな事を思いながら、俺はサイファさんの補給できないじゃまいか！に帰還した。

この戦いの直後、ジーク軍がサイファ軍へ大攻勢をかけようとしている事は、この時だれも思いもしなかった。

それぞれの戦い

テレビ放送が終わった後、俺は紫苑さんの支持で、少し紫苑軍領域方向に戻ったところで、宇宙の真ん中で紫陽花さんの迎えを待っていた。

俺がカズミンに勝った事を知り、ダイユウサク軍に勝負を挑むのは、今しかないって事だった。

戦力も、サイファ軍との戦いでかなり削られている。

まさかジークよりも先に、ダイユウサク軍と戦う事になるとは。

あんな茶番の後に攻めるのもなんだか罪悪感があったが、皆納得して受けた話した。

多くの査定ポイントも貰ったのだから、文句を言えるものでもない。

誤算は、俺がカズミンを倒した事であり、ドリームがずっと、しゃこ式と戦わざるを得なかった事。

しゃこ式は結局、何度攻撃をくらっても墜ちなかった。

要するに、大人の事情で無敵化されていたわけだ。

同情もするが、紫苑さんが攻めるというのだから、俺は喜んで従う。

後にジークに聞いた話だが、実はこのしゃこたんのテレビの企画は、ジークが持ち込んだ話で、この戦いの後、サイファ軍を攻める為の戦略だったらしい。

やはりジークの戦略は、常軌を逸していると思ったわけだが、この時はまだ、そんな事を知る由も無かった。

紫陽花さんのパープルフラワーに回収され、紫苑さんのパープルアイズ、スピードスター、他多くの艦船と共に、俺達はダイユウサク領域へと入っていった。

ダイユウサク軍はどうやら、最前線の移動要塞ぽてちで、迎え撃ってくるようだ。

移動要塞は、マップ内を自由に移動できる要塞で、宇宙全体でもそれほど数は多くない。

だから今までそれほど多く相手にしたわけではないが、正直厄介な要塞だ。

逃げ回る事もできれば、追いかける事もできる。

数値を見た限りでは、要塞戦艦ほど強くはないが、守りは要塞戦艦よりも堅い。

移動要塞のあるマップでは、撤退するにも一苦勞で、紫苑さんが勝負をかけている事がわかる。

まもなく土曜日が終わる時間で、これから24時間の戦いだ。

以前、美菜斗軍との戦いで学習した俺は、土曜日は昼寝が日課になっていた。

だから今日は大丈夫。

相手は手負いのダイユウサク軍ではあるが、これでようやく互角の勝負ができるくらいだ。

遠慮はいらない。

全力で戦う。

アライヴ「では行くよw」

紫陽花「よろしくね！」

チョビ「ママが200万円ってうるさいw」

ハルヒ「とにかくドリームを落とすまでは、頑張ってますので、早く倒してくださいね。」

俺達の作戦は単純だ。

俺がドリームを倒す。

その間、他はとにかく堪える。

カズミンはすぐには出てこられないだろう。

愛機の修理は今日中には終わらないだろうし、スペア機も、こんな前線においてあるとは思えない。

ドリームさえ倒せば、後は俺が順に落として行くだけだ。

そして今、俺は発進した。

時計は丁度0時を指していた。

戦闘が開始されて間もなく、サイファ軍から通信が入った。

ジーク軍が要塞戦艦を率いて、サイファ軍領域に入ってきているとの事だった。

要塞戦艦は現在、ジーク軍が2隻、後の1隻を所持しているのが、ランキングが10位前後のまさくん軍だ。

どうやらそのうち1隻を、今回の戦いに投入してきたらしい。

かなり本気なのが分かる。

本来なら同盟関係にある我が軍は、助けに行くのが当然かもしれないが、つい今しがた、こちらも戦闘状態に入ったばかりだ。

お互い、健闘を誓いあって、通信を切った。

ダイユウサク軍の戦いは、かなり有利に運んでいた。

ドリームが出てこなかったからだ。

考えれば分かる事だが、22時までテレビに出て戦っていたのだ。

すぐに出てこれるわけがない。

今、ダイユウサク軍は、エース二人を欠いた状態で戦っていた。

それでも俺は手を抜くことはしない。

ダイユウサク軍が、二人いないだけで、弱い軍になるわけではないのだから。

俺の思ったとおり、程なくしてダイユウサク軍の逆襲が始まった。

移動要塞

ダイユウサク軍との戦いは、最初から紫苑軍有利で進んでいた。
一部の紫苑軍メンバーから、楽勝だの、次はジークだの、楽観的な言葉が聞こえてきていたが、俺はそう簡単にはいかないと確信していた。

案の定、ダイユウサク軍の反撃が始まった。

移動要塞を、戦場のど真ん中へと移動して、尚且つ紫苑軍の艦船群へ突撃させてきた。

常識はずれの作戦だが、効果は大きかった。

バカでかい要塞、回避するのは大変だ。

となると、早いうちに回避行動を取らなければならず、艦船群の戦力が無きにひとしくなる。

更に、回避行動中の艦船を、敵チサトさんのダストが狙い撃つ。

サラ「どうやらチサトちゃんの作戦みたいね。」

いきなりサラさんからの通信が入った。

アライヴ「あれ？どうして？」

モニターに、小麗さんの月天が映し出された。

紫苑「今日は勝負だ。呼び寄せたw(^0^)」

紫陽花「それにサラさん達は、ダイユウサク軍とやる為に、うちの軍にきたんだしねw」

なるほど、これは心強い。

おとめ「おーいるいる！ダイスケ勝負だあ〜」

サウス「じゃあ俺はトイキをやるぜ！」

3人がそれぞれに出撃した。

小麗「移動要塞面白いv私が止める♪」

小麗さんは、月天の人型全ての出撃を終えると、単機で移動要塞へと向かって行った。

俺は心配もあったが、面白そうなので、小麗さんについて行く事にした。

小麗さんの操舵は華麗だ。

スピードならスピードスターの方が上だし、火力なら紫陽花さんの艦船にはかなわない。

パープルアイズは、今では丸みを帯びた艦船に改良されていて、小回りの利く対応力が売りだ。

それらと比べたら、小麗さんの月天は普通の艦船よりも少し縦長な感じなだけで、特に売りは無さそうだ。

その艦船を、どういったら良いか難しいが、そう「ぶんまわす」ように操る。

前作で、艦隊戦をやっていた時は、旋回する行為は、あまり良いとは言えなかった。

今回ももちろん、後ろから攻撃されているからって、旋回なんてしょうものなら、無能者扱いされるだろう。

でも月天さんの動きは、ただ旋回しているわけではない。

かわしながら旋回しているようだった。

小麗さんは、巧く移動要塞の突撃をかわしながら、要塞を攻撃していた。

しかし、このままでは罅が明かないし、要塞の兵器を無力化しても、突撃は止められない。

俺は要塞内に突入し、要塞を奪取する事を思い立った。

これさえ抑えれば、俺達の勝利は確実だ。

ドリームもいない、カズミンもいない、ビューティフルベルさんって指揮官もどうやらないようだ。

チャンスは逃さない。

俺はただ一人で、要塞の入口へと向かって行った。

要塞内へは、意外と簡単に入る事ができた。

流石にもう守りを固める余裕は無いということか。

俺が要塞を攻略する間に、ドリームやカズミンが助けに来てくれればいいってことなのか。
ダイユウサク軍が、此処にいない人を当てにするような戦い方をするとは思えないが、何かあるなら、進んでいけば分かるだろう。

俺は、要塞内の防衛システムによる攻撃をかわし、破壊しつつ、中を進んでいった。

気がつけば、既に拠点エリアへと到達していた。

此処から先は、迷路である。

後は司令室までたどり着き、特定の操作をするだけだ。

ダイユウサク軍は、本当に打つ手が無かったのだろうか。

拠点エリアにわざわざ人型を置く利点なんて無いし、そう考えるしかない。

俺は一応通信を入れた。

アライヴ「拠点エリアに突入。未だ敵影無し。要塞奪取はもう少しまってねw」

するとサラさんから、気になる通信が入った。

サラ「おかしいわねえ。今日子の姿がないわね。地球側にもいなかったし、どうしたのかしら？」

今日子って言うのアレだ。

うちの暗黒天国さんと同系の人型だけど、それよりも火力重視の、歩く核兵器とも言える人型乗りだ。

あの人がいたら、すぐにわかる。

飛び交うミサイルが一気に倍になるから。

そんな人が戦場にはいない？

俺は、地球での戦いをふと思い出した。

あの、グリードさんがやられた拠点サハラ。

今は我が軍のアブサルートさんの人型、拠点の虎。

モニタを見た。

似ている。

あの拠点の内部構造に。

ゲームってのは、多くのデータを扱うので、結構色々なところで使い回される。

もし此処の拠点エリアと、地球のサハラの拠点エリアが同一のデータを使い回しているとすれば・・・

俺は咄嗟に進行をストップした。

すると横の通路から、大量のミサイルが壁に当たり、目の前で大きな爆発が起こった。

危機一髪だった。

やはりそういう事か。

司令室の直前で、今日子の人型トゥデイが待ち構えていた。

強敵トゥデイ

今日子の人型トゥデイとの戦闘は困難を極めた。

というか、敵人型を目視する事もできず、ただ足踏み状態を余儀なくされているだけとも言える。今からチョビを呼ぶにしても時間がかかるし、アブサルトさんの拠点の虎よりも火力のあるトゥデイだ。

チョビの盾も何処まで通用するか。

ダイユウサク軍が、ドリームとカズミンだけでは無い事は理解していたが、正直今度ばかりは鬱陶しい。

強いのではなく、酷いって感じだからだ。

普通に戦って負けるなら納得できるが、こんなのには負けたくない。

俺は自分の人型の装備を確認した。

シールドフェネルが2機と、フェネルダガーが2機まだ残っている。

フェネルも6機残っていた。

よし、一か八か、このフェネルダガーにかけてみよう。

俺は早速、それぞれの設定の変更作業に入った。

フェネルは、基本的に自らが操作する事は不可能だ。

だが、フェネルダガーだけは、両腕の操作をフェネルダガーに移す事で、操作する事ができる。

それでも、基本はやはりオートマティックなところが多い。

その自動で動く部分を、設定で色々決める事ができる。

今回の設定は、とにかく真っすぐ敵へ突き進むように、フェネルはとにかくビームを撃ちまくるように、それぞれの座標も調整した。

さて、まずは敵を目視し、敵対象としてロックオンしなければならない。

それは、大量の攻撃が飛んでくる場所へ出るって事だ。

俺は意を決して、通路の真ん中へと飛び出した。

正面にトゥデイが見えた。

ロックオン、と同時に、敵が攻撃を放ってくる。

こちらも瞬時に、タイミングよくシールドフェネル、フェネルダガー、フェネルと発射。

シールドフェネルの後ろにフェネルダガー、それを取り囲むようにフェネルを並べ、フェネルのビームは撃ち続ける。

そのまま直進だ。

その間俺は、敵の攻撃をかわし続ける。

シールドで多少のビームを止め、フェネルで多くのミサイルを撃ち落とし、此処まで飛んでくるのは約半数と言ったところ。

トゥデイは連続して攻撃してくる。

ギリギリまで腕のコントロールはこちらに残し、ミサイルは撃ち落とす。

なんとか行けそうだ。

そう思ったのもつかの間、思わぬ出来事が起こった。

一生「処理オチかよ！」

あまりのミサイルやビームの多さに、コンピュータが処理しきれなくて、動きがスローになる。

しかし実際では、動かないのは画面だけで、命中処理などは行われている。

もちろん、コントローラーからの操作もだ。

俺は画面からのわずかな状況から、全ての動きを予想して、コントローラーを操作した。

俺のPCは、最新の高性能PCなのに、これで処理オチしているって事は、相手もおそらく処理オチしているはずだ。

この状況さえ凌げれば、勝てる。

俺はまた、無意識の領域へと入っていた。

フェネルは次々と落とされ、シールドフェネルも破壊された時、俺は腕のコントロールをフェネルダガーに移す。

途端に両腕も破壊された。

肉を切らせて骨を断つ、というには、あまりにもダメージは大きかったが、フェネルダガーはトゥデイへと届いていた。

後は何度も何度も斬りつけて、トゥデイを破壊した。

何とか、トゥデイを倒す事ができた。

が、移動要塞を手に入れる代償に、俺は此処からの戦闘に参加不可能なダメージをくらった。

まさか両腕を失う事になるとは。

よく考えたら、この先ダイユウサク軍を攻め続けて行けば、何処かでドリームが出てくるだろう。

俺がやられたら駄目じゃないか。

そう思ったが、全ては後の祭りだった。

この後、ダイユウサク軍はすぐに、撤退を開始した。

移動要塞を占領した後、俺はトゥデイとの戦闘でやられた事をみんなに話していた。

というか、言い訳をしていた。

なんというか、ただの重火力機に、此処までやられてしまったのがなんだか悔しかったし、この後の戦いに参加できない事が、何より申し訳なかったから。

そもそも、処理オチしなければ、俺は普通に勝っていたと思う。

だから、そう通信で話していたのだが、サラさんの言葉に俺は驚いた。

サラ「今日子の戦い方は、処理オチを起こして、相手に回避させない事なんだよ。」

サラさん達ゴッドブレスの人達は、ダイユウサク軍のメンバーの戦い方をよく知っている。

そのサラさんが言うのだから間違いないだろうが、まさかそんな事まで狙って戦いをしているなんて。

アライヴ「ダイユウサク軍、恐るべしですね。」

ただの一兵卒だと思っていた人が、そこまで考えて戦ってくるのだ。

改めて恐ろしい人達なのだなと思った。

サラ「でも、こういう奇策は、ほとんどチサトの作戦らしいよ。」

チサトと言うと、ドリームダストのダストの方だ。

夢さんと並び称されるこの人は、サラさんの話によれば、魔女と呼ばれているらしい。

とにかく奇策で、相手を翻弄する。

バトルグリードでの勝率は、ドリームよりも低いが、ドリームとの対戦成績は、チサトさんのダストの方が勝ちこしているとか。

よく知る相手との戦いにはめっぽう強く、逆に知らない人との対戦では、力を全て発揮できない事もあるとの事。

ただし、元々ある程度の強さがあるので、そうそう負ける事はないそうだが。

エースの夢さん、夢さん以上とも言われるカズミン、それに今日子さんやチサトさん。

あの時の司令官、ビューティフルベルさんの頭の回転の早さは、人間とは思えない。

ゴッドブレスの2人の強さも並じゃない。

俺達は、こんなに素晴らしい人達を追い詰めているのか。

それだけに、今の自分の状態が歯がゆく、不甲斐ないと思った。

アライヴ「くそ！もっとダイユウサク軍とやりたかったなあ～こんな状態じゃ戦えないし。」

俺の本当の気持ちだ。

でももう、テンダネスは戦闘不能一步手前の両腕落ちだ。

戦いたくても戦えない。

そう思っていたら、紫苑さんが思わぬ事を言ってきた。

紫苑「何言ってるの？戦いはこれからでしょwキュベレイ取りに帰れよ！(^0^)」

確かに、俺の真の愛機はキュベレイだし、此処にあるなら今まで以上の戦いを約束する事もやぶさかではない。

それを取りに帰れと？

人型で往復したら、確かに6時間くらいで往復できるか。

それまでに決着がついているとも限らないが、ドリームがでてくれば、6時間後も戦いは続いているだろう。

アライヴ「分かった。ダッシュで取ってくる！」

俺は単機、自軍領域へと向かおうとした。

紫苑「おいおいw君の戦力は少しも無駄にはできないのだよ。星！送ってやってくれ！(^0^)」

スピードスター「♪」

紫苑「暗黒天国は、その間、紫陽花のパープルフラワーでよろしくw」

暗黒天国「おk！」

これはありがたい。

俺はまだ戦いたいのだ。

みんながサポートしてくれる。

俺は即行スピードスターに着艦した。

すると即座にスピードスターは、我が領域、有人要塞ネコミミへと向かった。

しばらくの戦線離脱だ。

次戻ってきた時は、夢さんも戦場にいるだろうか。

それとも俺達紫苑軍がこのままの勢いで、快進撃を続けているのだろうか。

俺はなんとなく、紫苑軍が負けている状況であって欲しいと、思ってしまった。

終演に向けて

有人要塞ネコミミへ向かっている間、俺は仮眠をとる事にした。

何かあっても、スピードスターに追いつける艦船なんておそらく存在しない。

俺はPCのボリュームを最大にして、到着目前になったら、通信音をならしてくれるよう頼んだ。

一応、航行予定時刻から到着時刻を割り出し、2時に目覚ましのアラームをセットする。

俺は布団に入った。

だけど、興奮して眠れない。

昼寝もしていたから、まだまだ起きていられる時間だ。

でも、今日もまた24時まで戦う可能性がある。

休める時に休んでおかないと。

結局、20分ほど意識がなかったが、ほとんど眠る事はできなかった。

起きてアラームを止め、星さんに通信を入れる。

アライヴ「もう起きましたw」

スピードスター「♪」

見ると、後10分くらいのところまできていた。

暇なので、勢力マップを広げてみた。

サイファ軍の重要拠点がいくつか、ジーク軍の領域へと変わっていた。

サイファ軍は押されている。

なんとか耐えてくれれば良いが。

でもふと思った。

このままサイファ軍が敗れて、俺達がダイユウサク軍に勝てば、そのままジーク軍との最終決戦って事になるのだろうか。

他にも沢山の勢力が残っているが、上位4軍との力の差は、たとえ4軍の大將が全てやられたとしても、覆るものではないだろう。

もしかしたら今日の戦いで、全てに決着がつくかもしれない。

俺は今初めて、今日の戦いの重要性を感じた。

ネコミミにつくと、俺はすぐにメイン機の変更と、一応テンダネスの修理を開始して、スピードスターにキュベレイを収めた。

すぐさまスピードスターが出港する。

ここからまた、帰ってきた道のりと、更にいくらかの航行をする事になる。

寝る事も少し考えたけれど、もう眠れそうに無かった。

そんな時、紫苑さんから通信が入った。

紫苑「今どこ？」

スピードスター「ネコミミでたところ♪」

何かあったのだろうか。

アライヴ「夢さん出てきたの？カズミン？」

紫苑さんがこんな通信をしてきたのは、早く戻ってきて欲しいって意味だと勝手に思っていたが、どうやら違ったようだ。

紫苑「いや、そこからだと、ERROR軍のコロニー、サイド3が近いだろ？」

スピードスター「そっちに戻るよりかなり近いね♪」

どういう事か、まだこれだけではわからない。

紫苑「今、まさくん軍が、要塞戦艦を伴って、サイド3に攻め込んでるみたいなんだよね。」

スピードスター「だから？」

なんだか嫌な予感がした。

紫苑「良い勝負してて、両軍ボロボロだって情報がw」

まさか・・・

紫苑「お前らだけで、要塞戦艦奪ってこれね？(^0^)」

ERROR軍は、現在6番手の軍で、そこそこの勢力だ。

かたやまさくん軍は10番手くらいだが、ERROR軍と比べると半分くらいの戦力。

でも要塞戦艦を持っていて、力は五分の対戦。

その戦場に乱入して、要塞戦艦を？

紫苑「既にレイズナーには向かわせてるが（笑）」

無茶な作戦だけど、案外簡単に要塞戦艦を手に入れる事ができるチャンスかもしれない。

それに、今日この後、ジーク軍と戦うなら、要塞戦艦はどうしても欲しい。

紫苑さんは、今日決着をつけるつもりだ。

アライヴ「やりましょう！」

スピードスター「♪」

俺と星さんは、たった二人だけで要塞戦艦を奪取するべく、スピードスターの進路を、コロニーサイド3へと変えた。

夢へ

コロニーサイド3に到着した時、戦場は荒れに荒れていた。

戦力の少ないまさくん軍が、倍の戦力を持つERROR軍に侵攻したわけだから、まさくん軍は全力で挑んだのであろう。

かたやERROR軍も、要塞戦艦相手では、全力で防衛しないと当然守りきる事はできない。

その結果、この空域に屍が散乱する事になったというわけか。

どうしてまさくん軍が、こうなる公算の高い戦いをしかけたのかは謎である。

もしかしたらジークが、まさくん軍が紫苑軍やダイユウサク軍に味方する事でも恐れて、何か策を弄したのかもしれない。

もしそうなら、バカな事をしたものだって感じだが、俺の考えはただの憶測だ。

とにかく状況は完全に、二虎競食の計。

いや少し意味が違うな。

ふたつの勢力が戦って、疲弊したところを討つ事ができる状況だ。

俺はスピードスターから出撃した。

正に、敵の両軍は疲弊していた。

そこそこの使い手、いや、かなりの使い手もいたようだが、人型が完全ではなさそうで、俺の敵ではなかった。

完全な状況なら、俺も手こずっていただろう。

両軍の頑張りに感謝だ。

要塞戦艦への接近は、スピードスターの甲板に乗せてもらって、一気に近づいた。

かなり傷んでいるとはいえ、要塞戦艦にはそれなりの攻撃力があつた。

でも、かなり弱っているこれを奪って、意味があるのかと考えたが、要塞戦艦の最大のメリットは、要塞機能があるって事だ。

修理もできれば補給もできる。

艦船でもできるが、応急処置的なところもあるし、やはり要塞の方が良い。

それに通常の攻撃で落とされる事が無いのがいい。

攻略には、拠点の攻略と同様の手順が必要なのだ。

一応言っておくが、攻撃を受け続ければ、戦闘不能にはなるけれどね。

簡単に、要塞戦艦は、我が紫苑軍の物となった。

当然俺の強さがあってこそだが、間もなく到着したレイズナーさんには、そうは思われていないようだ。

レイズナー「なんだよ。上手い具合に両軍死んでるな。こんなの誰でも落とせるんだから、任せてくれりゃいいのにw」

いや、光合成さんもいるし、戦力も断然上だから落とせるとは思うけど、そんなに簡単にはいかなかったと思うよ。

少なくともレイズナーさんより強い人は沢山いたから。

言いたい事を胸の奥にしまって、俺はレイズナーさんに後を引き継いだ。

すぐにスピードスターに戻ると、再びダイユウサク軍領域に向かって発進した。

航行中、紫苑さんから入ってきた通信によると、ダイユウサク軍はどうやら、本拠地の有人要塞ドリームダストを決戦の場にしたようだ。

一応、コロニーと有人要塞には、誰かを残して進んでいるらしい。

もし何処かにひそんでいれば通信がくるはずだが、通信はない。

それに相手はダイユウサク軍、戦いは真っ向勝負してくるだろう。

そして、今度は夢さんも必ず出てくる。

カズミンさんも出てくるかもしれない。

次が本当の対決だ。

こちらは大將紫苑さんが陣頭指揮を取っているわけで、勝つか負けるかの勝負になるだろう。

そして勝った方が、ジークに挑む。

あの時、ジークを助けなければゲームが終わっていたかもしれないとは言え、ジークを助けたのは本当に正しかったのか考えさせられる。

助けた事が正しかったと言えるのは、おそらくジークに勝って宇宙統一を果たした軍だけだ。

その軍に、紫苑軍は手の届くところまできている。

長かった。

ゲーム開始から、既に3年目。

紫陽花さんが言っていた。

5年くらいは続けてもらわないと、会社としては辛いとか。

ちゃんと20億払ってくれるのかね。

紫苑さんから通信が入った。

紫苑「これより、ダイユウサク軍と、再び戦いを開始する。4時41分。(^^)」

時計は既に、4時42分になっていた。

始まったか。

こちらも高速でとばしているから、到着は5時くらいか。

十分間に合ったと言えるだろう。

俺は人型キュベレイの中で待機する。

補給も整備も終わっている。

完璧だ。

そして間もなく、スピードスターは戦場に到着した。

戦場に入ると、俺はすぐに発進した。

ざっと状況を確認する。

すぐに見つけた、ドリームの名前。

どうやらサラさんが抑えているようだ。

防戦一方だが、俺以外に夢さんを抑えられる人がいた事は、紫苑軍にとって大きな幸運だったと言えるだろう。

チサトさんの相手は、じえにいがしているようだ。

バトルグリードでドリームにも勝った事があるらしいじえにい。

じえにいは初戦にめっぽう強い。

話によると、チサトさんは手の内の見えない相手には弱いらしいが、二人は何度か対戦しているはずだ。

じえにいに不利な状況と言えるかもしれないが、俺の目には互角に見える。

おっと、ビューティフルベルさん、地球から上がってきたのか。

どおりで、数で圧倒しているのに、攻めあぐねているわけだ。

ダイスケさんとトイキさんのコンビには、同じくゴッドブレスのおとめさんとサウスさん、それにチョコビも加勢している。

2対3で互角か。

というか、相手のコンビネーションは見事だ。

3人で勝てないのも納得。

それにしても、カズミンさんがいない。

何処かにひそんでいるのだろうか。

まあ良い。

俺の相手は、夢さんだ。

そう決めて、俺はドリームへと向かっていった。

ドリームダスト

午前5時、俺はドリームへ向かって飛翔した。

いよいよ、あの夢さんと戦う。

サラさんはさりげなく、ドリームから離れて行く。

1対1で戦わせてくれるようだ。

前に戦ったのは、ゲームが始まって半年くらいだったか。

そこから2年は経っている。

そういえば、あの時も今と同じ、キュベレイだった。

少し地球でも戦えるように改良はしたが、特に大きくは変わっていない。

ドリームもパッと見た感じ同じような機体だが、あの時は移動に特化したカスタマイズがされていたはずだ。

今日のドリームは、あの時とは違う完全体だ。

ドリーム「カズミンに勝ったんだね。」

夢さんが通信してきた。

個人回線なので、特に拒否する理由もない。

アライヴ「時の運だとは思うけど、なんとかねw」

ドリーム「そうそうカズミンはもう、今日の戦いは出てこないよ。」

そんな事をわざわざ教える必要はないと思うが、なんとなく強者のらしさだなと思った。

負けたらもう戦えない。

戦場なら当然だ。

カズミンさんは、そういう枷を自らにかけているのだろう。

それともただ、人型があれだけだったのかもしれないが。

アライヴ「そっかwじゃあ、この勝負で勝った方が、ナンバーワンだねw」

俺は、人型乗りで1番って事はもちろんだが、このゲームの優勝もきっとそうなると思っていた。

ドリーム「だね。じゃあ、そろそろ行くよ！」

アライヴ「いつでもw」

少し時間をおいて、俺達の戦いは始まった。

戦いは、どうやら俺の方が優位に戦えているようだった。

今までテンダネスで戦ってきたが、やはり俺にはキュベレイの方があっているのだろう。

スピードはテンダネスの方が上だが、瞬発力と火力は、キュベレイの方が上だ。

人型同士の戦いでは、やはり瞬発力は最重要能力だと思う。

ま、人型でマップ間移動して自軍領域に戻る時とか、艦船の壁を突破する時は、テンダネスの方が良かったのかもしれないが。

少し苦笑いした。

後は、背後さえとられなければ、俺は勝てる。

テンダネスで戦ってきて、背後への警戒感が、少し薄れているようだから。

俺は今もまた、体の感覚に任せて、ドリームと戦っていた。

大人気アニメガンダムでは、ニュータイプと呼ばれる人々が出てくる。

もしリアルにそれがあんなら、無意識の中のこの戦い方こそ、ニュータイプの領域なのかもしれない。

俺はフェンネルを展開していた。

いよいよドリームを追い詰める。

それでもドリームは、前に出ようとする。

まだ気持ちでは負けていないようだ。

俺は無意識に、こちらもまた迎え撃つ形で前にでた。

刀を持った武士が、すれ違いざまにお互いを斬りあって、どちらかが倒れるあの場面を、今まさに実現しようとしていた。

しかし、俺はすれ違う前に、ドリームにビーム砲を命中させていた。

バランスが崩れたドリームに、俺は追い打ちをかけた。

そして間もなく、俺は勝利していた。

夢さんから通信が入った。

ドリーム「最後、まさか撃ってくるとはねw斬り合うフリして、背後に回ろうと思っていたんだけど。」

そうだったのか。

もし俺が、頭で考えて動いていたら、負けていたのだろうな。

バカは考えない方が良いのだ。

俺はニュータイプになったのだ。

アライヴ「ありがとう！」

俺は何故かお礼を言っていた。

俺が強くなれたのは、夢さんのおかげだとか、そんな事をこの時考えていたわけではない。

ただなんとなく、そう言った。

少し照れくさくなった俺は「じゃ！まだ戦闘中だから！」と言って、戦いの中に入っていった。

戦いは、どうやら紫苑軍が有利なようだ。

敵主力プレイヤーはまだ健在だったが、戦力には大きな差があいていた。

勝ったなと思った。

その時だった。

じえにいと戦闘中のチサトさんが、こちらに攻撃してきた。

別に油断していたわけではないが、意表をつく攻撃に、ギリギリかわしたものの一瞬方向感覚を失った。

その隙を逃す事なく、敵の人型が俺の背後をとっていた。

早いな。

強い人がまだ他にいたのか。

機体名ブライト、名はウララ。

だけど、今の俺は強いよ。

背後をとられたくらいで、そう思ったが、俺はあっさりと背中から、ブライトに斬りつけられ、そして戦闘不能になっていた。

テンダネスで戦い続けていた癖で、裏に切り替える操作をしてしまった。

そこに運悪く、艦船からの強力なビーム砲が飛んできた。

俺はモロに直撃していた。

そして・・・死んだ。

エピローグ

午前5時28分、俺は、ダイユウサク軍を追い詰めたところで、完全破壊されて死んだ。

でも、それが戦況を大きく変える要因にはならなかった。

俺達紫苑軍は、ダイユウサク軍の大將、ダイユウサクさんを倒し、ダイユウサク軍を消滅させた。

ダイユウサクさんは後継者を設定せず、軍の消滅を選んだ。

すると、ダイユウサク軍のプレイヤーが、こぞって紫苑軍へと入ってきた。

最初から決めていたらしい。

ドリームもカズミンも負けて、ダイユウサクさんがやられる事があったら、素直にその相手に協力しよう。

俺を失っても、紫苑軍の作戦行動は止まらなかった。

多くの強力な仲間を得て、一旦ネコミミに帰還する。

そこで補給を済ませた後、レイズナーさんが用意していた要塞戦艦と共に、ジーク軍領域へと侵攻を開始した。

この時まで、ジーク軍の主力部隊は、サイファ軍に勝利していなかった。

本来なら、既にサイファ軍を殲滅させる事ができていたらしい。

実は、サイファ軍が消滅したら、その多くのプレイヤーが、紫苑軍に入る事を恐れていたようだ。

だからそれに対抗する策として、主要プレイヤーを死亡させようとしていたのだ。

しかし、プレイヤーキルのマイナス面は大きい。

そこで、戦闘不能にした相手を3時間監視し、タイムリミットによる死亡を狙っていたようだ。

サイファ軍のプレイヤーをキルする作戦は、間違っただけではなかっただろう。

サイファ軍とはひそかに、どちらかがもう駄目だという状況になったら、もう一方の軍に入り、協力する事を決めていたから。

だけど、3時間という時間は、ジーク軍の防衛行動を遅らせた。

紫苑軍は運よく、各個撃破に成功した。

要塞戦艦が防衛に1隻、サイファ軍攻略に1隻使われていて、1隻ずつ相手にできた事は、紫苑軍の大きな勝因だ。

この日のうちに、ジークを倒す事に成功した紫苑軍は、1週間で、地球のジーク軍の残党と、弱小軍を次々と呑み込んでいった。

そして今日の朝、俺は1週間の呪縛が終わり、再び紫苑軍に復帰していた。

と言っても、もう攻略する場所は、地球に1か所、海底都市アクアだけだ。

俺はモノトーンで出撃する。

久しぶりの戦闘が、ほぼ確実に最後の出撃だ。

せっかくレベルを上げたモノトーン、最後に使えて良かった。

敵は水中戦の得意なプレイヤーばかりだが、こちらのメンバーは半端なく強い。

負ける要素など全くない。

結局、1時間もしない間に、アクアを落とした。

紫苑軍の優勝だ。

9回裏2アウトの楽勝場面で、わざわざ最後の瞬間に立ち会う為だけにリリースに出された気分だが、俺は嬉しかった。

一生「よっしゃ！」

部屋で一人ガッツポーズするニート。

だけど明日からは、ニートなんて呼ばれる事は無いかもしれない。

なんせ大量の賞金が、俺の手に入るのだから。

夕方、全ての銀河バリューネットの会員向けにメールが届いた。

宇宙の絆Ⅱの、最優秀プレイヤー投票にご協力ください、そういった内容だ。

俺は誰に投票しようか迷ったが、自分には投票できないって事で、やはり紫苑さんに投票した。

優勝できたのは、やはり紫苑さんのおかげだろう。

次の日、集計された、査定ポイントと一緒に、賞金の分配表が、サイトに掲示された。

1位 紫苑 189675ポイント。

2位 アライヴ 189674ポイント。

なんと、1ポイントで紫苑さんに負けて2位だった。

投票ポイントは一人2ポイントだったから、俺の投票した分で負けた事になる。

ちょっと後悔しなくもなかったが、妥当だと思ったので、納得する事にした。

金額は、紫苑さんが6億円。

俺が4億円。

アライヴ「やっぱり納得いかねえ！！」

紫苑「俺はお前に投票したぞw(^0^あぶねw」

お互い、お互いを投票していたわけだから、仕方ないか。

あの時、ウララさんだったかにやられなければ、俺は1位だった。

全ては自分の力だ。

チョビは、1000万円か。

お母さん、マジでビビるぞw

あなたがやらせたくなかったゲームで、当時小学生だった子供が、1000万円ゲットしたんだから。

じえには2000万円か。

良い仲間を持ったよ。

サイファさんが3位で2億円か。

紫苑軍との同盟が評価されたのかな。

テレビ出演のポイントも大きいと言われているから、それかもしれない。

ダイユウサク軍の中では、夢さんの4位が最高。

でもざっと見ると、15位くらいまでは、どう順位が入れ替わっていても、おかしくなかったかもしれない。

勝敗は本当に繊細で、ほんの一瞬のタイミングのずれで、どう変わっていたか分からない。

もしかしたら、人生も同じで、ほんの小さなきっかけで何かが変わるのだろう。

ゲームが好きで、偶々参加した宇宙の絆Ⅱ。

これで、死ぬまで働かなくても、生きていけるだけのお金を手に入れてしまう事もあるのだから。

後日、紫苑軍、サイファ軍、ダイユウサク軍の面々は、一同に集まってパーティーをした。

紫苑さんの企画で、もちろん紫苑さんのおごり。

夫婦で6億5千万円貰ったのだから、それくらい当然か。

俺も、ビンゴ大会の商品を提供させてもらった。

その時の出会いがきっかけで、俺はゴッドブレスに入って、ゲームの賞金稼ぎをする事にした。

だって、ゲームって面白いんだもん。

小学生でも、大人と対等に戦える世界。

貧乏人も金持ちも平等にやれる世界。

実は、ゲームの世界が、理想の世界なのではないかと、勝手な事を思いながら、この話の終了とさせていただきます。

また、どこかのゲームでお会いできれば幸いです。

それでは。

「宇宙の絆Ⅱ」を読んでもうございまして、ありがとうございます。
本当はもっと色々話を考えていたのですが、その場のノリを重視していたら、話が勝手に終わってしまいました。
色々メモに書きためたアイデアは、また別の場所で披露できればと思います。
ちなみにこの話は、諜報活動のところ辺りまでは、2008年頃に書いていました。
しかしそこでテンションが続かず、しばらく放置したり、偶に1話だけ書いてみたり。
で、2011年に、その後を一気に書き上げました。
苦労したのは、設定が多くて複雑な事。
沢山の人が登場する話は、本当に大変です。

2008～2011年 秋華

宇宙の絆 II

<http://p.booklog.jp/book/48858>

著者：秋華

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48858>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48858>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.